

# 湊川短期大学紀要

## 第 60 集

### 原著論文

- 「オノマトペ」に対する保育学生の意識に関する研究  
—保育の中のオノマトペ探しをとおして—  
.....佐藤 奈美
- 思考場療法による心身のバランス調整の検討  
—圧痛領域は心身のバランスを表しているのか?—  
.....小原 宏基
- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についての学生の学び  
—保育者養成における授業実践を通して—  
.....西垣 あおい
- 幼稚園実習における音楽活動についての一考察  
—聞き取り調査分析報告を踏まえて—  
.....前川 尚子
- Effects of lifestyle on autonomic nervous activity in pre-school children  
..... Takashi MATSUO · Shintaro TSUJI  
Miyuka TOKUSHIMA · Nobuhito NAGAI  
Keisuke ORITA · Tatsuya USUI
- 大学図書館企画展示と連動した e-Learning の教育効果に関する研究  
.....山田 哲也・安井 良尚・静 和美
- 保育者養成校における音楽教育について  
—とくに幼児教育の「3文書」と西洋近代の教育思想を中心に—  
.....吉田 雅代
- 保育士試験「保育実習理論」音楽分野に関する一考察  
—養成校での取り組みを考える—  
.....高嶋 智美
- ICTを活用した領域「環境」によるアクティブ・ラーニング型授業の展開についての一考察  
.....藤田 貴久

湊川短期大学

2024

# — 目 次 —

## 原著論文

「オノマトペ」に対する保育学生の意識に関する研究

—保育の中のオノマトペ探しをとおして—

.....佐藤 奈美..... (3～8)

思考場療法による心身のバランス調整の検討

—圧痛領域は心身のバランスを表しているのか?—

.....小原 宏基..... (9～12)

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についての学生の学び

—保育者養成における授業実践を通して—

.....西垣 あおい..... (13～18)

幼稚園実習における音楽活動についての一考察

—聞き取り調査分析報告を踏まえて—

.....前川 尚子..... (19～22)

Effects of lifestyle on autonomic nervous activity in pre-school children

..... Takashi MATSUO · Shintaro TSUJI · Miyuka TOKUSHIMA

Nobuhito NAGAI · Keisuke ORITA · Tatsuya USUI..... (23～26)

大学図書館企画展示と連動した e-Learning の教育効果に関する研究

.....山田 哲也・安井 良尚・静 和美..... (27～30)

保育者養成校における音楽教育について

—とくに幼児教育の「3文書」と西洋近代の教育思想を中心に—

.....吉田 雅代..... (31～40)

保育士試験「保育実習理論」音楽分野に関する一考察

—養成校での取り組みを考える—

.....高嶋 智美..... (41～48)

ICT を活用した領域「環境」によるアクティブ・ラーニング型授業の展開についての一考察

.....藤田 貴久..... (49～56)

# — CONTENTS —

## Original investigations

- Research on childcare students' awareness of "onomatopoeia"  
—Through searching for onomatopoeia in childcare—  
.....Nami SATO ..... (3 ~ 8)
- Examination of mental and physical balance adjustment by Thought Field Therapy:  
—Do the sore spot represent our mental and physical balance ?—  
..... Hiroki OHARA ..... (9 ~ 11)
- Student learning about “What We Want You to Develop by the End of Early Childhood”  
—Through classroom practice in Childcare Worker Training—  
..... Aoi NISHIGAKI ..... (13 ~ 18)
- A Consideration on Music activities in Kindergarten Training.  
—Based on the Interview survey analysis report—  
..... Shoko MAEGAWA ..... (19 ~ 22)
- Effects of lifestyle on autonomic nervous activity in pre-school children  
..... Takashi MATSUO · Shintaro TSUJI · Miyuka TOKUSHIMA  
..... Nobuhito NAGAI · Keisuke ORITA · Tatsuya USUI ..... (23 ~ 26)
- Educational Effects of e-Learning Linked to the Planned Exhibition in a College Library  
..... Tetsuya YAMADA · Yoshihisa YASUI · Kazumi SHIZUKA ..... (27 ~ 30)
- About Music Education at a School for Training of Nursery Teachers:  
A Focus on 'The Three Documents' of Early Childhood Education in Japan and Modern Western  
Educational Thoughts  
.....Masayo YOSHIDA ..... (31 ~ 40)
- A study on the music field of the “Theory of internship at Nursery school ”for the nursery teacher examination  
—considering the efforts at the training school of nursery teacher.—  
..... Tomomi TAKASHIMA ..... (41 ~ 48)
- A study on the development of active learning classes using ICT in the area of “environment”  
..... Takahisa FUJITA ..... (49 ~ 56)

# 「オノマトペ」に対する保育学生の意識に関する研究

—保育の中のオノマトペ探しをとおして—

Research on childcare students' awareness of "onomatopoeia"

—Through searching for onomatopoeia in childcare—

佐藤 奈美

Nami SATO

湊川短期大学 幼児教育保育学科

## 要旨

子どもの言葉の発達を支える上でオノマトペが大きな役割を担っており、実際に保育現場は保育者や子どもが様々な場面で用いる。本研究では学生が実習において印象に残ったオノマトペの記録から、使用傾向や学生の視点について着目した。加えて学生のオノマトペへの意識の変容をテキストマイニングによる分析で明らかにし、学びの過程を検討することを目的とした。KH Coderによる自由記述の分析から、実習での「オノマトペ探し」を通して学生の考えや意識が深まっていく様子が見られた。知識だけでなく学生自身の実体験から日常生活から意識することや、オノマトペの影響など本質的なことを考え、保育実践に繋げる深い学びにつながった。いずれにおいても、オノマトペを意識していなかった学生の意識が変容していく学びの過程が明らかになった。

キーワード：言葉、質的研究、保育者養成、テキストマイニング、オノマトペ

## 1. 研究の動機と背景

子どもの言葉の獲得には、他者と感情や物事を分かち合える温かな関係を基盤として、指し示す対象と言葉との対応に気付き、理解すること、それを相手に伝えようとする気持ちが育つことが必要である。保育者はそうした発達を支えていく上で、乳幼児期は言葉のもつ響きやリズムの面白さや美しさ、言葉を交わすことの楽しさなどを感じ取り、十分に味わえるようにしていくことが重要である(厚生労働省 2018)。他者とのコミュニケーションの媒介として言葉は欠かすことができず、乳幼児期の言葉の獲得に保育者の役割が重要であることは周知の事実である。本稿では、言葉の獲得の支えとなる保育におけるオノマトペに注目する。9ヶ月を過ぎる頃の子どもは親しみを持つ保育者が見ているものを一緒に見るなど、指さし行動が始まる。そこで保育者が「ワンワンいるね」など対象のものを言葉に代えて応えていくことで「犬」と「ワンワン」という音声結びついて言葉を獲得していくことにつながる。物に興味を持ち、言葉を獲得し始める頃に「犬だよ」という保育者はほとんどいないと言っても過言ではないだろう。それは、保育士等が「ワンワン」という音が喃語を話す子どもにとって言いやすい音であることを理解しているからである。また、絵本で見た犬の絵を指さし「ワンワン」と発した子どもと散歩に出かけ犬に出会うと、「ワンワンだね、尻尾がフリフリしているね。」と言葉を続ける。「尻尾だね」ではどこを指しているのかわからない子どもが、「フリフリ」という言葉によって想像をふくらませ言葉を獲得していくことを喜びとする感覚を育てていく(厚生労働省 2018)。子どもの言葉の発達を支える上でオノマトペが大きな役割を担っており、実際に保育現場はオノマトペ

の宝庫ともいわれるほど保育者や子どもが様々な場面で用いる。しかしながら保育者をめざす学生が保育実習での記録や振り返りで「オノマトペ」という言葉を用いている記述はほとんど見当たらない。それは保育現場で使用されていないのではなく、保育現場におけるオノマトペの意義や役割を学生が理解していないのではないだろうかと考えた。

オノマトペとは、音・状態・情動・行為といった非言語的様態を言語的に擬したものであり(岩佐, 2016)、これは日本語特有のものではなく、多くの言語で存在する。この用語の由来は古代ギリシア語起源のフランス語である。ギリシア語では「onoma(名前, ことば) + poieo(作る)で「名前を作る」の意味である。これをもとにフランス語の「onomatopoeie」や英語の「onomatopoeia」は人や動物の声や物音を模した擬音語を指す(秋田・今井 2023a: 坂本 2012)。日本では擬声語や擬態語とも呼ばれるが、それだけにとどまらず事態の様子や人の感情や物の感覚など包括的な用語として用いられる。現在、世界のオノマトペを捉える定義として広く受け入れられているのが、「感覚イメージを写し取る特徴的な形式を持ち、新たに作り出せる語」(秋田・今井 2023 b)とされており、その定義自体が抽象的であり、「オノマトペとは何か」と定義を問われるとその答えは曖昧になる。

保育現場では子どもが言葉を獲得していく上で、オノマトペが日常的に数多く使用されており、特に感覚的なものを共有したいときにその力を発揮する。子どもの言語獲得におけるオノマトペは、音の印象と抽象的なことばを結びつける役割を果たしているといえる(中西, 2020)。特に、語彙爆発期におけるオノマトペの役割は

重要であり、言語獲得をしていく子どもが様々な情報を集積し目に見える対象の特徴だけを取り出していくという困難な作業を、オノマトベが気づかせてくれるのである(今井, 2017)。そこで、本研究では冒頭に示した「音・状態・情動・行為」といった非言語的様態を言語的に擬したのもの」として捉え、特に保育現場でのオノマトベに焦点をあてる。

オノマトベには「ザーザー」(雨の降る音)、「ペロペロ」(アイスをなめる行為)、「キラキラ」(光っている状態)、「ドキドキ」(緊張している情動)などがあり、使用頻度や表現は多様になっている。また、オノマトベはその表現から、現象がどのようなものか想像することもできる。雨の降る音を「ザーザー」と「シトシト」で表現した場合、雨の降る量や様子の違いをイメージできる。さらにその言葉の意味もひとつとは限らない。例えば「ピカピカ」という言葉から連想してみたい。食器をきれいに洗った後の食器が光るほど綺麗に洗えた行為なのか、金色の紙(折り紙やアルミ箔など)が光っている状態なのか、掃除をした後の部屋が綺麗になって気分がいいという情動なのか、さらにはその語句はどの部分を指しているのかなど「ピカピカ」からイメージする意味も多様である。場面や発信者によって表現したい「ピカピカ」は異なる。この多様な意味を持つオノマトベを保育の現場では、子どもと気持ちや動作など共有するために使用されている。

前述したような特性から、オノマトベは子どもの言葉の獲得につなげるという目的だけにとどまらず、保育者と子ども、子どもと子どもがコミュニケーションをとる手段としても有効とされている。目の前に写ったモノの音や動きを聞いたり見たりした時の印象や、気持ち、感情を子どもにわかりやすく伝えるために多く用いられている。加えて、児童文化財にも広く使用されている。山崎(2023)によると、人間の心理や感覚を言葉で表した“擬情語”に焦点をあて抽出した結果400曲の楽曲の68%(270曲)においてオノマトベが認められている。また、絵本や紙芝居においてもオノマトベが用いられている場面は数多く、特に対象年齢が低くなるほど多い。オノマトベは保育においても便利な言葉であるが日常生活になじみすぎているため意識していない。しかし保育者は自然を五感で感じ表現する言葉のレパートリーの多さや、動作や運動、言葉の獲得にも通じる言語力が求められる。加えて、語彙力に不安を抱える学生にとって、子どもも大人も状況や気持ち動作を共有するために使いやすいオノマトベの意義を認知し、意識づけることは不可欠ではないだろうか。

吉永(2022)は医療福祉分野での海外人材養成のための日本語教育においてオノマトベ教育の必要性を急務とし日本語オノマトベと他言語オノマトベを対照し研究をした。母語を媒介言語にオノマトベを習得する際、近似した表現を当てて理解することは可能であるが、オノマトベの言語対照は多面的な視点が必要であると結論づけている。加えて、海外のオノマトベ教育において今までは体感を表す擬態語オノマトベの習得に注目していたが、感覚、感情のオノマトベ教育を喫緊の課題としている。このようにオノマトベは福祉分野では特に使用頻度が高く、保育士を目指す学生がオノマトベという効果的な言葉に着眼することにより、子どもや施設利用者とのコミュニケーションや、教育活動の一助になればと考えた。

## 2. 研究の目的と意義

以上のことから、子どもも大人も状況や気持ち動作を共有するために有効なのがオノマトベであり、保育者をめざす学生(以下学生と表記する)が言語による表現力を高めるためにもオノマトベを意識し習得する必要がある。そこで本研究では3週間の幼稚園(こども園も含む)実習(以下実習と表記する)での学生の記録から、学生が捉えた保育現場でのオノマトベの使用傾向を明らかにする。加えて自由記述からオノマトベへの学生の意識の変容をテキストマイニングによる分析で明らかにし、学びの過程を検討することを目的とする。

オノマトベは一般語のように多義性を持つ。ある状況がある単語の複数の意味の中でどの意味に当てはまるのかを見極めるにはかなり高度な推論が必要となり、子どもはこのように推論で意味を拡張し間違いをしながら多義の構造を学んでいく(今井・秋田, 2023)。一方で、社会人がオノマトベを使用することは、子どもっぽさといった特徴により、場面によっては印象形成や社会的能力の評価に対して影響を与えることも認められている(鈴木・磯, 2022)。保育学生の語彙力を育成する効果的な指導方法について究明した小林(2023)によると、語彙数を増やす理由として語彙に対する関心度や受容力などが起因するとしている。本研究において、オノマトベへの関心度を高め受容していく学生の視点やどのように感じるかは、省察の質に関連する。その結果、学生自身が多様な語彙や社会的能力、加えて実践的技術を獲得していくことにつながる事が期待される。

## 3. 研究の方法

### 3-1. 対象者と方法

本研究は、学生が捉えた実習での「オノマトベ集め」調査書と、自由記述からテキストマイニングによる質的分析を行う。

対象者は保育者をめざすM短期大学、幼児教育保育学科で「保育内容言葉」を履修している48名とした。6月の3週間における幼稚園(こども園も含む)実習の直前に調査書を渡し、保育現場で実際に使用されているオノマトベを8語選び、記入するように指示した。その際、場面や発信者はこちらで特定せずに学生自身が印象に残っている言葉を抽出するよう伝えた。調査書の内容は以下の通りである。

「保育の中のオノマトベを探そう！」

①オノマトベ(語句)

②発信者

③場面(エピソードなど)

④カテゴリー(音、気持ち、動作など)

※カテゴリーについては学生が記述しやすく、「状態・動作・気持ち・音・感触・その他」と特定した中から選択できるようにした。

実習の負担にならないようになるべく簡易な書式とし、実習終了後、印象に残ったオノマトベを書き出せるように表にしたものを配布した。この「オノマトベ集め」は授業の課題としており、講義では各自「オノマトベ集め」を持ち寄りグループワークでのリフレクションを実施し、感想や気づきを自由記述してもらった。講義の課題としての評価を終え、全ての授業終了後に本研究の趣旨について説明した後、調査書研究の分析に使用したい

こと、個人の不利益にならないこと、評価とは全く関係のないことを確認した上で学生の上承を得た。同意を得られた有効な回答は43件であった。

### 3-2. 分析方法

質的分析は2つの視点からすすめる。まず学生が保育の現場で印象に残ったオノマトベの語句を抽出しながらオノマトベの保育場面での使用傾向と、学生の視点を明らかにしていく。さらに自由記述から、保育現場でのオノマトベをどう捉えたのについて検討する。

質的研究では個々を詳細に把握することができるが得られた結果の客観性や実用性は高くない。そこで本研究では両方の研究手法を併用した混合研究のひとつであるテキストマイニングの手法を使う。テキストマイニングは大量のデータ処理により少数の重要な意見を見落とし、文脈が消失したりすることで誤った解釈をする可能性があるため、繰り返し確認しながら分析を進めた。さらに、出現パターンの似通った語について、共起ネットワーク分析を行った。テキストマイニングの分析には、樋口(2020)が開発したフリー・ソフトウェア KH Coder 3 (3.Beta.03i) を用いた。

## 4. 結果と考察

### 4-1. 保育におけるオノマトベについて

学生の記述から有効な回答についての43件から、オノマトベは364語(本稿ではひとつのオノマトベを1語として数える)検出された。その中でも上位群(5回以上検出)のオノマトベを抽出し、場面、発信者などをみていく(図1)。

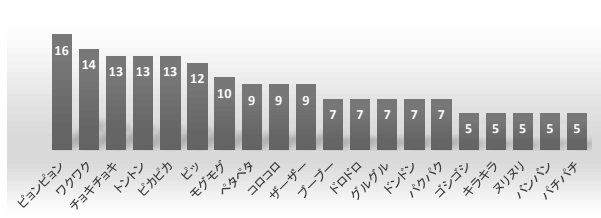


図1 オノマトベ 上位群 (5回以上検出) n:178

5回以上出現した語句は20語で、1番多いオノマトベは「ピョンピョン」、次いで「ワクワク・チャキチャキ・トントン・ピカピカ」と続く。「ピョンピョン」は実習の時期が6月で、カエルに関連した保育内容に使用されていることが結果に大きく関係していると推測される。場面の記述から、16件中13件がカエルを表現しており、「カエルの真似をするとき、園庭にいたカエルをみて、リトミック活動の時、カエルを見た時の説明など」とある。また残り3件は「ウサギの真似、ダンスの振り付け、絵本の中で」としており、共通するのは全て動作を表しているということである。発信者は16件中10件が子どもになっている。子どもがカエルを表現する際「ピョンピョン」を用いており、その場面が印象に残っているようである。発信者については保育者も子どもと同じように「ピョンピョン」を用いているが、子どもの発信の方が学生の印象に残ったとも考えられる。

次いで「ワクワク」という感情の表現である。発信者は14件中13件が子どもになっている。保育者の場合「夕涼み会の時、活動の前に、プールが始まる前の日、泥遊びにできた泥団子を見て」など行事や活動を楽しみにし

ている様子を子どもの表現から抽出している。カテゴリとして少ない感情(気持ち)を表現する語句が2番目に多く検出された。その他、「チョコチョコ・ペタペタ・ヌリヌリ」など、製作の際に使用している語句が目立つ。場面詳細は「製作のとき『この紙をペタペタ貼ってね』と保育者が声を掛けていた・製作でのりを使って手がペタペタになったときに子どもが言った」などである。興味深かったのは「ペタペタ」の場面はほとんどが製作でのりを使って貼っていたのだが、2件はカタツムリをみて子どもが発していた。ノリを貼る様子や動作と、カタツムリの感触やイメージ、どちらも「ペタペタ」なのである。ここにもオノマトベの多様性が垣間見える。その他、「モグモグ・ピカピカ」などの生活(食事・片付けなど)に直接関係する語句が目立った。また、グルグルを7人が記述しているが、それぞれ場面が違いオノマトベの特性が結果となって表れている(表1)。全て動作としての「グルグル」を捉えているが、その様子は違う。手で混ぜている、走り回っている、ノリを塗る方法など使用される場面は多様である。

表1 「グルグル」について

発信者	場面	カテゴリ
保育者	クッキングで混ぜるとき	動作
子ども	ままごとで料理を混ぜるとき	動作
子ども	ダンスを踊るとき	動作
子ども	お絵描きの時間に大きな丸を描くときの言葉	動作
保育者	製作でのりを貼る説明	動作
子ども	園庭にあるコーヒーカープのような玩具で遊んで	動作
子ども	園庭で円の周りを走っているとき	動作

カテゴリの捉え方も同じではない。例えば「ドロドロ」を例に挙げる(表2)。対象は泥で、場面は泥遊びであることは一致しているが、カテゴリが違う。「ドロドロ」なのは子どもの手や身体なのか、泥の様子なのかによって状態、動作にも捉えられる。保育者が発信者の場合は「ドロドロになるからやめておこうね。ドロドロだから綺麗に洗おうね」など生活習慣の指導に用いられることもあり、そうなる状態、動作にも捉えることができ、多様さが窺える。

表2 「ドロドロ」について

発信者	場面(エピソードなど)	カテゴリ
子ども	外遊びのときに「砂で手がドロドロになった」と言っていた	状態
保育者	泥遊びの際にみんなドロドロだねと伝えていた	見た目
子ども	泥だらけになったとき	状態
保育者	泥だらけになった子に対する言葉	動作
保育者	雨が降っている時、土を触っている子どもがいたため	汚くなってしまう
子ども	どろ遊びをしたとき	状況
子ども	泥だんごしている様子	動作
子ども	どろんこ遊びの時、土と水が混ざっているのを見たとき	状態

図2に3,4回検出された語句を示す。「シー」「ギュー」などの連続していない語句が検出されており、学生がこのような言葉もオノマトベとして認知しているのがわかる。「シャキシャキ・ニョロニョロ・ビチャビチャ・バラバラ」といった音や動作を表す語句が多い中、気持ちを表現する「ドキドキ」が出現している。場面をみると、誕生会や朝の会で前に立つ子どもが発している言葉によく見られたようである。

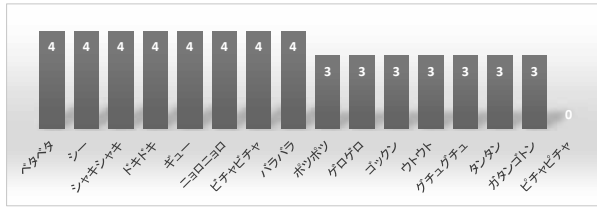


図2 オノマトペ 上位群 (3, 4回検出) n:53

他にもルンルン、ペロペロ、プカプカ、ピーポーなど様々なオノマトペがある。その中でいくつかの語句を表3に抽出した。「ベチン」は子どもが保育者に伝えるどんな風に叩かれたのかを表現しており、子どもも大人も状況や気持ち動作を共有するために使用されているといったオノマトペの意義が表れている。また、「メロメロ」は保育者が愛おしく子どもを思っている場面での語句であり、学生が保育者という職業を改めてポジティブに受け止めた場面であったことを語ってくれた。子どもや保育者のオノマトペの使い方は場面も用いる方法もその種類も多様であることが明らかになった。加えて保育学生の視点も多様であり、印象に残ったオノマトペについて、なぜそれが印象深かったのかについては本研究では明らかではないが、グループでのリフレクションでは、「分かる～、そうそう私の園でもそんな子がいた。」などの盛り上がる声は聞こえてきたので共感できる場面は多かったと推測される。

表3 1回検出のオノマトペについて

オノマトペ	発信者	場面	種類
モリモリ	子ども	ブロックを片付けているときに入れ物がいっぱいになっているとき	状態
モチモチ	先生	犬のほっぺをつまむ	感触
メロメロ	保育者	午睡中、保育者同士で「Aちゃん今日も後ろからギュッしてくれてね」「それはメロメロ!」という会話をしていた	気持ち
ベチン	子ども	「〇〇くんがベチンって叩いてきた」と報告してきた	動作
ピン	子ども	保育者の話を聞くとき	動作
バラバラ	保育者	毎週金曜日、ブロックを崩す日	音
コンコン	保育者	朝の会で風邪が流行していることを伝える場面	音
コナコナ	子ども	砂場でさらさら砂を触りながら言っていた	状態

発信者については364件中、161件が保育者、5件は実習生（学生自身）となり、半数を超える180件が子どもの発信であった（図3）。これは筆者の予想とは異なった。保育の現場で子どもの方が保育者よりもオノマトペを用いていることが多いのは予測できる。しかしながら実習という特性上、保育者から子どもに向けての発信の方が印象に残りやすいのではないだろうかと考えていた。大半の保育学生は実習で「子どもが可愛かった」という単純ながらも重要な気持ち報告してくるが、この結果からも目の前の子どもの姿に目を細めている学生の姿が想像できる。

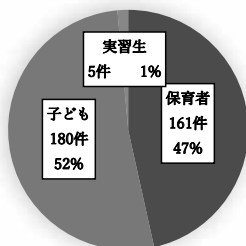


図3 発信者の割合 n : 364

次にカテゴリーの割合を図4に示す。カテゴリーについては筆者が事前にオノマトペのカテゴリーについては詳細に学生と共有していなかったことが関与するが、約半数が動作を表す表現に使用されている。圧倒的に少ないのが気持ち、感情の表現に使用されるオノマトペである。本研究では学生からみた保育でのオノマトペの傾向について明らかにすることを目的とした。学生の視点は子どもの動作で用いるオノマトペに注目する傾向がある。しかし、語句については、季節や保育内容、例えば製作や行事の多い時期なのか、園の特徴にも関係しているのかなど様々な要因が影響するので、今回の調査書だけでは課題が残る。

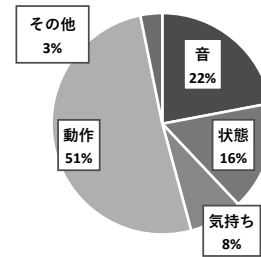


図4 種類 (カテゴリー) の割合 n : 364

4-2. オノマトペのリフレクションにおける自由記述について

自由記述のデータは43件でありMicrosoft Excelによって作成した。データ入力語、KH Coderを用いてテキストデータを読み込み、表記揺れを統一した。例えば「園児・乳幼児・こども・子ども」を「子ども」に、「気づく・気付く・きづく」を「気付く」に、「保育者・指導者・先生」は「先生」に、「制作、製作」を「製作」に表記を統一した。「先生」に統一した理由として、「保育者」は「保育」と「者」が別々に抽出されるので「先生」表記にした。実習先はこども園も含むため「保育者」とするのが望ましく、結果を分析する際には「先生」を「保育者」と読み取り考察する。また、「保育中」が「保育/中」に分かれるなどが見られたので前処理の際に複合語の検出で名詞を連結させ、抽出された語句の強制抽出の処理を行った。以上の要件を踏まえてKH Coderを用いて前処理を行った結果、総抽出語数2377、異なり語数392となった。このうち分析に使用される語として総抽出語数894、異なり語数283となった。この中で出現数として2語以下は除外すると53語となった（表4）。

出現回数の多い語句からみると子ども・使うから感じる、伝える、分かる、伝えると続く。オノマトペを「子どもに」使ったり、「子どもが」使ったりしていることに気づいている。次に続く、伝える・伝えるという言葉からも理解できる。また、理解・イメージ・促す・想像といったオノマトペがなぜ保育の中でよく用いられているのかについての意義を確認している。

表4のリストから動詞Bと否定助動詞については前後の文脈がなければ意味をなさないものでKWICコンコーダンスを行い、さらにコロケーション統計を実施した（網掛け部分）。KWICコンコーダンスは「前後の文脈を含めて、文中でキーワードが使われている場所を表示する機能」で、原文参照機能になる。コロケーション

表4 自由記述の抽出後リスト（3語以上）

語句	回数	言葉	9	年長	3
オノマトペ	79	理解	9	イメージ	3
する	70	場面	8	生活	3
子ども	55	言う	8	製作	3
使う	53	会話	7	想像	3
やすい	34	説明	7	発見	3
感じる	21	表現	7	話	3
伝わる	16	日常	6	大切	3
分かる	16	使用	6	無意識	3
ない	16	実習	6	保育中	3
先生	14	聞く	6	関わる	3
多い	14	なる	6	振り返る	3
ある	14	意識	5	促す	3
気づく	13	動作	5	付ける	3
たくさん	11	年齢	4	低い	3
保育	10	話す	4	難しい	3
伝える	10	音	4	声	3
できる	10	自分	3	良い	3

統計はキーワードと関わりの強いキーワードの統計を取ることができるので、抽出語を逐一確認しながら文脈内の使用状況を考察の参考とした。出現回数の多い語句の動詞Bで検出された「する」は「し/やすい」と後ろにやすいが続いていることが多く見られたが、ほとんどはサ変名詞につづく語句である。反対に、「やすい」の後になるが続き「理解し/やすく/なる」「表現し/やすく/なる」などの意味を持つ。ある・できるについては名詞の後や理解・楽しくなどに続いている。否定動詞ないは16回の出現数の中で8回が気づくに続いている。「気づかないところで日常的に使われている」や「たくさん使わずに気づいていない」など、今回気づけたことに関してないという語句につながっていることがわかる。また、「なくてはならない」「意識しなければならない」など否定語ではあるが、保育者の技術向上のための「ない」につながっている。

#### 4-3. 自由記述の共起ネットワーク図における分析

次に共起ネットワークから検討する。自由記述の中で、出現パターンの似通った語を線で結んだネットワークを描いた。なお、分析にあたって、出現数による語の取捨選択に関しては最小出現数を3、後期関係（edge）の種類を語-語、描画する共起関係（edge）の選択を上位60に設定した。また、品詞による語の取捨選択において前述の結果、動詞Bと否定動詞は分析に必要ないと解釈できた。逆に形容詞の「やすい」は、その前後の文章との関係性において必要だと解釈したので、そのように設定した。共起ネットワークでは、強い共起関係ほど太い線で、出現数の多い語ほど大きい円で描画される。オノマトペ、子どもを中心に、使う・分かる・伝わる・感じるとつながっている。学生は「オノマトペがたくさん使われていることが分かった」「子どもが初めてする行動もオノマトペを使うと伝えやすいと感じた」「子どもにわかりやすく伝わっていることが分かった」など、保育でオノマトペを多く使っていることに気づき、分かったと感じている。着目したいのはやすいである。前章でも少し触れたが、「分かる、伝わる、」の前後にやすいがつながっており、「伝わりやすい、分かりやすい、イメージしやすい、想像しやすい、理解しやすい、使いやすい」と、34回出現している。ほとんどの学生が「言葉の意味が理解しやすい」「言葉の発達にもつながりやすい」など、

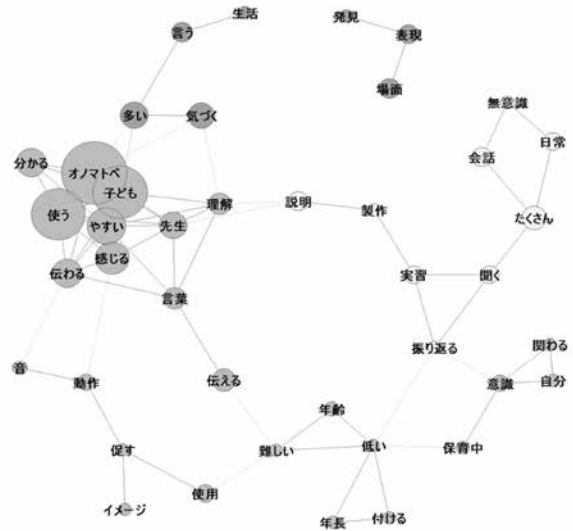


図5 自由記述の共起ネットワーク図（3回以上出現語句）

オノマトペが保育で用いられる意義を認識したと読み取れる。

日常・無意識・たくさん・会話から、「日常的にオノマトペを使っていて便利で使いやすい言葉だ」「日常生活で無意識に使用しておりもっと意識していこうと思った」など、今まで無意識に使っていたオノマトペを意識することを感じ取っている。

次に、もう少し全体的な視点から学生の理解を明らかにするために、自由記述の出現回数を4以上に絞り、さらに品詞の取捨選択において最小限に選択した共起ネットワークを図6に示す。図5と同じような傾向が見られるが、大きく4つのグループに分かれている。

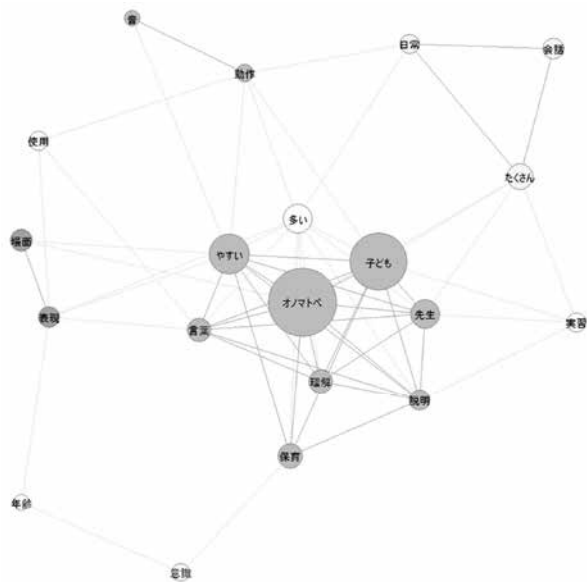


図6 自由記述の共起ネットワーク図（4回以上出現語句）

各グループの語彙から文脈を読み取ってまとめると、保育の現場で①オノマトペは保育者や子どもが多く使っており、言葉で説明するときに理解しやすいとしている。②年齢によって意識することが大切であり、幼児より乳児のクラスの方が多く用いられている。③気持ちを表現



するときや、音や動作、製作の説明に使用している。④ 日常の会話の中でたくさん使われている。以上のように学生は保育におけるオノマトペの理解を深めている。

学生の自由記述を共起ネットワーク図で分析した結果、保育の中のオノマトペを意識したことで学生自身がオノマトペを楽しみ、日本語のおもしろさに気づき、保育には必要不可欠な言葉であることを認識している。以下、抜粋した自由記述である。

・日々の保育の中では沢山のオノマトペが登場していて面白かったです。身の回りにあふれているオノマトペを発見し、日本語の豊さをどれだけオノマトペが支えているか分かりました。また、子どもはオノマトペを使うことで表現できることも多くあるんだと思うと、オノマトペの意義も知れました。

・「この紙を切ってください」や「熱いので気を付けてね」と言うよりも、オノマトペを用いた方が子どもたちにしっかり伝わっていることが実際に見て分かりました。子どもたちに説明したり話したりする際にはオノマトペを活用しながらしていきたいと思いました。

・言葉を話せない乳児さんにオノマトペを使うことはとても大切だと思いました。今まで意識していなかったけど意識してみるといろんなところで使われているのでおもしろかったです。

学生は保育で用いるオノマトペが子どもの言葉の獲得にどのような影響があるのか、そしてその意義と保育者の専門的知識について体験的に認知できたといえる。

### 5. まとめと課題

本研究では学生が実習において印象に残ったオノマトペの記録から、使用傾向や学生の視点について着目した。加えて学生のオノマトペへの意識の変容をテキストマイニングによる分析で明らかにし、学びの過程を検討することを目的とした。KH Coderによる自由記述の分析から、実習での「オノマトペ探し」を通して学生の考えや意識が深まっていく様子が見られた。知識だけでなく学生自身の実体験から日常生活から意識することや、オノマトペの影響など本質的なことを考え、保育実践に繋げる深い学びにつながった。いずれにおいても、オノマトペを意識していなかった学生の意識が変容していく学びの過程が明らかになった。

いずれにおいても保育の現場で使用する子どもにとって意味のあるオノマトペと、社会人として、例えばメールでのやりとりや教員との対話において使用することは社会的能力の低さの認知にもつながることを、保育者を目指す学生自身が理解しておかなくてはならない。加えて、学生自身も感性を磨くことでオノマトペの語彙力も高まり、子どもの言葉の獲得に対する支援につながる。したがって学生は保育現場でのオノマトペの意義を理解し、日常生活の中で常に意識していくことが今後の課題になるのではないだろうか。

筆者は、本研究で実践した「オノマトペ探し」において学生の視点に注目しながら分析を進めると、子どもに対する暖かな学生の眼差しが見えた。その姿は子どもが発信するオノマトペに笑顔を向けている、紛れもない保育者の卵の姿である。本研究で明らかになった学びの過程から質の高い保育者養成を目指し授業改善をしていきたい。

### 引用文献

厚生労働省 (2018) 保育所保育指針解説, フレーベル館, p.156,167.

岩佐和典 (2016) オノマトペに関する認知科学的研究の紹介 認知科学 23 (2), pp.171-178.

秋田喜美・今井むつみ (2023) 『言語の本質 ことばはどう生まれ、進化したか』中央新書, p.3,4,18.

坂本彩希絵 (2012) オノマトペと言語の起源 長崎外国語大学・長崎外国語短期大学編長崎外大論叢, (16), pp.227-236.

中西 一彦 (2020) 幼児期の言語獲得におけるオノマトペの役割関西国際大学教育総合研究所, 13, pp.71-79.

今井むつみ (2013) 『ことばの発達の謎を解く』ちくまプリマー新書, 筑摩書房

山崎英明 (2023) 子どもの歌におけるオノマトペ抽出の研究 ～擬情語に焦点をあてて～リカレント研究論集, (3), pp.72-81.

吉永尚 (2022) .オノマトペ表現の言語対照について園田学園女子大学論文集, 56, pp.21-29.

鈴木公啓・磯友輝子 (2022) .オノマトペの使用による印象形成 一言葉による装いの効果—東京未来大学研究紀要, (16), pp.65 - 77

小林賢司 (2023) .教育・保育における「語彙力」に関する実践的研究 —「語彙力」の実態とその育成に向けて—帝京短期大学紀要, 24, p.171-178.

樋口耕一 (2020) 『社会調査のための計量テキスト分析 —内容分析の継承と発展を目指して—第2版』, ナカニシヤ出版

### 参考文献

窪菌晴夫編 (2017) 『オノマトペの謎』岩波科学ライブラリー, 岩波書店

近藤綾・渡辺大介 (2009) 保育活動におけるオノマトペ—保育者 A を対象として—, 日本保育学会, 62 回発表論文集, pp.115 - 121.

佐藤友哉 (2022) オノマトペの保育教材化—領域「言葉」と領域「表現」の統合を企図して—清泉女学院短期大学研究紀要 40, pp.1-13.

佐藤奈美 (2022) 児童文化財に親しむ体験が保育学生に与える影響の一考察 - 保育内容「言葉」での街頭紙芝居を用いた実践から 湊川短期大学紀要, 58, pp.19 - 26.

内閣府 (2018) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説 フレーベル館

# 思考場療法による心身のバランス調整の検討

— 圧痛領域は心身のバランスを表しているのか？ —

Examination of mental and physical balance adjustment by Thought Field Therapy:

Do the sore spot represent our mental and physical balance ?

小 原 宏 基

Hiroki OHARA

湊川短期大学

**Key words** : Thought Field Therapy (TFT), Mental and Physical balance, Sore spot

## Abstract

In modern society, people are overstressed and it is important to find ways to reduce stress. Awareness of stress is necessary for effective treatment. "The sore spot" of Thought Field Therapy (TFT) is considered to be an indicator of mind-body balance. The aim of the present study was to assess its usefulness as an indicator. Our findings suggest that "the sore spot" can be an indicator of mental and physical balance. We discuss potential application methods of "the sore spot".

## 1. 研究背景と目的

2019年12月に新型コロナウイルスが発見されて早4年が経ち、現在では屋外や入学式、卒業式におけるマスク着用義務が軽減されるなど、ウイルスとの共存が考えられている。そのような中、海外事情もあり物価高が進むなどストレスが溜まる社会は続いている。

これまでに筆者は容易にできるストレス軽減法として思考場療法 (Thought Field Therapy: TFT) のポイントの1つであるPRのタッピングによるストレス軽減法 (小原, 2022) や意識した呼吸によるストレス軽減法 (小原, 2023) について検討を行ってきた。しかしながら、ストレス軽減法の構築と同時にストレスへの気づきについて注目する必要があるのではないだろうか。

今後多くのストレス軽減法を見出したとしても、個人がストレスを溜めていることに気づくことができなければ対処することができない。現状日本では労働安全衛生法の改正によって2015年12月から労働者が50人以上の事業所に年1回全従業員に対してストレスチェックが行われており (厚生労働省, 2019, 2022)、すでに今年で8年間実施されている。厚生労働省 (2022) によると、全従業員のうち80%以上の受検者がいる事業所は全国で77.5%にも上っており、このストレスチェック制度のおかげで、事業者と労働者ともにストレスを気にする割合が増えたとの報告もある。このような流れもあり、ストレスへの気づきについての研究も散見される。河野・山本 (2021) は質問紙調査からストレスへの気づきと精神的健康についての影響を検討し、気づきと精神的健康の間に影響はないが、自分自身のストレス状態の把握には問題解決型のストレスコーピングが影響しており、問題解決方法を見出すことが重要である可能性を報告した。また文部科学省 (2014) は非常災害時の子どもの心のケアに関する調査を実施して、教職員向けの指導参考資料を作成しており、厚生労働省 (2020) ではストレス

への気づきやこころのSOSサインなどについての情報を、インターネットを經由して国民に周知している。

このように近年ストレスへの気づきについて興味関心は持たれており、その重要性については理解されている。そして例えば「気分が落ち込む」や「不安でたまらない」などのように区分で分けて周知はなされているが (厚生労働省, 2020)、現状のストレス社会において誰でも容易にストレスに気づく方法を見つけ出すには至っていない。

そこで本研究ではTFTのポイントの1つである圧痛領域に注目した。圧痛領域とはConnolly (2004 森川監訳, 2011) によると「鎖骨と鎖骨の間から3センチくらい下、左に (右に) 10センチくらいいったエリア」と示されている場所で、最近では左側にあることが多いと言われるマッサージポイントである。このポイントについて、現状TFTの研修会では刺激する際の痛みの有無でストレスの有無を見分けることができると説明されており、Connolly (2004 森川監訳, 2011) もそのことを述べている。しかし、このことについて明確に調べた研究は筆者の調査した限り存在しなかった。

そのことから本研究では、TFTにおいて心身のバランスの指標ともされている圧痛領域が実際に指標となりえるのかについて検討することを目的とした。

## 2. 仮説

TFTの研修会などで、圧痛領域の痛みは心身のバランスが崩れている場合に発生するとされている。またConnolly (2004 森川監訳, 2011) もそのことに言及していることから、そのことを踏襲し実験の前後で測定する圧痛領域の痛みと心身の疲れの回復度合いの数値がともにTFTグループの方が安静グループよりも有意に高くなるとした。

3. 方法

1) 実験参加者

短期大学の学生 34 名 (男性 2 名, 女性 30 名, その他 2 名; 平均年齢 18.53 ± .61 歳) が同意の上, 実験に参加した。すべての実験参加者は, 実験の遂行に支障を与えるような知覚運動機能はなかった。なお本研究は, 湊川短期大学研究倫理委員会の承認 (倫 2023-001) を得て実施された。

2) 実施方法

まず実験参加者へ実験についての説明及び同意を得た後, 無作為に 2 つのグループに分けた。TFT グループ (TFT 群) には現在の心の疲れ具合について 0 ~ 10 の 11 件法で回答を求めた。その後圧痛領域をマッサージしてもらい, 痛みについて 0 ~ 10 の 11 件法で回答を求めた。次に TFT セラピスト (上級レベル) および認定一般向け講師資格を持つ実験者の指導の下, TFT のツボの 1 つである PR を数十秒間タッピングさせた。最後に再度現在の心の疲れ具合と圧痛領域の痛みについて, 上記と同様の形で回答を求めた。安静グループ (統制群) には現在の心の疲れ具合について TFT 群と同様の条件で回答を求めた。同時に圧痛領域をマッサージしてもらい, 痛みについても回答を求めた。次に実験者の指導の下, 数十秒間安静に過ごしてもらった。最後に再度現在の圧痛領域の痛みと心の疲れ具合について TFT 群と同様の条件で回答を求めた。試行数は 1 回のため, かかった時間は説明を含めて 10 分程度であった。

3) 分析方法

Excel 処理されたデータをフリーの統計分析ソフトウェアである jamovi 2.3.21 (Windows 10) によって記述統計および統計処理を行った。2 種類のグループ (TFT 群・統制群) に対し実験の前後の心身の疲れ具合について, 対応のない多変量分散分析 (2 グループ条件 × 2 計測条件) を行った。統計の有意水準は有意な差を 5% ( $p < .05$ ), 有意傾向を 10% ( $p < .1$ ) とした (眞

嶋・永井, 2022; 芝田, 2022)。

4. 結果

図 1 は各群の心身の回復具合と圧痛領域の痛みの回復具合をそれぞれ比較した結果であり, 表 1 はそれらの得点と標準偏差をまとめたものである。対応のない多変量分散分析 (2 グループ条件 × 2 計測条件) を行った結果, 有意な主効果がみられた ( $F(2, 32) = 3.97, p < .05$ )。そこでグループごとに単変量分散分析を行った結果, TFT 群と統制群の間では, 圧痛領域の痛みの回復具合に有意差がみられ ( $F(1, 33) = 6.95, p < .05$ ), 心身の回復具合には有意傾向がみられた ( $F(2, 33) = 3.36, p < .1$ )。よって, 本研究の仮説は採択された。

5. 考察と今後の展望

本研究では実験参加者を無作為に TFT 群と統制群に分け, 圧痛領域が実際に心身のバランスの指標となりえるのかについて検証した。ストレスへの気づきに関する先行研究としては, 河野・山本 (2021) がストレスへの気づきと精神的健康についての影響を検討し, 気づきと精神的健康の間に影響はないが, 自分自身のストレス状態の把握には, 問題解決型のストレスコーピングが影響していることを報告した。また厚生労働省 (2020) もストレスの気づきに関する情報を国民に提供しているが, 現状のストレス社会において誰でも容易に気づくことのできる方法を見つけ出すことはできていなかった。そこで本研究では先述した 2 つの群の圧痛領域と心身の疲れ具合の回復具合を比較することで実際に心身のバランスの指標となりえるのかについて検討した。本研究の仮説としては, PR をタッピングした TFT 群の方が統制群よりも圧痛領域の痛みと心身の疲れの回復具合の数値がともに有意に高くなるとした。

結果, 仮説通り TFT 群の方が統制群よりも圧痛領域の痛みは有意に回復し, 心身の回復具合の回復にも有意傾向がみられた。これは Connolly (2004 森川監訳, 2011) の主張の通り, 圧痛領域が心身のバランスの指標

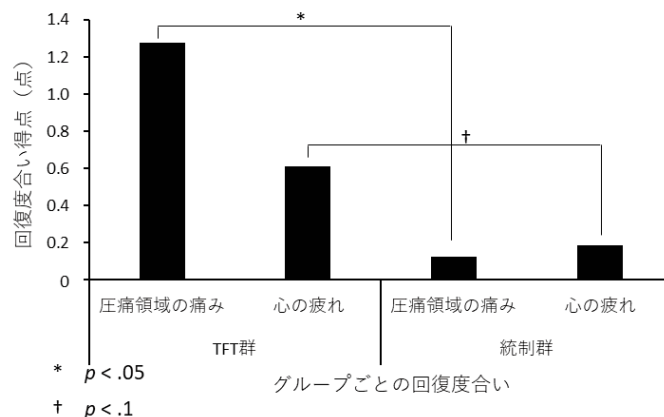


図 1 各群の比較

表 1 各群の平均値と標準偏差

	TFT 群		統制群	
	圧痛領域の痛み	心の疲れ	圧痛領域の痛み	心の疲れ
Average	1.28	0.61	0.13	0.19
S.D.	1.64	0.78	0.72	0.40

になりえることを示す結果であろう。また河野・山本(2021)が懸念の1つとしていたストレスチェック制度の個人結果の有用性による未受検についても、圧痛領域の痛みという自分自身の感覚によりストレスチェックが行えるため、アンケート形式のような煩わしい作業も結果が出るまでの期間も気にすることなく活用できるのではないだろうか。

また応用的活用方法の1つとして教育分野での活用が挙げられる。近年、いじめや不登校などの問題が多発しており社会問題化している。文部科学省(2021)によると、いじめの認知件数は517,163件であり、不登校の児童生徒数は196,127人である。前年度に比べると、いじめの認知件数は減少しているが、不登校の児童生徒数は増加している。このような状況のため、保健室の利用を見ても養護教諭が「心身の健康問題」で継続支援した児童生徒は小学校で60.1%、中学校で79.2%、そして高等学校で91.4%であり、全体でも68.9%と7割弱の児童生徒が養護教諭を頼っていることが分かる(保健室利用状況調査委員会, 2018)。スクールカウンセラー(SC)などが配置される学校も増えているが、「相談したいが相談室に入りにくい」、「SCを身近に感じない」など相談しにくいとの声もあり(川幡・佐野, 2014)、養護教諭が求められている要因になっている。このような背景から、養護教諭がカウンセリング技法やストレス軽減方法、そして心身のバランスを整える方法を知っておくことが重要になってきた。このときに本研究結果が応用できるのではないだろうか。悩みを抱える児童生徒が養護教諭に相談に訪れた際、相談した児童生徒のことをねぎらい、話を聞くだけでなく、圧痛領域をマッサージすることで容易に児童生徒の心身のバランスの確認ができ、場合によってはストレス軽減ポイントであるPRをタッチングすることでバランス修正ができる。このことは悩みを抱えストレス過多となった児童生徒への救いになるのではないかと思われる。

本研究はTFTの可能性について検討する中でその応用として学校分野における活用方法について考察を行った。しかしながら、この点については現場の教職員への調査などを通して各立場からの研究が必要であると考えられる。この点が本研究の課題である。

## 要旨

様々な要因によってストレス過多となりやすい現代社会において、ストレス軽減法を見出すことは大事であるが、各々がストレスを溜めていることに気づくことができなければ対処することもできない。そこで本研究では心身のバランスの指標ともされている思考場療法(TFT)の圧痛領域について実際に指標となりえるのかについて検討することを目的とした。結果、圧痛領域は心身のバランスの指標になりえることが示された。そこで、圧痛領域の応用的活用方法について言及した。

## 謝辞

本研究を行うに辺り、実験にご協力くださった湊川短期大学人間生活学科の学生諸氏に心から御礼申し上げます。

## 参考文献

Connolly, S. M. (2004) Thought Field Therapy Clinical Applications Integrating TFT in Psychotherapy,

George Tyrrell Press. (森川 綾女 監訳 (2011)『TFT 思考場療法 臨床ケースブック 心理療法への統合的応用』金剛出版, 2011)

保健室利用状況調査委員会 (2018)『保健室利用状況に関する調査報告書 平成28年度調査結果』公益財団法人 日本学校保健会, 2018.

川幡 友里恵・佐野 秀樹 (2014)「スクールカウンセラーに対するイメージと相談室の運営に関する研究」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系 I』65, pp. 169-178.

河野 夏季・山本 文枝 (2021)「女子大学生における「自分のストレスへの気づき」が精神的健康に及ぼす影響」『安田女子大学心理教育相談研究 / 安田女子大学心理教育相談室 編』16, pp. 25-34.

厚生労働省 (2019)『ストレスチェック制度 簡単! 導入マニュアル』厚生労働省, 2019.

厚生労働省 (2020)『ストレスとこころ | こころもメンテしよう ~若者を支えるメンタルヘルスサイト~』閲覧日: 2023年8月21日

URL: <https://www.mhlw.go.jp/kokoro/youth/stress/index.html>

厚生労働省 (2022)『ストレスチェック制度の効果的な実施と活用に向けて』厚生労働省.

眞嶋 良全・永井 暁行 (2022)『jamoviでトライ! 統計入門 フリーソフトウェアで始める科学データの分析』ナカニシヤ出版, 2022.

文部科学省 (2104)『学校における子供の心のケアーサインを見逃さないために-』文部科学省, 2014.

文部科学省 (2021)『令和2年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要』文部科学省, 2014.

小原 宏基 (2022)「思考場療法による心身のバランス調整の検討」『湊川短期大学紀要』58, pp. 43-45.

小原 宏基 (2023)「呼吸が心身の健康に及ぼす影響」『湊川短期大学紀要』59, pp. 25-27.

芝田 征司 (2022)「jamovi 完全攻略ガイド」閲覧日: 2023年8月21日

URL: [https://bookdown.org/sbtseiji/jamovi\\_complete\\_guide/](https://bookdown.org/sbtseiji/jamovi_complete_guide/)



# 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についての学生の学び

—保育者養成における授業実践を通して—

Student learning about “What We Want You to Develop by the End of Early Childhood”

—Through classroom practice in Childcare Worker Training—

西 垣 あおい

Aoi NISHIGAKI

湊川短期大学 幼児教育保育学科

## 要旨

本研究は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について、事例や映像を用いた授業を通して、学生がどの段階で学びを深め、難しいと感じる点がどのようなことなのか、また、授業実施後にどのように意識が変化したのかを明らかにし、今後の授業の内容と課題を検討することを目的とした。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についての授業実施後に質問調査を行い分析した。結果、調査対象の学生すべてが理解できたと感じ、自身の考えをグループワークで共有し、他者の視点を知ることが理解のきっかけとなっていた。また、子どもの育ちと10の姿はどこにつながりがあるのかを見出す方法が分からないことが理解の困難となっていた。また、8つの理論記述が導き出され、学生の大きな学びとなったことが示唆された。

**キーワード：**幼児期の終わりまでに育ってほしい姿、子ども理解、保育環境、学生の学び

## Abstract

The purpose of present study was to clarify at what stage students depended their learning, what points they found difficult, and how their awareness changed after the class, and to examine the content and issues for future classes through of case studies and video about “What We Want You to Develop by the End of Early Childhood.” A questionnaire survey was administered and analyzed after the class about “What We Want You to Develop by the End of Early Childhood.” As a result, all of students felt they understood, and sharing their own ideas and group work and learning about others' perspectives was a catalyst for understanding. In addition, it became clear that the difficulty in understanding the children was that they did not know how to find the connection between child developments and the 10 figures. Eight theoretical descriptions were derived, suggesting that the students learning a great deal.

**Key words:** what we want you to develop by the end of early childhood, understanding children, childcare environment, student learning

## 1. はじめに

2015（平成27）年から「子ども・子育て支援新制度」が実施され、幼児教育の質の向上が一層求められてきた。さらに、2018（平成30）年に施行された、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領において、育みたい資質・能力「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力の基礎」「学びに向かう力・人間性等」と並んで、就学前までに育ってほしい姿として「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以下、10の姿と表記）が示されている。幼稚園教育要領解説（2018）によると、10の姿について、「第2章に示すねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であり、教師が指導を行う際に考慮するものである」と明示されている。10の姿が明確化されたことで、子どもの姿を捉える手掛か

りとなり、小学校就学までに子どもたちにどこまで育ってほしいのかをイメージしやすく、各施設での共通性が確保されたと考えられる。さらに、小学校への接続においても子どもの姿を共通理解するのに10の姿は一つの目安となっている。

榊原（2019）は「乳幼児期の保育の基本は「環境を通して行う」であり、保育者は子どもの「主体的な活動」が保障され、確保されるような環境を計画的に構成することが、その専門性として求められている。」と述べている。また、田中（2020）は、「保育者は幼児が何をしようとしているのか、幼児の思いを瞬時に読み取ることで、保育者の考える教育的意図を持った環境構成がより幼児の主体に添ったものとなる。」と考察している。子どもたちにとって最も身近な存在である保育者は、環境構成を考えるうえで子どもの理解がなされていなければ

十分な環境を構成できない。文部科学省（2021）によると、「幼児を理解することがすべての保育の出発点であり、幼児を理解するためには、教師が幼稚園生活の全体を通して幼児の発達の実情を的確に把握することや一人一人の幼児の個性や発達の課題を捉えることが大切」と示している。幼児を理解することが保育の出発点とするならば、保育での子どもの様子を記録してさらに幼児理解を深めることが次のステップになるであろう。幼児教育の現場で10の姿を手掛かりに記録し指導と評価につなげ、さらに指導要録の作成にもつながる。以上のことから、保育者を目指す学生の10の姿についての理解は大変重要なものだと考えられる。

2. 問題と目的

2018（平成30）年に、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が同時に改訂（定）されたことに対して、植草ら（2019）は、「保育の現場のみならず保育者養成の場においても大きな歴史的な意味を持つ」としており、さらに「これからの日本の保育は、多様性（養護と保育と教育の融合・長時間保育・子育て支援等）が求められる時代になり、保育者養成の社会的負託を受けた保育者養成大学、教員の役割は大きく、量的、質的改革が必要となる」と述べている。保育者養成校の学生たちが学びを深めたいという現場に就職することが不可欠であり、そのためには、10の姿を手掛かりに子どもの理解を深めることができるよう多様な方法での10の姿の理解が必要と考える。

金子ら（2020）は、保育者養成大学において学生が10の姿を体験的に学ぶため、ピオトープで園児と一緒に遊ぶ活動を取り入れている。その中で「学生は子どもと関わる経験を積み重ねることにより、保育者としての専門性を身につけていくことができる」と、体験的に学ぶ意義を示唆している。一方、「より具体的に10の姿を学ぶ機会をつくるために、ピオトープで子どもと関わる経験だけでなく、事例や映像等を用いて保育者としての専門的な視点を獲得できるように配慮していく必要がある」と課題を述べている。体験的な活動を通しての授業は学生にとっておおいに学びとなるが、事例や映像を用いて視点を変えて理論的な学びも必要といえよう。

そこで本研究では、学生が事例や映像を用いての授業を通して、10の姿についてのどの段階で学びを深め、難しいと感じる点がどのようなことなのか、また、授業実施後に10の姿についてどのように意識が変化したのかを明らかにし、今後の授業の内容と課題を検討することを目的とする。

3. 研究方法

調査対象：M 短期大学幼児教育保育学科 「幼児教育・保育課程論」の受講生48名  
 調査期間：2023年11月～12月  
 調査内容：「幼児教育・保育課程論」の授業において、10の姿についての内容を4回にわたって実施した。授業の概要は表1に示す。  
 授業実施後、翌週の授業内で質問調査を行った。調査は以下の5項目とする。

- ① 10の姿について、保育場面でどのように捉えるのか理解できましたか。
- ② 10の姿について、どの授業で理解が深まりましたか。
- ③ 10の姿について、どの授業が難しいと感じまし

たか。

- ④ 「絵本作り」について、どの10の姿に対応すると思いますか。
- ⑤ 10の姿の学びについて、感想をお聞かせください。

項目①は4件法、項目②③④は項目を選ぶ、項目⑤は自由記述での回答とした。

倫理的配慮：質問調査に関して、個人の不利益にならないこと、授業評価の対象にならないこと、質問調査の回答は本研究のみで使用することを説明し了承を得た。調査への回答をもって同意が得られたものとする。

分析方法：設問①②③④は単純集計し分析する。設問⑤の自由記述は大谷（2011）によるSCATの手法（Steps for Coding and Theorization）に基づいて分析を行う。

4. 実施授業

「幼児教育・保育課程論」の受講生は2年生でこれまでも10の姿に触れており、幼稚園教育実習、保育実習を終え、子どもとのかかわりを経験し保育現場をイメージできる。それを踏まえたいうで10の姿についてより理解が深まるよう、保育現場での子どもの姿を例に挙げ、学生の経験と照らし合わせて学べるよう配慮した。

表1 授業の概要

	テーマ	内容
1	10の姿の視点	・幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領を基に、10の姿、育みたい資質・能力、5領域の関係性について振り返る。 ・保育場面の具体的な事例をあげて解説する。
2	保育場面での10の姿	・保育場面での子どもの姿の事例の絵や写真を通して、子どものどのような姿が10の姿とつながりがあるのか確認する。 ・「かんたん絵本」の作成①
3	10の姿と保育環境	・保育場面での子どもの姿の文例が、どの10の姿とつながりがあるのか、問題（25問）に取り組む。 ・問題の答え合わせをしながら、子どもの育ちや学びと10の姿の捉え方について、グループディスカッションする。 ・「かんたん絵本」の作成②
4	10の姿と子ども理解	・保育場面の子どもの映像を視聴し、子どものどのような姿が10の姿とつながりがあるのかを考え記録する。 ・考え記録したものを持ち寄って、グループディスカッションする。 ・「かんたん絵本」の読み聞かせ

5. 調査の結果と考察

質問調査に関して、10の姿について4回目の授業中に受講生46名を対象に実施し有効回答数46件を得た。

5-1. 10の姿の理解の認識と困難

項目①の10の姿について、保育場面でどのように捉えるのか理解できたかに対して表2のとおり、よく理解できたが14名（30.4%）、理解できたが27名（58.7%）、さらに、少し理解できたと回答した5名（10.9%）も合わせるとすべての学生が理解できたと感じていることが

分かる。

表2 10の姿についてどのように捉えるのか理解できたか

	n =46 (%)
よく理解できた	14 (30.4)
理解できた	27 (58.7)
少し理解できた	5 (10.9)
理解できなかった	0 (0)

設問②の10の姿について、どの授業で理解が深まったかに対しては、表3のとおり、10の姿と子どもの理解については17名(37.0%)と4割に近く、次に10の姿と保育環境が15名(32.6%)と3割を超え、保育場面での10の姿は12名(26.1%)の学生が理解が深まったと感じている。一方、10の姿の視点と回答したのは2名(4.3%)に止まった。10の姿と子ども理解の授業は、保育場面の子どもの映像を視聴し、子どもの姿が10の姿とどのようなつながりがあるのかを考え、その考えをグループディスカッションした。自分の考えだけにとらわれず、他者の考えにも触れることで理解が深まったことが確認できる。一方、10の姿の視点の授業は、10の姿について、幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領から読み解いていったが、筆者が一方向的に解説を進めたため、学生は子どもの姿をイメージすることが難しかったことが伺える。

表3 10の姿についてどの授業で理解が深まったか

授業テーマ	n =46 (%)
10の姿の視点	2 (4.3)
保育場面での10の姿	12 (26.1)
10の姿と保育環境	15 (32.6)
10の姿と子ども理解	17 (37.0)

項目③の10の姿について、どの授業が難しいと感じたかに対しては、表4のとおり、10の姿と子ども理解は29名(63.1%)と6割以上が難しいと感じ圧倒的に多い。10の姿の視点は7名(15.2%)、10の姿と保育環境は6名(13.0%)とほぼ同率で、保育場面での10の姿は4名(8.7%)という結果になった。10の姿と子ども理解の授業を難しいと感じた要因として、保育場面の子どもの映像を視聴し、子どもの姿が10の姿とどのようなつながりがあるのかを考える過程での捉え方の困難さがあったことが伺える。難しいと感じた割合が多い一方で、表2でも示すとおり、理解が深まったと感じる学生も多かった。グループディスカッションにおいて、自分と他者の意見を交換することで新たな発見や捉えを確実にし、学生の自信となったことも確認できる。

表4 10の姿についてどの授業が難しいと感じたか

授業テーマ	n =46 (%)
10の姿の視点	7 (15.2)
保育場面での10の姿	4 (8.7)
10の姿と保育環境	6 (13.0)
10の姿と子ども理解	29 (63.1)

5-2. 絵本づくり場面での10の姿

表1授業の概要で示すとおり、2回目から4回目の授業にかけて、体験的に子ども理解の学びを深めるため指導場面を想定し「かんたん絵本」の作成を演習として取

り入れた。10の姿の授業での取り組みということもあり、「子どもだったらどうするか」「何歳児であれば絵本づくりができるか」など保育場面を想像しながら取り組む姿が見られた。

項目④の「絵本作り」について、10の姿に対応すると思うかに対して、つながっていると思うものすべてを回答してもらった。その結果、表5のとおり思考力の芽生えが34名(73.9%)と最も高く、次いで言葉での伝え合いと豊かな感性と表現が30名(65.2%)と同率で、次いで数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚が27名(58.7%)だった。健康な心と体と自然との関わり・生命尊重は同率で3名(6.5%)、道徳性・規範意識の芽生えは2名(4.3%)と割合が低かった。さらに、社会生活との関わりと答える学生はいなかった。

学生の10の姿の捉え方にはばらつきがあるが、多様な面で子どもたちの育ちと深くかかわっていると感じているとの見方もできる。

表5 「絵本作り」場面での子どもの姿と10の姿のつながり(複数回答)

10の姿	n =46 (%)
健康な心と体	3 (6.5)
自立心	11 (23.9)
協同性	10 (21.7)
道徳性・規範意識の芽生え	2 (4.3)
社会生活との関わり	0 (0)
思考力の芽生え	34 (73.9)
自然との関わり・生命尊重	3 (6.5)
数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	27 (58.7)
言葉での伝え合い	30 (65.2)
豊かな感性と表現	30 (65.2)

5-3. 10の姿の授業後の意識の変化(自由記述の分析)

5-3.1. SCATの手法

設問⑤の10の姿の学びについて感想をお聞かせくださいに対しての回答は自由記述とした。自由記述の分析は大谷(2011)によるSCATの手法(Steps for Coding and Theorization)に基づいて行った。SCATを採用した理由は、大谷(2011)によると「アンケートなどの自由記述や比較的小規模の質的データの分析にも有効的である」と示しているためである。分析は以下の手順で進めた。まず、SCATの分析フォームに質問調査の自由記述のテキストデータを記入する。次に4つのステップで自由記述に出てきた語句のコーディングを行い、テーマや構成概念を抽出する。最終的に抽出したテーマや構成概念を紡いでストーリー・ラインと理論を記述する。4つのステップとは以下のとおりである。

- <1> データの中の注目すべき語句を書き出す。
- <2> <1>に書き出した内容を表すような別の語を記入する。
- <3> <2>に記入した語をデータの文脈で説明できるような語を記入する。
- <4> <1>から<3>までをよく読み新たな構成概念を考えて付す。

5-3.2 SCATによる分析の結果と考察

自由記述により得られたテキストデータは46個だった。SCATの4つのステップで分析し、10の姿の学び



表6 10の姿の学びについての感想のSCATによる分析例

番号	テキスト (自由記述原文)	<1> テキスト中の注目すべき 語句	<2> テキスト中の語句の 言い換え	<3> 左を説明する ようなテキスト 外の概念	<4> テーマ・ 構成概念
1	保育所実習中の際に10の姿に基づいて指導案を書くことが大事ということを知り、実際に授業でも子どもの様子を見てこういう姿があるな なぜこのようなことが起きるのかということを知り10の姿を当てはめて考え、グループで意見を伝え合うことができました。	保育所実習中、10の姿に基づいて指導案を書くことが大事、10の姿を当てはめて考え、グループで意見を伝え合うことができました	実習中の指導案作成においての10の姿の学び、グループ活動で理解が深まった	実習での学び、理解の方法	10の姿と保育記録の関係、グループ活動の成果
8	全体を通して最初は図で表した後に25問の問題をやった事でどうゆうのが当てはまるのかを問題だけで実感したつもりでしたが、映像の中から探すとなった時に、子どもの姿を見てもわからないなと感じました	問題だけで実感したつもり、映像の中から探すとなった時に、子どもの姿を見てもわからないなと感じました	自身の理解度、映像からの子どもの姿の読み取りの困難さ	理解の認識、学びへの挑戦	学習意欲、理解の困難さ
12	10の姿を学ぶことで、実際の保育の場面で活用出来るため、大切なだと改めて感じました。10の姿は個々が独立しているのではなく、密接に関わりあっているため、どの場面で何が育っているのか判断するのは難しいけどより良い育ちのために考えていけるようにしたいです。	10の姿を学ぶこと、実際の保育の場面で活用出来るため大切、10の姿、どの場面で何が育っているのか判断するのは難しい、良い育ちのために考えていけるようにしたい	10の姿の学びの保育での活用の重要性、保育場面での子どもの育ちの理解の難しさ、子どもの育ちのための努力	多様な子どもの姿、保育者の質	10の姿の意図、学びの継続
20	10の姿を具体的に学ぶことができ、1年時の振り返りができたため、大変良い機会となりました。また、実習を終えて取り組むことで、分かった上でさらなる知識を頭に入れることができました。今後社会に出てからも10の姿を大切に記録など書く際は活用していきたいと思っています。	1年時の振り返りができた、実習を終えて、さらなる知識を頭に入れることができました、10の姿を大切に記録など書く際は活用していきたい	学びの振り返りと実習での経験の確認、記録される際10の姿を取り入れて記入する	学びの振り返り、記録の材料	学びの実践
31	10の姿については知っていたけど、具体的にどんな動きがどのように関わっているのかまでは分からなかったの、様々な事例を通して子どもたちの学びを10の姿についての視点から見ることができ、理解できました。難しいイメージが強くありましたが、事例を通してみると分かりやすくなり、抵抗なく学びを深めることができました。	具体的にどのように関わっているのかまでは分からなかった、子どもたちの学びを10の姿についての視点から見、理解できました、難しいイメージが強くありましたが、抵抗なく学びを深めることができました	10の姿のつながりの難しさ、10の姿の視点から見ると子どもの育ち、難しいから抵抗なく学べる意識の変化	保育と10の姿の関連、意識の向上	10の姿のつながり、子ども理解
34	幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿は他の授業でも学んでいたのですが、この授業で項目ごとに具体的な事例を出したり、映像を実際に見てどんなことが当てはまるのかを考えたり、書いたりすることで学びがすぐ深まりました。また、10の姿が5領域のどこに当てはまるのかを図に書くのも分かりやすかったです。自分で絵本を作った項目に当てはまるのかを考えるのもすごく楽しかったです。	10の姿は他の授業でも学んでいた、事例、映像、どんなことが当てはまるのかを考えたり書いたりすることで学びが深まりました。10の姿が5領域、図に書くのも分かりやすかった、絵本を作った項目に当てはまるのかを考える、楽しかった	他の授業での学び、具体的な例をあげての学びの深さ、授業での体験から10の姿への気付き	学びの意欲、	学習意欲、学習過程、学びの発見
37	初めはすごく難しく、何がなんだか分からなかったけど、図でまとめて理解しやすくなり、例文やDVDを通して10の姿を学ぶことで少しずつ理解していくことができました。私が1番わかりやすいと思ったのは、10の姿をキーワードで分けたものです。1つの項目を詳しくキーワードで分けることで、より理解しやすかったです。その後例文があったので学びが深まりました。10の姿を学ぶ前より今の方が理解できたと感じています。	1番わかりやすいと思ったのは、10の姿をキーワードで分けたもの、10の姿を学ぶ前より今の方が理解できた	10の姿のキーワード分類による自身の理解	学びの理解と自信	自信と自己肯定、学習成果と喜び
42	どの活動にも10の姿は関わってきて、それが何を示しているのかそこを考えていくのが難しかったです。映像を見ただけでは全て読み取ることが難しく、他の人が感じたこと読み取ったことを聞くほど納得することも多く、正解は無いものなのかなと思いました。10の姿は覚えることが多く、さらに具体的にするといくらかでも出てくるので難しく感じるけれど、少しずつ理解することが出来たので、保育を行う時、意識をしながら行いたいと思いました。	どの活動にも10の姿は関わって、それが何を示しているのか考えていく、難しかった、映像を見ただけでは全て読み取ることが難しく、他の人が感じたこと読み取ったことを聞く、納得、正解は無いもの、保育を行う時、意識をしながら行いたい	10の姿のつながりと意図の難しさ、映像での読み取りとグループ活動での理解の深まり	10の姿の論理的思考、具体的な事例の重要性	経験と学びの関係、保育者としての期待、理解のきっかけ
44	今深く学んでみて、いろんなことに10の姿がかかわっていることを知りました。表現方法だけでなく言葉による伝え方や、想像性が育まれているなど、一つ一つの過程で様々なことが関わっているのだと感じました。考えていておもしろいなと感じました。10の姿でも、みんな考え方が違うので、こっちの考え方もあるのだとしました。	いろんなことに10の姿がかかわっている、考えていておもしろい、10の姿でも、みんな考え方が違う	10の姿の学びの面白さ、多様な捉え方	学習意欲の変化、柔軟な考え方	意識の変化、柔軟性

についての感想の分析例を表6に示し、分析によって浮上したテーマ・概念の一覧を表7に示す。

表7 代表的なテキストデータと概念

【10の姿と保育記録の関連】【グループ活動の成果】【理解の困難さ】【学びの発見】【理解のきっかけ】【保育者の質の向上】 【学習意欲】【保育者の視点】【学習過程】【10の姿の意図】【学びの継続】 【経験と学びの関係】【子ども理解】【経験と理解】 【個々を大切にしたい保育】【学習成果と喜び】【学びの実践】 【学生の保育観】【意識の変化】【保育者の連携】【多様な保育計画】 【10の姿のつながり】【保育者としての期待】【自信と自己肯定】 【柔軟性】【子どもの成長の可視化】
--

1) ストーリー・ライン

SCATの分析から導かれたストーリー・ラインを以下に示す。

学生は、実習で実習記録を作成することは必須である。**【10の姿と実習記録の関連】**を深く学ぶことで記録が書きやすくなると感じた学生もいた。授業実施前の意識として、10の姿をあまり意識しておらず、保育の中で**【10の姿のつながり】**があることを理解できていなかった学生が多数いた。今回の授業では、**【グループ活動の成果】**が大きく、自分の意見とグループの仲間の意見を共有し、自分の視点では見えなかったことが見えるようになったり、面白いと思ったり、新たな**【学びの発見】**となっている。また、グループ活動に加え、授業内の具体的な事例や映像の視聴、クイズ形式の問題に段階的に取り組んだことが**【理解のきっかけ】**となっていた。学生にとって**【学習過程】**も重要であることがわかる。10の姿を理解するには**【子ども理解】**や**【保育者の視点】**また**【柔軟性】**が重要だと感じている。子どものどのような姿が10の姿につながっているのか**【10の姿の意図】**を考える際、偏った見方にならないよう、他者の視点も取り入れ違った視点で見ることが大切だと学んでいる。また、実習での経験を振り返って考えるなど自身の経験から学ぶことは身近であり、**【経験と学びの関係】**は深いと捉えている。この多様な学びは**【学生の保育観】**の芽生えとなったといえる。また、仲間と一緒に学んでいくうちに、10の姿の理解に正解や不正解をつけるのではなく、今後も学んでいく**【学びの継続】**をすることが大切だと実感していた。**【学習成果と喜び】**は今後の**【学習意欲】**に繋がった。しかし、中には、授業を終えてからも10の姿の理解に対して難しいと感じたり、理解できたつもりでも動画での子どもの姿を読み取ることができなかったり、**【理解の困難さ】**を感じている学生もいた。そんな**【理解の困難さ】**を持った学生も、10の姿について子どもの姿を想像しながら学ぶ姿勢が何えた例もある。例として、10の姿は難しく感じて進まなかったが、仲間と学ぶことで理解できたと**【意識の変化】**により喜びに変わっている。その**【意識の変化】**が最終的には**【自信と自己肯定】**に発展していた。

保育者として保育の現場で**【学びの実践】**として役に立てたいと**【保育者としての期待】**を持っていることも分かった。多様な子どもたちが安心・安全な環境で過ごすには、**【保育者の質の向上】**が求められ**【個々を大切にしたい保育】**が必要となり、子どもの姿を捉えた**【多様な保育計画】**を立てることが必須となってくる。保育計画を立てるうえで、子どもの姿を理解することが第1段階であるがゆえに**【保育者の連携】**や**【子どもの成長の**

**可視化】**をすることが**【子ども理解】**につながる。

2) 理論記述

ストーリー・ラインの記述を踏まえ理論記述を行い8つが導出された。

- ① 保育の現場で子どもの姿を可視化するうえで記録は不可欠である。
- ② 10の姿を理解することが子ども理解につながっている。
- ③ 授業でのグループワークは、学生の理解に有効的で学びの発見に繋がっている。
- ④ 10の姿の理解のきっかけは、グループ活動と経験に基づく内容と学習の過程がキーワードとなる。
- ⑤ 10の姿を理解するには、子ども理解、保育者の視点や柔軟性が必要である。
- ⑥ 理解の困難さもありながら、他者の考えに触れることで学びの発見となっている。
- ⑦ 10の姿を理解できた喜びから学びを実践に活かしたいと感じている。
- ⑧ 10の姿が理解できたことで、学びの継続の必要性を感じ保育者としての期待につながっている。

3) 理論記述からの考察

理論記述から導出された8つの項目を基に考察した。①について、子どもの姿を可視化することは、実際の保育現場で年度末に作成する指導要録においても、子どもの様子や成長を的確に記すためには日々の記録が重要であることが見えてくる。②は、園に多様な子どもが在籍する中での保育において、10の姿が子ども理解の手掛かりとなることが期待できる。③は、仲間との学びによってより深い理解につながることを示している。④は、学びの過程での事例や映像は、自身の経験を振り返ることができ有効的であると見える。⑤は、保育者の視点、柔軟性が子どもの育ちや10の姿の理解につながっているものだと考えられ、さらに、保育環境を工夫するうえでの重要な視点となる。⑥の理解の困難さは、他者の考えに触れることが解決の糸口となり理解への第一歩となる。⑦の10の姿の理解の喜びは、学生の良い方向への意識の変化を導いていることが分かる。⑧は、保育者への期待感を持って学びの継続の必要性を示している。

6. おわりに

本研究は、事例や映像を用いての授業を通して、学生が10の姿についてどの段階で学びを深め、難しいと感じる点がどのようなことなのか、また、授業実施後に10の姿についてどのように意識が変化したのかを明らかにし、今後の授業の内容と課題を検討することを目的とした。授業を実施するにあたり、10の姿をより理解できるよう保育現場での子どもの姿の理解を事例として挙げ授業を展開した。

結果として、10の姿について調査対象の学生すべてが理解できたと感じていた。理解のきっかけとなったのが、子どもの保育の様子の動画を視聴し、自身が考えたものをグループディスカッションによって意見を共有することで、深い理解に繋がっていることが明らかになった。前段階として、10の姿の視点や保育場面での10の姿を理論的に学ぶことが理解への一歩だということも確認できた。一方、10の姿に対して苦手意識があり、子どもの育ちと10の姿の具体的なつながりがどこにある

のか見出す方法が分からないことが理解の困難になっていたと考えられる。子ども理解を深めるための絵本づくりは、保育場面を想像しながら取り組むことができた。絵本づくりの活動だけでも、捉え方にばらつきはあるが、子どもの育ちと10の姿につながりがあることが新たな学びと自信になっている。10の姿の授業を通して学生は授業前と授業後の意識が変化し学習成果の喜びがあることも示唆された。保育においての子ども理解は欠かせないものであり、子どもの育ちの手掛かりとなる10の姿の理解の重要性をこの授業を通して認識できたであろう。

本研究で実施した授業は、学生がすべての実習を終えての受講となった。実習前に10の姿を深く学ぶことでより充実した実習での学びがあることが予想される。実習経験のほとんどない1年生が10の姿の理解について学ぶ際の、多様な授業内容の検討が必要である。

### 引用文献

- 金子功一・山田千愛・植草一世（2020）「学生が体験的に幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を学ぶための多様性のある授業の意義Ⅱ」植草学園短期大学紀要（21）pp.45-50
- 文部科学省（2021）『指導と評価に生かす記録』チャイルド社
- 文部科学省（2018）『幼稚園教育要領解説』フレーベル館
- 大谷尚（2008）「4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 - 着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き -」名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）54（2），pp.27-44
- 大谷尚（2011）「明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析方法」感性工学10（3），pp.155-160
- 榊原久子（2019）「保育者が困難を感じる子どもの特徴と保育環境に関する一考察 - 環境の構造化の視点から -」川口短期大学紀要 33，pp.134-143
- 田中裕子（2020）「幼児の主体的な遊びを育む保育者の関わりと援助 - 環境構成から考える -」鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要人文科学・社会科学編（3）
- 植草一世・長嶺章子・堀彰人・田村光子・松原敬子・根本曜子・相磯友子・久留島太郎・山本邦晴・佐藤慎二郎・中澤潤（2019）「保育者養成短期大学の多様性を見据えた授業や行事（活動）の」取り組み」植草短期大学紀要（20），pp.57-67

### 参考文献

- 厚生労働省（2018）『保育所保育指針解説』フレーベル館
- 無藤隆（2018）『幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領 3法令 すぐわかる すぐできる おたすけガイド』ひかりのくに
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2018）『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館
- 横山洋子（2021）『子どもの育ちをサポート！生活とあそびから見る「10の姿」まるわかりBOOK』ナツメ社

# 幼稚園実習における音楽活動についての一考察

—聞き取り調査分析報告を踏まえて—

A Consideration on Music activities in Kindergarten Training.

—Based on the Interview survey analysis report—

前川尚子

Shoko MAEGAWA

湊川短期大学 幼児教育保育学科

## 要旨

本稿では、保育者養成校の短大において2年次に行われる3週間の幼稚園実習について、その期間中の音楽活動に必要な曲はどのような曲であったかを、事前訪問時の課題、実習中課題等の聞き取り調査を実施した。またピアノ伴奏での弾き歌い曲等、どのような曲であったかを調査することで本年度の実習における音楽活動の実際を明らかにする。またその結果から実習曲選曲の際の参考にするとともに、幼稚園実習までの事前ピアノ指導における効果的な指導に繋げていきたいと考える。ピアノ初心者が多い本学において、基礎的な演奏技術の習得とともに、実践的な演奏技術を養うためには、どのような指導が有効であるのか考察するとともに、今後のピアノ指導法の在り方についても検討する。

キーワード：保育者養成，弾き歌い，音楽活動，幼稚園実習

## 1. はじめに

本学の幼児教育保育学科における幼稚園実習は、1年次の1週間実習と2年次の3週間実習が在り、2年次6月の幼稚園実習においてピアノ伴奏での弾き歌いが概ね必要となる。その後も学生は保育実習においても弾き歌いが必要な場合もあるが、曲数も弾く機会も少なく、幼稚園実習ほどもピアノを使った音楽活動は少ないように認識している。そのため幼稚園実習の長い実習期間中の音楽活動のみを考えても、子どもたちとともに楽しめる曲を必要に応じて事前準備練習し、その導入から展開までを考えて準備を進め実習に臨む必要がある。特にピアノ初心者にとって、ピアノを使つての弾き歌いの場合、自身が演奏することが精一杯の上、子どもたちとアイコンタクトを取りながら演奏すること、それ一つをとっても、その大きな不安は想像に難くない。少しでも学生の不安を軽減するためには、どのように指導を進めていくべきかを検討、考察する。また今年度の幼稚園実習の実際のようにすを把握することによって、今後の指導に活かし授業の展開にも繋げていけると考える。

## 2. 方法

本学幼児教育保育学科2年生の学生を対象に、6月3週間の幼稚園実習事前訪問直後に実習における音楽活動についての弾き歌い課題曲等の調査をした。また実習後には実際の音楽活動で演奏した弾き歌い曲等についての調査を行った。

## 3. 調査結果

### 3-1. 事前訪問における音楽活動のための課題曲の有無について

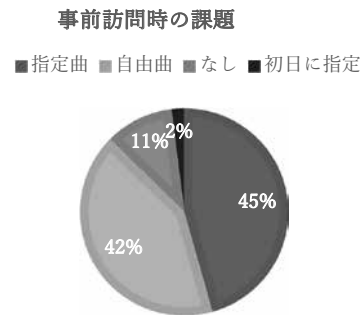


図1 課題曲の有無

図1より、事前訪問時に45%の学生は実習で使用する曲を指定され、42%の学生は季節の曲から自由に選択準備するように指示があり、11%の学生には課題がなかった。また2%の学生は、実習初日に楽譜を渡すと伝えられた。以上のような結果となった。

#### 3-1-1. 事前訪問時に指定された実習曲課題(指定曲)の曲数と曲目(図1の45%が対象)

1曲：3名 ， 2曲：2名 ， 3曲：3名 ，  
 4曲：2名 ， 5曲：1名  
 6曲：1名 ， 7曲：1名 ， 8曲：3名 ，

10曲：1名 ， 12曲：1名  
 2曲指定+季節の自由曲：1名 ，  
 3曲指定+季節の自由曲：2名

指定曲目：

・生活の歌

「朝のうた」「朝のごあいさつ」「おかえりのうた」「さよならさんかく」「さよならのうた」

「123のごあいさつ」「おむねをはりましょう」

「おべんとう」「給食のうた」「おひるのうた」「お当番の歌」「お当番さん」

「はをみがきましょう」「ねずみのはみがき」

・季節の歌など

「かえるの合唱」「かたつむり」「ながぐつマーチ」「にじ」

「かえるのコーラス」「カエルの天気予報」「雨のワルツ」「あめふり」「雨ふりシンフォニー」「おひさまキラキラ」

「どろんこと太陽」「とけいのうた」「くじらの時計」「すてきなパパ」「たなばたさま」「しゃぼん玉」「そらのほし」

「なにぬねなかよし」「ともだち賛歌」「イップニッブジャンプ」「うさぎさんよくみてね」「あかあおきいろ」

「子守唄」「ドラえもん」「めざせポケモンマスター」

「にじ（菅田将暉）」

・園の曲・宗教曲

「園歌」

「黙想の曲ⅠⅡ」「ののさま」「しっている」「仏さま」

「ハレルーヤ」「きよいあさあけて」「ばらばらおちる」

また聞き取り調査から45%の内4%の学生は「事前の指定曲以外の指定曲を実習期間中の演奏当日または前日に準備した」「事前に指定された曲は練習したにもかかわらず全く弾くことがなかった」もしくは「事前に指定された曲は練習したがほとんど弾くことはなかった」という学生もあった。

・実習開始後の新たな指定曲は次のような曲であった。

「朝のうた」「おべんとう」

「あめふり」「にじ」「むすんでひらいて」「しゃぼん玉」

「かもつ列車」「線路は続くよどこまでも」

「アイアイ」「さんぽ」「おもちゃのチャチャチャ」

「ささぐみあかし」「ちようちよう」

「みぎてひだりて（課題：移調して演奏）」

以上のことから、予定していないことが起こった時にどう対処するのか、学生の力量を測る課題の提示が感じられる。その時にどのような対応ができるのか、臨機応変な対応が求められることは言うまでもない。

**3-1-2. 事前訪問時に季節の曲（自由曲）を自身で選択準備するように指示された学生が準備した曲数と曲目（図1の42%が対象）**

1曲：2名 ， 2曲：6名 ， 3曲：5名 ，

4曲：3名

6曲：1名 ， 8曲：2名 ， 10曲：1名

自由曲：

・生活の歌

「朝のうた」「おべんとう」「おかえりのうた」「はをみがきましょう」

・季節の歌

「かえるの合唱」「かたつむり」「ながぐつマーチ」「にじ」

「とけいのうた」「たなばたさま」「しゃぼん玉」「あめふり」「あめふりくまこの」「かえるのかぞくが」

・手遊び・その他

「むすんでひらいて」「てをたたきましょう」「宇宙船にのって」

「みどりのマーチ」「子犬のマーチ」

42%の内20%の学生は実習開始後に指定曲があり、それを準備し演奏した。

「しゃぼん玉」「かえるのかぞくが」などが指定された。

**3-1-3. 事前訪問時に課題曲がなかった学生（図1の11%が対象）**

全体の11%の学生は実習中にもピアノを使つての課題はなかったようで、園では先生のピアノ演奏で子どもたちは歌っていたが、自身は弾く機会がなかった学生や、園にピアノが無く弾くことがなかった学生もいた。

ピアノの無い園では、「くまさんくまさん」「でんでんむし」「かたつむり」「ひらいたひらいた」「どっちどっち」「まいまい」「もぐらどんの」「こんこんちきちき」「どんどんばしわたれ」などを歌っていたことが報告された。

**3-1-4. 実習初日に楽譜を渡された学生（図1の2%が対象）**

初日には「にじ」「ながぐつマーチ」「はみがき」「まるむし」の4曲が指定された。

**3-2. 実習中に演奏した曲数及び曲目（無課題と回答した11%は除外）**

1曲：7名 ， 2曲：11名 ， 3曲：6名 ，

4曲：8名 ， 5曲：5名

8曲：1名 ， 9曲：2名 ， 10曲：1名 ，

11曲：1名

以上のことから、幼稚園実習中に平均約3～4曲を演奏したことがわかる。それぞれの曲の演奏回数については、毎日弾いた・数回弾いた・1回だけ弾いたなど園によりさまざまで、責任実習時の朝の会・昼食時・帰りの会での歌唱活動でのピアノ演奏が多くあげられていた。

**3-3. 実習期間中に園で歌われていた曲（先生方が弾かれていた曲）**

実習期間中6月に自身は演奏しなかったが、園で歌われていた曲があれば回答してください。という質問の回答は次のようであった。

・生活の曲

「朝のうた」「おはようのうた」「おはよう！」「園のおはようのうた」「園のおかえりのうた」「おべんとう（給食）のうた」「はをみがきましょう」「虫歯建設株式会社」

・季節の曲

「かたつむり」「かえるの合唱」「あめふりくまのこ」「あまだれ」「だからあめふり」「あめふり」「おたまじゃくしの101ちゃん」「ニャニョの天気予報」「にじ」「にじのむこうに」「あしたははれる」

・記念日の曲

「とけいのうた」「大きな古時計」「父の日のうた」

・その他

「すいかの名産地」「アイスクリームのうた」「ほくのミックスジュース」「たなばたさま」「メリーさんのひつじ」「ふしぎなポケット」「園のお誕生日のうた」「キャンプだホ

イ「ホ！ホ！ホ！」「ゆかいな牧場」「ともだち賛歌」「あ  
りがとうの花」「おさんぽ」「世界中の子どもたちが」「宇  
宙船のうた」「ドラえもん」「おひさまキラキラ」「勇気  
100%」「紅蓮華」「キメツの刃」「ハッピーチルドレン」「ア  
チャパチャノチャ」「どろんこと太陽」「めだかの学校」「み  
つばちマーチ」「みどりのマーチ」  
・手遊び曲・体操曲  
「てをたたきましょう」「アルプス一万尺」「おたまじゃ  
くし体操」「スイカメロン」「じゃんけん列車」「お天気じゃ  
んけん」「むしむしじゃんけん」  
「とんとんとんとんひげいさん」「ちっちゃないちご」  
「あたまかたポン」「きらきら星」宗教曲  
「ののさま」

表1 実習中に演奏した曲目

かえるの合唱	22	ねずみのはみがき	1
かたつむり	18	さよならさんかく	1
にじ	14	てをたたきましょう	1
ながぐつマーチ	8	たなばたさま	1
しゃぼん玉	8	おひさまキラキラ	1
おべんとう	8	みどりのマーチ	1
(給食のうた)	(2)	宇宙船のうた	1
おかえりのうた	7	ちょうちょう	1
朝のうた	6	みぎてひだりて	1
おはようのうた	4	1. 2. 3のごあいさつ	1
はをみがきましょう	4	おむねをはりましょう	1
おとうばん	3	子守唄	1
むすんでひらいて	3	イップニップジャンプ	1
あめふりくまのこ	2	かもつ列車	1
あめふり	2	線路は続くよどこまでも	1
さよならのうた	2	さんぽ	1
とけいのうた	2	おもちゃのチャチャ チャ	1
かえるのかぞくが	2	アイアイ	1
あさのごあいさつ	1	ともだち賛歌	1
1. 2. 3でおはよう	1	まるむし	1
おひるのうた	1	子犬のマーチ	1
ハレルーヤ	1		
きよいあさあけて	1		
ばらばらおちる	1		
黙想の曲ⅠⅡ	2		
ののさま	1		
仏さま	1		
しっている	1		

4. まとめ

今回の調査で幼稚園実習での音楽活動について、その内容についても明らかになった。また同時に、現在の問題点やこれからの指導上の課題も明確になってきた。次にその問題点や課題をあげながら、今後に向けての改善のための考察を進めていく。

現在、本学におけるピアノを使った授業は1年次に「器楽Ⅰ」と「器楽Ⅱ」、2年次に「器楽Ⅲ」と「器楽Ⅳ」が開講される。これらの授業ではピアノ基礎演奏技術の習得を目的として、学生のスキルに応じたバイエル教則本・ブルグミュラー 25 番練習曲・ソナチネアルバム・ソナタアルバムなどのテキストを使用し、「器楽Ⅰ」では、学生はピアノの経験もそれぞれのため、個々の学生の演奏スキルを観察・把握しながら指導を進める。またピアノ初心者には「音楽基礎」の授業を開講し「器楽Ⅰ」をフォローアップするとともに、音楽理論の基礎理解と読譜力を習得後、バイエル 46 番練習前に合わせてハ長調の3コードを習得する。ピアノ初心者には伴奏の基本とな

る3コードを定着させることを目的とし、「みつばちマーチ」「きらきら星」「かえるの合唱」などの簡単なハ長調での伴奏曲を演奏できるようにし、弾き歌いへの導入を行っている。1年後期には「子どもと音楽表現」で保育者として必要な音楽理論を習得し、さらに表現に繋がる読譜力を高め、弾き歌い教材を使用してそれぞれの伴奏形の変化を理解習得する。また人前で弾くことに少しでも慣れることを目的として、練習した曲の演奏発表プレゼンテーションの機会をできる限り作っている。「器楽Ⅱ」は「器楽Ⅰ」で習得した演奏スキルをさらに伸ばし、弾き歌いの練習も並行して行っている。「器楽Ⅲ」においては、さらに演奏スキルを高めながら、実習に向けた弾き歌い曲の準備練習が中心となり幼稚園実習の期間に入っていく。幼稚園実習は6月の3週間ということは、「器楽Ⅲ」の授業は実習のために途中中断し、実習後に再開することとなる。入学から幼稚園実習までのピアノを使った授業は以上のように展開している。その後、保育実習曲や就職試験を見据えながら「器楽Ⅳ」の授業へと展開していく。以上が本校のピアノを使った授業の流れとなる。

数年前からのコロナの影響で歌唱活動が制限され、昨年からの制限解除によって以前のように歌唱活動も戻ってきたとはいっても、調査結果からコロナ前の実習での課題曲数と比べると減少の傾向が今回の調査結果から感じられた。また実習課題曲については、学生のピアノ演奏技術によっても大きな差異があることは確かであるが、以前の実習課題曲と大きな違いはなく予想できる定番曲が多いことがわかった。短大の2年間という短い期間においては1年生で如何に実習を見据えたレパートリーを確実に増やすことができるかが重要であると確信した。ピアノ経験者はレパートリーを確実に増やしていくことがある程度は可能であるが、ピアノ初心者にとっては基礎的技術の習得に多くの時間を必要とする、また一度弾けた曲は継続練習がより必要であることを踏まえて、初心者には当然のことながら1年次に徹底した指導が必要であることがわかる。筆者は以前からレパートリーを増やすために授業での取り組みをしてきたが、学生の歌唱教材のレパートリー数の増加にはなかなかつなげていないと感じている。特にピアノ初心者が基礎を習得するためのバイエル教則本には番号付きが106曲あり、本校ではピアノ演奏基礎技術習得に必要な50曲程度を選択し、毎年内容を検討しながら進めているが、学生の躓きを解消し、かつ現在の演奏技術を保持向上させながら教則本の選択曲を少なくする方向での検討も必要だと感じている。それによって歌唱教材への取り組みを充実させることができると考えられる。また「器楽Ⅰ」と「音楽基礎」、「器楽Ⅱ」と「子どもと音楽表現」これらの授業のより密な連携が必要であることは明らかである。授業で歌唱教材を扱う場合には、それぞれの学生のスキルに合わせて、難しい楽譜は伴奏部を簡易に編曲することは多い。編曲の方法は授業でも指導するが、実際には教員がその場で伝えることが多い。そのことから、今後は段階に応じて弾き易く編曲した楽譜の制作も検討する必要があるとの考えに至った。

当然のことながら、幼稚園によって音楽活動の取り組みは様々であるが、今回のような調査を続けることによって、実習をお世話になる園の音楽活動の傾向を事前に知ることによって学生の不安を少し取り除くことができるのではないかと考える。そのためには、今回の結果を基

にして更に実習園と課題曲等についての詳細を分析し、データの今後の蓄積とともに比較検討を継続することが必要だと感じた。

また学生がお世話になる幼稚園実習の園は1年生の早い時期に決定することからも、そのデータを共有することで実習への不安解消にも繋がると考える。

#### 引用・参考文献

- ・鈴木恵津子・冨田英也（2011）「改訂ポケットいっぱい  
のうた 実践子どものうた 簡単に弾ける 144 選」教育芸術社
- ・諸井サチヨ（2019）「園生活での音楽表現活動の重要性とその活動を支える保育者に求められる技術に関する一考察」『淑徳大学短期大学部研究紀要』第 60 号 pp.47-58.
- ・石塚将之・岡泉志のぶ（2013）「幼稚園実習におけるピアノ課題曲（生活の歌）資料」『佐野短期大学部研究紀要』第 24 号 pp.69-79.

# Effects of lifestyle on autonomic nervous activity in pre-school children

Takashi MATSUO · Shintaro TSUJI · Miyuka TOKUSHIMA

Minatogawa College · Kobe University of Future Health Sciences · Graduate School of Osaka Seikei University

Nobuhito NAGAI · Keisuke ORITA · Tatsuya USUI

Tokyo Future University · Osaka International College · Osaka Seikei University

## Abstract

Lifestyle disruptions disturb the autonomic nervous system, affecting the physical and/or mental health of children. Since the autonomic nervous system plays a crucial role in the maintenance of homeostasis, it is important to improve lifestyle habits and maintain proper autonomic nervous system activity for appropriate development and health. The aim of the present study was to clarify the effects of sleep habits on autonomic nervous system activity in pre-school children, focusing on bedtime as a sleep habit, and to examine the effects of children's bedtime on their autonomic nervous system activity. Thirty-seven healthy children enrolled in preschool in Osaka participated in this study. To assess sympathetic nervous system activity, salivary amylase activity was measured using a handheld salivary amylase monitor at 9:30 am and 11:30 am. The children were then divided into two groups at each time point based on the salivary amylase measurements: one with increased salivary amylase and one with decreased salivary amylase. A self-reported questionnaire was used to collect data on children's bedtime the previous day. It was found that children with lower sympathetic nervous system activity in the morning had later bedtimes the day before and excessive sympathetic activity in the early morning, suggesting that, in children with early bedtimes and proper sleep habits, appropriate autonomic nervous system activity was seen not only during sleep, but also after waking. These findings are expected to contribute to promoting appropriate autonomic nervous system activity in children.

**Key words:** pre-school age children, autonomic nervous activity, salivary amylase activity, lifestyle

## Introduction

In recent years, children's lifestyles have been disrupted due to changes in the social environment, and this affects children's physical and/or mental health. It has been reported that overweight and/or obesity in children is increased by skipping breakfast, increased screen time, and lower levels of physical activity<sup>1,9,15,23,24</sup>. In addition, pre-school age children with lower physical activity levels have more body fat than pre-school age children with higher physical activity levels<sup>10</sup>.

Lifestyle disruptions disturb autonomic nervous system activity, which affects the physical and/or mental health of children. The autonomic nervous system can be divided into two broad categories, the sympathetic nervous system and the parasympathetic nervous system, and it plays a crucial role in the maintenance of homeostasis<sup>7,11</sup>. Dysfunction of this system adversely affects physical function. In fact, it has been reported that lifestyle disruption has a negative effect on autonomic nervous system activity as reflected by decreased heart rate variability and

increased cardiovascular disease<sup>22</sup>, and that alteration of sympathetic nervous system activity promotes the onset of obesity<sup>16</sup>. Therefore, it is important to improve lifestyle habits and maintain proper autonomic nervous system activity for appropriate development and health. Of lifestyle habits, sleep habits in particular are thought to affect autonomic nervous system activity. Sleep deficits cause overactivity in the stress response system and may induce alterations in the autonomic nervous system<sup>17</sup>. It has been reported that poor quality of sleep and sleep deprivation can disrupt the autonomic nervous system's ability to inhibit sympathetic dominance, and that poor sleep is associated with greater sympathetic nervous system activation in hypertensive patients<sup>12,13,17</sup>. Thus, although sleep deprivation is considered a chronic stressor that negatively affects the autonomic nervous system, whether sleep deprivation in children affects the autonomic nervous system remains unknown.

The aim of the present study was to clarify the effects of sleep habits on autonomic nervous system



activity in pre-school children, focusing on bedtime as a sleep habit, and to examine the effects of children's bedtime on their autonomic nervous system activity. Since sleep deprivation is associated with increased sympathetic nervous system activity<sup>8)</sup>, salivary amylase activity was evaluated in the present study. Salivary amylase is secreted from the salivary glands in response to sympathetic stimuli<sup>25)</sup>. An association between salivary amylase activity and blood levels of catecholamines has been demonstrated<sup>42)</sup>. Therefore, salivary amylase is a useful tool for evaluating sympathetic nervous system activity<sup>25)</sup>.

**Methods**

*Participants*

Thirty-seven healthy children enrolled in preschool in Osaka participated in this study. All participants were aged 5-6 years old. The ethics committee at Kobe University of Future Health Sciences approved the study protocol (approval number, 2020014). The parents of each participant were fully briefed on the experiment and provided written, informed consent for their children to participate in this study.

*Salivary amylase activity*

Salivary amylase activity was measured using a handheld salivary amylase monitor (NIPRO, Osaka, Japan). This monitor enables automatic and time-efficient measurement of salivary amylase activity using a dry-chemical system<sup>20)</sup>. The tip of the testing strip was placed under the tongue for 30 s to collect a sufficient amount of saliva to completely cover the testing strip. Measurements of salivary amylase activity were performed at 9:30 am and 11:30 am. The children were then divided into two groups at each time point based on the salivary amylase measurements: one with increased salivary amylase and one with decreased salivary amylase.

*Questionnaire on life habits*

A self-reported questionnaire was used to collect data on children's bedtime the previous day. Questionnaires were filled out by the parents of each child.

*Statistical analysis*

All values are presented as means ± SD unless otherwise stated. A two-sample t-test was used to compare salivary amylase activity and children's bedtime the previous day between the increased and decreased amylase activity groups. The effect size of each two-sample t-test was calculated using G Power

software (Version 3. 1. 9. 2<sup>4)</sup>). All P values were two-tailed, and values < 0.05 were considered significant. All statistical analyses were performed using the IBM SPSS 27.0 software package (IBM, Armonk, NY).

**Results**

*Salivary amylase activity*

Salivary amylase activity at 9:30 am was 13.6 ± 9.51 and 28.8 ± 13.9 kIU/L in the increased and decreased salivary amylase activity groups, respectively. Salivary amylase activity at 9:30 am was lower in the increased salivary amylase activity group than in the decreased salivary amylase activity group (P < 0.01, d = 1.271; Fig. 1). Salivary amylase activity at 11:30 am was 19.4 ± 13.4 and 16.0 ± 10.8 kIU/L in the increased and decreased salivary amylase activity groups, respectively. Salivary amylase activity at 11:30 am was not significantly different between the increased salivary amylase activity group and the decreased salivary amylase activity group. The changes in salivary amylase activity were 5.90 ± 7.24 and -12.75 ± 10.26 kIU/L in the increased and decreased salivary amylase activity groups, respectively.

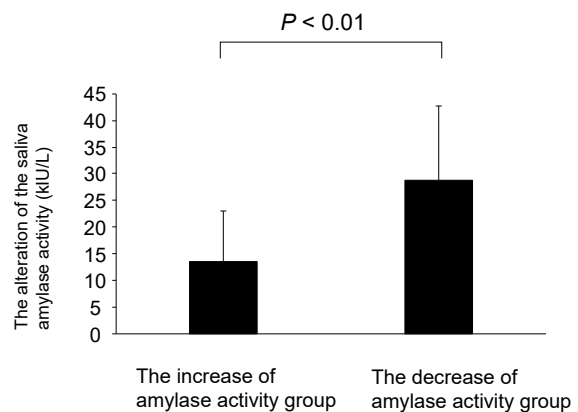


Figure 1. Salivary amylase activity at 9:30 am in the increased and decreased salivary amylase activity groups

*Children's bedtime the previous day*

Children's bedtimes the previous day were 21:18 ± 0:48 and 21:53 ± 0:36 in the increased and decreased salivary amylase activity groups, respectively (Table 1). Children's bedtime the previous day was earlier in the increased salivary amylase activity group than in the decreased salivary amylase activity group (P = 0.04, d = 0.8; Table1).

Table 1. Children's bedtime the previous day in the increased and decreased salivary amylase activity groups

Measurement	The increase of salivary amylase activity groups	The decrease of salivary amylase activity groups	P	d
Children's bedtime previous day	21:18 ± 0:48	21:53 ± 0:36	0.04	0.8

## Discussion

In the present study, the effects of children's bedtime on their sympathetic nervous system activity were examined. The children were divided into two groups based on two measurements: one with increased salivary amylase activity and one with decreased salivary amylase activity. Salivary amylase activity at 9:30 am was lower in the increased salivary amylase activity group than in the decreased salivary amylase activity group. In addition, children's bedtime the previous day was earlier in the increased salivary amylase activity group than in the decreased salivary amylase activity group. Though sympathetic nervous system activity is decreased and parasympathetic nervous activity is increased during sleep<sup>5,6,21)</sup>, and sympathetic nervous system activity is increased from morning to afternoon<sup>14,18,19)</sup> in healthy humans, sleep deprivation disrupts the autonomic nervous system, such as by increasing sympathetic nervous system activity during sleep<sup>8)</sup>. In the present study, children with lower sympathetic nervous system activity in the morning had later bedtimes the previous day and excessive sympathetic activity in the early morning. Taking these findings into consideration, salivary amylase activity at 9:30 am was lower in the increased salivary amylase activity group than in the decreased salivary amylase activity group, and children's bedtime the previous day was earlier in the increased salivary amylase activity group than in the decreased salivary amylase activity group, suggesting that, in children with early bedtimes and proper sleep habits, autonomic nervous system activity is appropriate not only during sleep, but also after waking.

Children's lifestyle habits are modeled by their parents' lifestyle habits. It has been reported that improving parents' understanding of the sleep environment is critical to solving problems related to children's sleep habits. Therefore, parental review of sleep habits may be important for proper autonomic nervous system activity in children<sup>3)</sup>.

The present study has some limitations. First, children's bedtime and salivary amylase activity were measured on only one day. To generalize the present findings, future studies examining the long-term effects of children's bedtime on their autonomic nervous system activity are needed. Second, measurement of salivary amylase activity was performed only in the morning. Autonomic nervous system activity fluctuates throughout the day. To further understand the effects of children's sleep habits on their sympathetic nervous system activity, it is necessary to measure salivary amylase activity in the afternoon, as well as in the morning. Third, although salivary amylase activity was evaluated as an indicator of sympathetic activity in the present study, there are other indicators of sympathetic activity, such as cortisol. In addition, to further understand the effect of children's sleep habits on their autonomic nervous system activity, studies assessing parasympathetic nervous activity are also

needed.

In conclusion, the result of the present study showed that salivary amylase activity in the early morning was lower in the increased salivary amylase activity group than in the decreased salivary amylase activity group, and the children's bedtime the previous day was earlier in the increased salivary amylase activity group than in the decreased salivary amylase activity group, suggesting that children with early bedtimes and proper sleep habits have appropriate activation of the autonomic nervous system not only during sleep, but also after waking. These findings are expected to contribute to promoting appropriate autonomic nervous system activity in children.

## Acknowledgments

The authors would like to thank Forte Communications for editorial assistance with this manuscript. In addition, the authors would also like to thank the childcare workers for help in taking measurements in the study.

## References

- 1) Bjørnarå H. B., Vik, F. N., Brug, J., Manios, Y., De Bourdeaudhuij, I., Jan, N., Maes, L., Moreno, L. A., Dössegger, A. and Bere, E. (2014) The association of breakfast skipping and television viewing at breakfast with weight status among parents of 10-12-year-olds in eight European countries; the ENERGY (European Energy balance Research to prevent excessive weight Gain among Youth) cross-sectional study, *Public health nutrition*, 17, 906-914. doi:10.1017/s136898001300061x.
- 2) Chatterton, R. T., Jr., Vogelsong, K. M., Lu, Y. C., Ellum, A. B. and Hudgens, G. A. (1996) Salivary alpha-amylase as a measure of endogenous adrenergic activity, *Clinical physiology (Oxford, England)*, 16, 433-448. doi:10.1111/j.1475-097x.1996.tb00731.x.
- 3) Durduran, Y., Pekcan, S. and Olpan, B. (2019) Sleep habits and related factors in kindergarten children, *Nigerian journal of clinical practice*, 22, 1218-1223. doi:10.4103/njcp.njcp\_520\_18.
- 4) Faul, F., Erdfelder, E., Lang, A. G. and Buchner, A. (2007) G\*Power 3: a flexible statistical power analysis program for the social, behavioral, and biomedical sciences, *Behavior research methods*, 39, 175-191.
- 5) Furlan, Raffaello, Crivellaro, Wilma, Dell'Orto, Simonetta, Gentile, Elisa, Piazza, Simona, Pagani, Maria R., Tinelli, Mauro, Cerutti, Sergio, Lombardi, Federico, Pagani, Massimo and Malliani, Alberto. (1989) Circadian changes in vascular sympathetic activity in ambulant subjects, 7, S30-31.
- 6) Furlan, Raffaello, Guzzetti, Stefano, Crivellaro, Wilma, Dassi, Simonetta, Tinelli, Mauro, Baselli, Giuseppe, Cerutti, Sergio, Lombardi, Federico, Pagani, Massimo and Malliani, Alberto. (1990) Continuous 24-hour assessment of the neural regulation of systemic arterial pressure and RR

- variabilities in ambulant subjects, 81, 537-547.
- 7) Gibbons, C. H. (2019) Basics of autonomic nervous system function, *Handbook of clinical neurology*, 160, 407-418. doi:10.1016/b978-0-444-64032-1.00027-8.
  - 8) Huang, Y., Mai, W., Hu, Y., Wu, Y., Song, Y., Qiu, R., Dong, Y. and Kuang, J. (2011) Poor sleep quality, stress status, and sympathetic nervous system activation in nondipping hypertension, *Blood pressure monitoring*, 16, 117-123. doi:10.1097/MBP.0b013e328346a8b4.
  - 9) Koca, T., Akcam, M., Serdaroglu, F. and Dereci, S. (2017) Breakfast habits, dairy product consumption, physical activity, and their associations with body mass index in children aged 6-18, *European journal of pediatrics*, 176, 1251-1257. doi:10.1007/s00431-017-2976-y.
  - 10) Lanigan, J., Barber, S. and Singhal, A. (2010) Prevention of obesity in preschool children, *The Proceedings of the Nutrition Society*, 69, 204-210. doi:10.1017/s0029665110000029.
  - 11) McCorry, L. K. (2007) Physiology of the autonomic nervous system, *Am J Pharm Educ*, 71, 78. doi:10.5688/aj710478.
  - 12) McEwen, B. S. (2006) Sleep deprivation as a neurobiologic and physiologic stressor: Allostasis and allostatic load, *Metabolism*, 55, S20-23. doi:10.1016/j.metabol.2006.07.008.
  - 13) McEwen, B. S. and Karatsoreos, I. N. (2015) Sleep Deprivation and Circadian Disruption: Stress, Allostasis, and Allostatic Load, *Sleep Med Clin*, 10, 1-10. doi:10.1016/j.jsmc.2014.11.007.
  - 14) Middlekauff, Holly R and Sontz, Eric M %J *Circulation*. (1995) Morning sympathetic nerve activity is not increased in humans: implications for mechanisms underlying the circadian pattern of cardiac risk, 91, 2549-2555.
  - 15) Mineshita, Y., Kim, H. K., Chijiki, H., Nanba, T., Shinto, T., Furuhashi, S., Oneda, S., Kuwahara, M., Suwama, A. and Shibata, S. (2021) Screen time duration and timing: effects on obesity, physical activity, dry eyes, and learning ability in elementary school children, *BMC public health*, 21, 422. doi:10.1186/s12889-021-10484-7.
  - 16) Nagai, Narumi, Matsumoto, Tamaki, Kita, Hiroko and Moritani, Toshio. (2003) Autonomic Nervous System Activity and the State and Development of Obesity in Japanese School Children, *Obesity Research*, 11, 25-32. doi:<https://doi.org/10.1038/oby.2003.6>
  - 17) Oliver, M. D., Baldwin, D. R. and Datta, S. (2020) The relationship between sleep and autonomic health, *J Am Coll Health*, 68, 550-556. doi:10.1080/07448481.2019.1583652.
  - 18) Panza, Julio A, Epstein, Stephen E and Quyyumi, Arshed A %J *New England Journal of Medicine*. (1991) Circadian variation in vascular tone and its relation to  $\alpha$ -sympathetic vasoconstrictor activity, 325, 986-990.
  - 19) Quyyumi, Arshed A, Panza, Julio A, Diodati, Jean G, Lakatos, Edward and Epstein, Stephen E %J *Circulation*. (1992) Circadian variation in ischemic threshold. A mechanism underlying the circadian variation in ischemic events, 86, 22-28.
  - 20) Sabbagh, A., Nakata, H., Abdou, A., Kasugai, S. and Kuroda, S. (2021) Fluctuation of salivary alpha-amylase activity levels and vital signs during dental implant surgery, *International journal of implant dentistry*, 7, 58. doi:10.1186/s40729-021-00339-6.
  - 21) Somers, Virend K., Dyken, Mark E., Mark, Allyn L. and Abboud, Francois M. (1993) Sympathetic-Nerve Activity during Sleep in Normal Subjects, 328, 303-307. doi:10.1056/nejm199302043280502.
  - 22) Speer, K. E., Semple, S., Naumovski, N. and McKune, A. J. (2020) Heart rate variability for determining autonomic nervous system effects of lifestyle behaviors in early life: A systematic review, *Physiology & behavior*, 217, 112806. doi:10.1016/j.physbeh.2020.112806.
  - 23) Sun, Y., Sekine, M. and Kagamimori, S. (2009) Lifestyle and overweight among Japanese adolescents: the Toyama Birth Cohort Study, *Journal of epidemiology*, 19, 303-310. doi:10.2188/jea.je20080095.
  - 24) Yaguchi-Tanaka, Y. and Tabuchi, T. (2021) Skipping Breakfast and Subsequent Overweight/Obesity in Children: A Nationwide Prospective Study of 2.5- to 13-year-old Children in Japan, *Journal of epidemiology*, 31, 417-425. doi:10.2188/jea.JE20200266.
  - 25) Yamaguchi, M., Deguchi, M., Wakasugi, J., Ono, S., Takai, N., Higashi, T. and Mizuno, Y. (2006) Hand-held monitor of sympathetic nervous system using salivary amylase activity and its validation by driver fatigue assessment, *Biosensors & bioelectronics*, 21, 1007-1014. doi:10.1016/j.bios.2005.03.014.

# 大学図書館企画展示と連動した e-Learning の教育効果に関する研究

## Educational Effects of e-Learning Linked to the Planned Exhibition in College Libraries

山田 哲也 ・ 安井 良尚 ・ 静 和美

Tetsuya YAMADA  
元湊川短期大学図書館

Yoshihisa YASUI  
湊川短期大学 幼児教育保育学科

Kazumi SHIZUKA  
湊川短期大学図書館

### Abstract

In order to link special planned exhibitions in college libraries more effectively to the learning of students and local residents, we focused on the learning activities of visitors that e-Learning using the web-based learning contents of special planned exhibitions in college libraries can have, and examined new types of learning and services that college libraries can provide both inside and outside the college. The effectiveness of e-Learning, such as the deepening of understanding of artworks, was found through the use of web-based learning contents.

**key words** : College Library, Planned Exhibition, e-Learning, Library Service

### 1. はじめに

今日、大学図書館の機能は、書籍等の教育・研究情報の提供や保存を中核にレファレンスやコロナ禍での郵送サービス等、利用サービスの充実が進んできた。さらに、新たな学びの場を造り出す役割を求められている。そこに電子化・情報化など、新しい図書館のニーズが加わり、メディア・センター・情報センターやミュージアム等のような役割までも果たす存在へと進化してきていると言える。一方で、教育の支援学習環境の提供、地域社会への貢献など、様々な学術情報の提供やそれに伴うサービスは継続しさらに高める必要もある。このように大学図書館は、書籍・文献等の集積に加え、新たな学びを創造する拠点として、学習者が能動的に学べる場所を提供する役割が必要となっている。著者らは「大学図書館を基盤とした学びの地域拠点形成のための基礎的調査研究」<sup>1)</sup>の中で、地域などの利用者から、その地域性等から、交流や活動の場としても期待されていることを示し、2021年度には、湊川短期大学図書館の企画展示として、「いきものづくし」、「印刷のできるまで」等を開催し、大学図書館に美術教育やミュージアムの観点をもち込んだ。大学図書館を能動的学びの場とすることで、地域と学生さらには幼児に対して新たな学びの場を提供した。今回、「Stone Lithography—石で刷る版画 リトグラフの世界—」の企画展を開催するにあたり、webサイトにweb学習コンテンツを掲載し、リトグラフに関するe-Learningを行えるように計画した。

### 2. 目的

本研究は、大学図書館における、企画展示をより効果的に学生や地域住民の学びに繋げるために、大学図書館企画展示のweb学習コンテンツを用いたe-Learningが及ぼす来訪者の学習活動を明らかにし、大学図書館が提供できる学内外の新たな学びやサービスの在り方を検討することを目的とする。

### 3. 企画展示とICT化

地域との連携活動や生涯学習に関わっては、以前から様々な提言が行われてきた。著者らの「大学図書館を基盤とした学びの地域拠点形成のための基礎的調査研究」<sup>1)</sup>も次のような流れから検討されてきた背景がある。学術審議会学術情報資料分科会学術情報部会の「大学図書館機能の強化・高度化の推進について(報告)」(1993)では、大学の地域社会への協力、生涯学習における大学の教育研究機能の活用として公共図書館では提供できない情報提供の他、学習活動の場としての図書館機能の強化などが求められることになった<sup>2)</sup>。文部科学省(2010)は、大学図書館の今後の運営の在り方として、「大学図書館の整備について(審議のまとめ)ー変革する大学にあって求められる大学図書館像ー」を示し、大学を巡る環境変化から、教育活動への直接の関与、地域連携の重要性等を挙げている<sup>3)</sup>。また近年、大学では開放講座等を進めてきたことなどから、社会人に対する図書館サービスの必要性が高まった。さらに図書館情報に関するサービスに不可欠になった図書館の電子化や居心地が良く、能動的に学習できるラーニングコモンズ環境整備が進む中、その環境を持つ大学図書館は地域にとっても知識等の集積や発信の場としての地域拠点形成としての役割が求められていると言える。そのような動向のもと、湊川短期大学図書館(2021)は、「大学図書館の地域連携の基礎研究」<sup>1)</sup>を行う中で、美術作品を通した大学図書館の企画展示を学内外に公開し、湊川短期大学図書館の新たな方向性を示すことになった。

インターネットに企画展示に関する学習情報を示すミュージアムwebコンテンツは来訪者の閲覧行動に影響を与え展示の価値を理解することでより積極的な閲覧行動を促す補助的役割があるとされている<sup>4)</sup>。植村(2005)は、e-Learningが普及することは図書館の利用環境が変化することであり、バーチャル大学ではデジタル化されたコンテンツが教材として主に使われ、このことが図書館の本質的な変化を強く促すと指摘<sup>5)</sup>し、新しい大学図書館の在り方を示している。

本研究では、湊川短期大学教員である安井良尚のリトグラフ（平たく研磨された石灰石の表面に油脂部分のある描画材料で絵を描いた後に酸性の溶液で処理をすることなどの化学反応を利用した作品制作法）の企画展示を行うとともに学習情報をweb上に載せる、web上のページを展示情報や広告媒体としてのみとして捉えるのではなく、来館者とweb上の学習情報を教育コンテンツとして捉えることで、来館者の意識の評価や行動分析を通して、企画展示とe-Learningの教育効果をe-Learning情報の有無による統制などにより、その効果を検討するものである。

#### 4. web 学習コンテンツ（作者の版画技法）

web 学習コンテンツには、リトグラフの解説に加えて、次に示す作家についての内容を写真とともに構築した（図1）。

作家の略歴、『1990年大学院2年在学中の秋、アメリカ政府の招待でクーパーユニオン大学のスクール・オブ・アートに8週間在籍し、版画の授業を特別聴講生として受講したことをきっかけに、その当時京都市立芸術大学では誰も使っていなかった石版石を使ったリトグラフ制作をはじめた。』

制作情報、『版画は、基本的に1枚の版で1色を刷るため、多色刷りになると多くの版が必要となってくる。石版画の場合でも1点仕上げるために大量の大きな石版石を使用することは困難である。そこで、石版石を1枚だけ使用して多色刷りをする技法を、木版画で使われている「1版彫り進み」の技法から応用して発展させた。石版石を製版してインクをのせると描画部分にしか付かず、描画部分以外の箇所は刷りとり紙の地が残る。描画した以外の石の版面にもインクをのせて石の形全体をイメージの部分と交互に刷り重ねて行く技法は安井オリジナルのものである。また、版にイメージを描くのは一度だけで、あとはそのイメージを部分的に消しながら刷って行くために版自体は残らず、失敗しても刷り直しができない。』

作家の解説、『安井は普段からメガネを使用しているし、最近では手元も全くピントが合わなくなった。結局のところ、ぼやけて見えるのが自分にとってのリアルな世界なのである。そこから、フラッシュライトなどの強い光のもので見る景色や、暗闇の中にぼんやり見える物など、正常に見えなかったり見にくかったりする風景や物をモチーフとして作品を制作している。』

作品のタイトルの「Retrace」には「さかのぼる」「回顧する」「追想する」などの意味がある。風景や物全体の形を少しずつ消していきながら、例えば、何気なく見

る風景や物が、一瞬光の強さで形が繋がって平面的に見えるなど、自分の感覚が揺れ動いた瞬間を、時間をさかのぼって掘り起こして留めておきたいと考えて制作したシリーズになる。』

#### 5. 方法

企画展示は、2022年10月17日から10月28日の会期で開催した。企画展の開始時に、地方新聞に掲載されるとともに、近隣の学校園等にチラシ配布を行った。図2に展示の様子を示す。リトグラフに関する認知度は、低いと思われたため、web 学習コンテンツに加え、図3に示すように関連図書の展示と貸し出しを行った。



図2 大学図書館での企画展示の一角



図3 関連図書の展示と貸し出し

調査は、湊川短期大学図書館企画展「Stone Lithography 一石で刷る版画 リトグラフの世界ーアンケート」として、web 上での質問紙調査を行った。調査は企画展の鑑賞前の群と鑑賞後の群に分けて行い、会期を含む2022年10月15日～10月31日の期間で大学生・教職員及び一般来訪者34名（鑑賞前の群14名、鑑賞後の群20名）から回答を得た。

調査項目として、リトグラフの認知度、web 学習コンテンツの肯定度、web 学習コンテンツによる理解の深まり、企画展による図書館の活性化をリッカート尺度による5件法で問い、安井良尚のモチーフに関する選択肢を設けた。

単純集計の他、web 学習コンテンツの貢献度や理解の深まり等を統計的に分析した。さらに、「美術展などの展示でスマホ・タブレットやコンピュータの活用の可能性のアイデア」、「作品のどのような部分を観賞したか、または鑑賞しようと思ったか」を自由記述で記すようにした。自由記述については、社会情報サービス社のテキストマイニングソフト、トレンドサーチ2015を用い分析した。出現頻度の高い語句を中心にして、それら語句の間の関係をマッピングしネットワーク図を作成した。

#### 6. 結果と考察

リトグラフの認知度（5:よく知っていた、4:少し知っ



図1 web 学習コンテンツトップページ

表1 web 学習コンテンツ肯定度と理解深まり

	鑑賞前群		鑑賞後群		t値
	平均	SD	平均	SD	
web上肯定度	4.57	0.62	4.80	0.40	-0.79
理解深まり	3.57	0.73	4.50	0.50	-4.03 **

\*p>.01 \*\*p>.01

ていた, 3: 聞いたことがあった, 2: あまり知らなかった, 1: 全然知らなかった) は, 平均値が 1.94 (S.D.: 1.28) であり, 認知度は, 低いことが分かった。鑑賞前の群の web 上肯定度は 4.45, 鑑賞後の群の肯定度は 4.8 であり, 鑑賞により肯定度が増していることが分かる。

安井良尚のモチーフに関する選択肢は, 『フラッシュライトなどの強い光のもとで見る景色』, 『暗闇の中には

んやり見える物』, 『正常に見えなかつたり見にくかつたりする風景や物抽象的に表現した形状』, 『「さかのぼる」 「回顧する」 「追想する」 のイメージ』 から選択するものであったが, 正答は 2 名であり, 個人の印象が大きく, web 学習コンテンツに影響されていない様子であった。

質問紙では, 鑑賞前での学習者も回答できるようにしたため, 鑑賞前の群と鑑賞後の群に分けることでその差を調査することにした。web 学習コンテンツの肯定度及び web 学習コンテンツによる理解の深まりについて, 対応のない t 検定を行った。その結果を表 1 に示す。web 学習コンテンツの肯定度には, 差が見られなかったが, 理解の深まりに関しては, 有意な差が見られた。このことから, web 学習コンテンツは, 実際の展示鑑賞によって, 理解が深まるということが分かる。

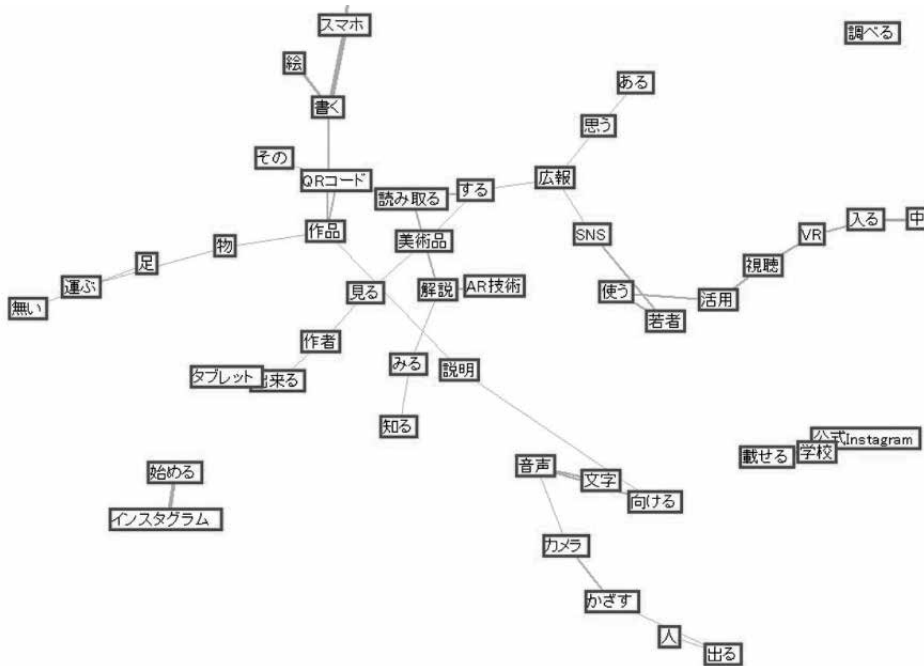


図4 スマホ・タブレットやコンピュータの活用の可能性のアイデアに関するネットワーク図

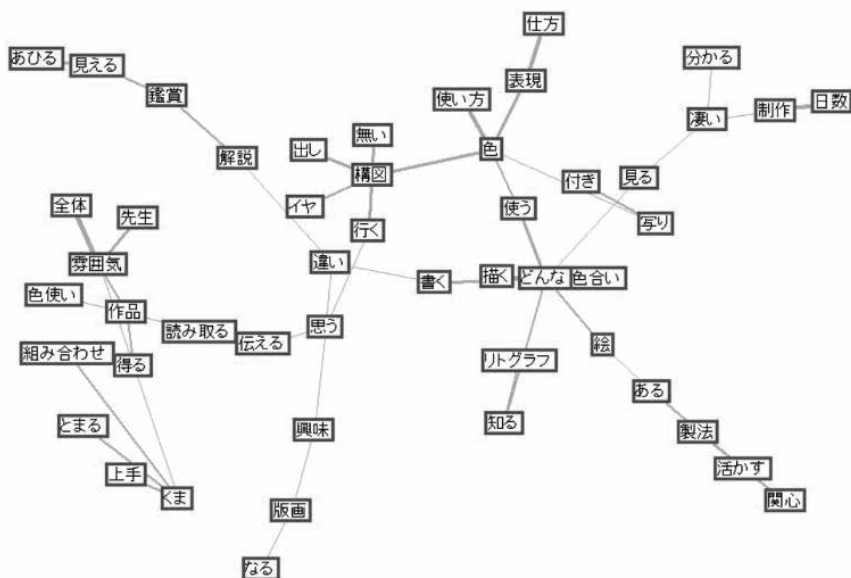


図5 作品のどのような部分を観賞したか鑑賞しようと思ったかに関するネットワーク図

「美術展などの展示でスマホ・タブレットやコンピュータの活用の可能性のアイデア」の自由記述のネットワークを図4に示す。

「Instagram」, 「SNS」の活用は, 他の図書館でも実際に進められていることではあるが, さらに特徴的なまとまりとして, 「美術品」, 「解説」の周辺に「QRコード」や「VR」といった具体的で技術的な語句が見て取れる。「作品のどのような部分を観賞したか, または鑑賞しようと思ったか」の自由記述のネットワークを図5に示す。語句のまとまりとして, 「構図」, 「色合い」, 「雰囲気」のような作風に関するまとまりが見られる。これに関しては, web学習コンテンツでも解説をしていることに関わるものであり, web学習コンテンツの効果が表れているものと考えられる。

## 7. まとめ

大学図書館, 特に地域に密着する大学図書館は, 学修のための情報, 研究のための情報, 快適な読書環境を提供するだけでなく, 大学の教育課程に伴う学習, 生涯学習・リカレント教育や地域の文化活動の拠点としての役割が, 重要な構成要素となってきた。

大学図書館における, 企画展示をより効果的に学生や地域住民の学びに繋げるために, 大学図書館企画展示のweb学習コンテンツを用いたe-Learningが及ぼす来訪者の学習活動を調査した。e-Learningとして学習コンテンツを提供し実際の鑑賞と組み合わせることにより, 企画展示の理解が深まるなど, e-Learningの有効性が示唆された。e-Learningのシステムは, 知識教授的な要素が強いCAI (computer-assisted instruction/ computer-aided instruction) のかたちのものであったが, 今後, e-Learningのシステム上に書き込んだり, 意見等の交流ができるフォーラムを設けるなどインタラクティブなシステムとして構築することが必要であろう。大学図書館における新たな学びやサービスは, ICT化や新たな図書館環境の概念の変化に伴って新たなフェーズに入っており, 今後も様々な学びのあり方を模索していく必要がある。

## 謝辞

本企画展示及び研究は, 2022年度湊川短期大学学内科学研究補助金研究の一環として実施された。

## 参考文献

- 1) 山田哲也, 大西隆弘, 大学図書館を基盤とした学びの地域拠点形成のための基礎的調査研究, 湊川短期大学紀要, 57, 27-30 (2021)
- 2) 学術審議会学術情報資料分科学術情報部会, 「大学図書館機能の強化・高度化の推進について (報告)」 (1993)
- 3) 文部科学省, 科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部 大学図書館の整備について (審議のまとめ) - 変革する大学にあって求められる大学図書館像 - (2010)
- 4) 星野浩司, 金大雄, 富松潔, 施設ミュージアム来訪者におけるWEBコンテンツの影響とその評価, 情報処理学会論文誌, 50(6) pp.1690-1691 (2009)
- 5) 植村八潮 (2005) 「eラーニングとデジタル化教材」, 逸村裕・竹内比呂也編, 変わりゆく大学図書館, 勁草書房, p.144-145

# 保育者養成校における音楽教育について

—とくに幼児教育の「3文書」と西洋近代の教育思想を中心に—

About Music Education at a School for Training of Nursery Teachers:  
A Focus on 'The Three Documents' of Early Childhood Education in Japan and Modern Western  
Educational Thoughts

吉 田 雅 代

Masayo YOSHIDA

湊川短期大学 幼児教育保育学科 非常勤講師

## Abstract

In recent years, the mistreatment of young children by kindergarten teachers and nursery school staff has become a significant social issue. According to news reports, the abuse primarily involves verbal abuse, such as calling children 'trash,' 'idiots,' or telling them to 'die.' Physical abuse, such as hitting them on the head, restraining them, or even strangling them, has also been reported.

The author, who has been teaching at a nursery school, was greatly shocked by these incidents. Training schools for childcare professionals base their education on the principles outlined in 'The Three Documents of Early Childhood Education in Japan,' which are considered the foundation of early childhood education in Japan. The Three Documents vary in the ministries that have jurisdiction over the three institutions and in their legal systems. However, all of them aim to enhance the qualifications of kindergarten teachers and childcare workers. The current version, revised in 2017, is a milestone in clarifying that the three types of early childhood education facilities will be treated as equal and equivalent in the future. Similar educational outcomes are expected from all three types of facilities. Thus, there is no hierarchy in early childhood education between kindergarten and preschool.

The philosophy of 'Three Documents' in early childhood education should be implemented in all childcare training schools in Japan. Despite this, tragic incidents continue to occur.

The title of this paper was chosen due to these unfortunate events. However, I was aware of the challenges from the outset when selecting this topic for my research. Upon careful examination of newspaper and journalistic reports, it becomes evident that there are two perspectives to consider in this subject of research.

One reason is that in some cases, the kindergarten teachers and daycare workers who were arrested as perpetrators may not be solely at fault. Rather, there may be room for sympathy or explanation. This is often due to poor working conditions created by the management of the kindergartens and day-care centers. The labor-management relations and working conditions discussed in this text are a significant social issue, not limited to the education industry. The author will not be discussing the issue from the perspective of 'sweatshop' companies, despite the great interest in this topic.

The author of this study has chosen another perspective, that of the educational approach of HONRAI. The author believes that it is important to promote the healthy development of young children's minds and bodies, as well as nurture their rich sentiments. As such, the author seeks to use the 'Three Documents' of early childhood education as the norm. Adhering to the principles of The Three Documents could have prevented many of the tragic incidents. The writer is a believer in The Three Documents.

The author studied in Germany during her youth and had the experience of being a parent who sent her child to a kindergarten there. As a member of the PTA, I visited the kindergarten twice a day and sometimes stayed there for extended periods to observe how the kindergarten teacher treated the children warmly and enthusiastically. My experiences have led me to develop a keen interest in the educational philosophy of German educational thinkers, particularly Fröbel. Upon revisiting the 'Three Documents' philosophy of early childhood education in Japan, I believe it reflects the educational philosophy of Fröbel, the founder of the world's first kindergarten, as well as the modern Western educational ideas of Rousseau, Pestalozzi, and others who greatly influenced Fröbel.

The author's paper aims to revisit the foundation of education in light of the tragic incidents of abuse of young children by kindergarten teachers and childcare workers. The paper first examines 'The Three Documents' of early childhood education and the modern Western educational ideas that underlie them. Then, the author describes the music education taught at the University.

**Key word:** Early Childhood Education, Kindergarten Curriculum Guidelines, Educational Thought, Musical Expressions



## 1. はじめに

ここ数年、幼稚園や保育園で幼稚園教諭や保育士の幼児に対する虐待が大きな社会問題となった。新聞の報道によると、その虐待の内容の主なものは、幼稚園教諭や保育士が幼児に「お前はゴミ」・「死ね」・「バカ」などと暴言を吐いたり、あるいは幼児の頭を殴ったり、押さえつけたり、さらには首を絞めるなどの暴行を加えたりするものであった<sup>1)</sup>。

保育者養成校である本学でピアノ指導をしている筆者にとって、これらの事件は大きなショックであった。いずれの保育者養成校の教員は、いわば幼児教育のバイブルともいべき「3文書」(The Three Documents)<sup>2)</sup>の理念に基づいて教育をおこなっていることだろう。これら「3文書」は、3つの施設の管轄省庁が異なり、法体系も異なっている。しかし、いずれも幼稚園教諭と保育士の資質向上の目的が図られている。現在施行されているものは平成29(2017)年に改訂されたものである。この改訂は3つのタイプの幼児教育施設を、今後は基本的に対等・同等に扱う、あるいは3つの施設に同じような教育成果を期待するという立場を明らかにする画期的なことだったといえよう。したがって、幼児教育において幼稚園と保育園とでは、どちらが上位にあるかなどという考えはナンセンスなことだといえよう。幼児教育の「3文書」の理念による教育は、日本全国のすべての保育者養成校においておこなわれていることだろう。それにもかかわらず、あのような痛ましい事件が後を絶たない。これは一体どうしたことなのだろうか。

筆者が小論の標題を冒頭のようにした理由が、実はここにある。すなわち、これらの痛ましい事件がきっかけとなっている<sup>3)</sup>。しかしながら、このテーマを研究の対象にしたとき、その最初の段階からその困難さを痛感している。なぜなら、それは新聞やジャーナリズムの報道を丁寧に考察するうちに、自ずと分かってきたことがある。すなわちそれは、研究の対象として2つの視点があるからである。

その1つは、加害者として逮捕された幼稚園教諭と保育士の側にも、彼女たち(あるいは彼ら)が一方向的に悪いのではなく、同情の余地、あるいは弁明の余地があると思われるケースがあるからである。その弁明の余地の多くは、劣悪な労働環境を生み出している幼稚園や保育園の経営者の側に起因していることが大きい。これらの幼稚園や保育園の劣悪な労働条件、労使関係は大きな社会問題で、この種の問題は何も教育界に限ったことではない。世間のブラック企業と呼ばれている会社での労使関係には、それはひどいものがある。この問題に大きな関心があるにはあるが、今回、筆者はこの視点からの考察はこれ以上おこなわない。

今回、筆者が指摘するもう1つの視点は、ほんらいの教育的視点からの考察である。すなわち筆者は、西洋近代教育思想の影響を受け、幼児の心身の健全な発達には豊かな情操を育むことが重要だと考えているおり、その具体的な規範を幼児教育の「3文書」に求めている。だからこそ幼児教育の「3文書」の理念を守っていれば、このような痛ましい事件の多くは回避できたことであろう、と考えている。筆者はそれほどに、この幼児教育の「3文書」を信奉している。その理由を以下の小論において述べてみたいと思う。

筆者は、若い時にオーストリア・ウィーンに滞在<sup>4)</sup>し、そこで彼の地の幼稚園に子どもを通わせた経験もしてきた。幼稚園の保護者いわゆるPTAの一員として、一日に2回、幼稚園の送り迎えに通い、ときにはほぼ一日中幼稚園にとどまり、幼稚園のTante(ウィーンではこう呼ばれていた)<sup>5)</sup>が子どもたちに温かく接する様子を熱心に参観してきた。そのような経験が機縁となって、これまでにフレーベルを中心としたドイツの教育思想家の教育理念に大きな関心を抱くようになった。そんな筆者が、今あらためて日本の幼児教育の「3文書」の理念を考察すると、これには世界初の幼稚園創立者フレーベルの、さらにはこのフレーベルに多大の影響を与えたルソー、ペスタロッチなどの西洋近代の教育思想家の系譜が辿れるのではないかと考えている。

筆者のこの小論での考察は、幼稚園教諭や保育士の幼児に対する虐待という痛ましい事件をきっかけとして、もう一度、教育の原点に立ち戻るために、まず初めに幼児教育の「3文書」をとりあげ、これに通底している西洋近代の教育思想を考察し、続けて筆者が本学で担当するピアノ指導について述べることを目的としている。

## 2. 幼児教育の「3文書」

日本の幼稚園教諭と保育士養成課程における幼児教育の「3文書」とは、次の3つの文書をいう。すなわち「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」のことである。これら3つの法令は、保育者養成校において欠かすことができない重要なものとなっている。これら法令を複雑にしているのが、それぞれ異なる省庁がこれらの施設と法令を管轄しているためであろう。文部科学省が管轄しているのは「幼稚園教育要領」だけであり、「保育所保育指針」は厚生労働省の管轄である。「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」は、内閣府と文部科学省が共同で管轄している。したがって、幼稚園は文部科学省の管轄下にあり、保育園(保育所)は厚生労働省の管轄下であり、認定こども園は、内閣府と文部科学省が共同で管轄している。このように幼児教育のすべての施設を文部科学省が管轄しているわけではない。

これらの「3文書」は、幼稚園教育と保育の共通の目標、課程、評価を定めたもので、幼児教育の質の向上を図ると同時に幼稚園教諭と保育士の資質向上のために制定されたものである。そしてこの法令によって、幼児教育の目標とするところが、幼児の心身の発達を保障し、豊かな情操、確かな知識・技能、健やかな体力・健康を育むこと、さらには子どもたちが社会の変化に適応し、主体的に生きる力をみずから育むことができるように準備することである、と明確に示されている。

次いでこの法令には、幼児教育の課程が具体的に定められている。すなわち、幼児の興味や関心を大切に、幼児の発達の段階に応じて、遊びや生活を通して、心身の発達を促す内容と方法を定めている。この遊びや生活を通して心身の発達を促すという方法は、後述するフレーベルの教育思想とも一致するところである。

これらの法令の重要なところは、「3文書」とも幼児教育において、共通した評価の項目があることであろう。すなわち、幼児教育においては、幼児の成長や発達を、まず把握することが重要で、その成長や発達の成果を適切に評価することによって、さらなる幼児の成長や発達につなげてゆくことを目的としている。

これらの「3文書」の理念は、幼稚園教諭あるいは保育士にとって、それが幼稚園教育であれ保育園教育であれ、共通の最も重要な基礎ともなるものである。これらの「3文書」の理念をよく理解し、実践さえしていればあのような痛ましい事件は起こらなかつたであろう。ところが残念なことに、事件は往々にして起こっている。静岡県の私立の保育園でおこった事件<sup>6)</sup>では、3人の30代の女性保育士が暴行容疑で逮捕された。その事件の内容をあらためて新聞報道で考察したい。

「静岡県裾野市の私立認可保育園『さくら保育園』で、園児の足をつかんで宙づりにするなどしたとして、県警は4日、園で働いていた保育士の女3人を暴行容疑で逮捕し、園などを捜索した。園児への虐待を繰り返していた疑いが強いとみて調べを進める。園を巡っては、市が11月30日、この3人による計15の不適切行為があったと公表。県警は、保護者らが不安を募らせるなど社会的影響の大きさを踏まえ、市の公表からわずか4日でのスピード逮捕に踏み切った。」<sup>7)</sup>

逮捕された保育士は、いずれも1歳児クラスを担当していた30代の女性3人であった。市の公表では15の不適切行為ということであったが、その後の調査では、3人の虐待の内容はカッターナイフを見せて脅す、あるいは男児を逆さづりにしたこともあれば、倉庫に閉じ込めたりしたこともあった。静岡県警は、3人の行為の悪質性に加え、証拠隠滅の恐れもあるとして、迅速な強制捜査が必要だと判断して3人の逮捕に踏み切った。

このような報道に接すると、保育者養成校にかかわる者として、いたたまれない気持ちにならざるを得なくなる。なぜなら、全国の保育者養成校の幼稚園教諭と保育士養成課程では、若い学生に「3文書」の理念を教え、実践することを強く求めていたはずだ。しかし資格を取得して保育者養成校を卒業して何十年も経つと、状況は変わってくるようだ。

逮捕された3人の保育士たちは、残念ながら幼児教育の理念を守っていないことになったことになる。彼女たちが筆者の教え子ではないにしても、本当に悲しいことだ。あらためて幼児教育の「3文書」の重要性を痛感している。筆者は保育者養成校である本学で、未来の幼稚園教諭あるいは保育士になる予定の若い学生に、器楽教育のピアノの指導をしている。今、未来と使ったが、ここで言う未来は、本当に近い。何しろ1年ないし2年後のことなのだから。

今、教室にいる若い学生が、1年～2年後には幼稚園や保育園で幼い子どもたちの指導者となっているのだ。それを思うと筆者は、自ずと心構えが定まってくる。それこそ、明日にでも指導者になる若い学生を目の前にすると、もちろん筆者には指導すべきピアノの技術的な教育がたくさんある。しかし、その前に若い学生たちには「人間の教育」<sup>8)</sup> というものが必要だと思う。この「人間の教育」は、すでにフレーベルによって提唱されたものである。

フレーベルの教えが重要なのは、彼が世界で初めての幼稚園を創立したからというだけではない。彼の教育思想が西洋近代の思想家ルソー、ペスタロッチ、ゲーテなどから多大の教育的影響を受けていることからほかならない。それゆえに日本の幼児教育の「3文書」も、これらルソーから始まる西洋近代の教育思想家の系譜につ

ながっているといえるだろう。すなわち、西洋近代の教育思想は、日本の幼児教育の「3文書」の源ともいえるべきものである。このようなことから明らかなように、筆者がここでいう「人間の教育」とは、具体的に言うと、日本の幼児教育の「3文書」のことである。

また同じように日本の音楽教育も、この「人間の教育」の系譜をたどる「3文書」の理念、すなわち、「幼児の心身の発達を保障し、豊かな情操、確かな知識・技能、健やかな体力・健康を育む」という幼児教育とも大いに関わっている。これについては後述したいと思う。

### 3. 「3文書」の改訂と目標、課程、評価

幼児教育の「3文書」は、平成29(2017)年に改訂され、幼児教育の質の向上と同時に、幼稚園教諭と保育士の資質向上も図られている。今回の「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」という「3文書」の改訂が、同時におこなわれたことに大きな意義がある。すなわち、それは基本的な内容をできるだけ同一にして、その整合性をはかるという目的で改訂がなされたからであった。これについては、すではじめにの項で述べたとおり、「この改訂は3つのタイプの幼児教育施設を、今後は基本的に対等・同等に扱う、あるいは3つの施設に同じような教育成果を期待するという立場を明らかにする画期的なことだった」からといえるだろう。この改訂の意義については、文献として汐見稔幸の著書<sup>9)</sup>にきわめて明確に指摘されている。少し長くなるが明快な指摘なので以下に引用する。

「3文書の基本的な内容、特に保育・教育のねらいや内容にあたる部分をできるだけ同一にする（整合性をはかる）というのは、国として、3つのタイプの幼児教育施設を、今後は基本的に対等・同等に扱う、あるいは3つの施設に同じような教育成果を期待する、という立場を表明したということです。3つの施設の管轄省庁は異なりますし、法体系も違っています。幼稚園が幼児教育施設（学校）であるのに対して認定こども園と保育所は児童福祉施設であり同時に幼児教育施設であるという違いもあります。しかし、その幼児教育施設の部分については、認定こども園も保育所も幼稚園と同等の機能を果たすべきである、果たしてほしいという立場が鮮明にされた、というのが今回の改訂・改定の大切な主旨なのです。これは歴史的に大きな意味をもつ施策展開といえるでしょう。」(傍点、引用者)<sup>10)</sup>

上の引用にあるように汐見によれば、今回の改訂は、歴史的に大きな意味をもつという。それほどに汐見は今回の改訂を高く評価している。その理由は、幼稚園が当初から学校であるのに対して、認定こども園や保育所は児童福祉施設、あるいは幼児教育施設だということに存立の違いがあった。その存立のレベルの違いからこれまででは、認定こども園や保育所はどうしても幼稚園よりも低く見られてきた。しかし今回の改訂により、認定こども園や保育所は幼児教育をおこなう場という点で、幼稚園と同等の機能を果たすべきもので、基本的には対等である。したがって、幼児教育という観点からみて、幼稚園が認定こども園や保育所よりも上位にあるということにはならない、としている。この点が今回の改訂によって明確に定められたのだ。これが画期的だと言われる所以である。

今回の「3文書」の改訂によって、幼稚園・保育園・認定こども園の目指すところがほぼ同じになった。これまで微妙に異なっていた要領、指針、保育要領のねらいや内容の言葉が一緒になったのである。改訂された「3文書」から、そのエッセンスともいべき目標・課程・評価が以下のようにまとめられるだろう。

#### 幼児教育の目標

幼児の目標は、幼児の心身の発達を保障し、豊かな情操、確かな知識・技能・健やかな体力・健康を育むこと、そして社会の変化に適応し、主体的に生きる力を育むことである。

#### 幼児教育の課程

幼児教育の課程は、幼児の興味や関心を大切にし、幼児の発達の段階に応じて、遊びや生活を通して、心身の発達を促す内容と方法を定めたものである。

#### 幼児教育の評価

幼児教育の評価は、幼児の成長や発達を把握し、その成果を適切に評価することにより、幼児のさらなる成長や発達を促すことを目的としている。

上記3つの項目は、幼稚園教育と保育の共通のエッセンシャルとなるもので、幼稚園教諭あるいは保育士を目指す者にとっては、これらの文書をよく理解し、実践することが強く求められている。具体的には幼児教育の目標を踏まえ、幼児の興味や関心を大切にし、幼児の発達の段階に応じた遊びや生活を通して、心身の発達を促す教育課程を構成し、その成果を適切に評価する能力を養成することが重要だとされている。

幼児教育にあって、上記の傍点を付した箇所、すなわち、「幼児の発達の段階に応じた」遊びや生活を通して、幼児の心身の発達を促すという指導法は、ルソーやフレーベルの教育思想に通じるものである。

このように日本の幼児教育の「3文書」は、西洋近代の教育思想と深いかかわりがある。次の項では、それを考察したいと思う。

### 4. 「3文書」と西洋近代の教育思想

筆者はこれまでにフレーベルの教育思想について何度か考察してきた<sup>11)</sup>。今回は「3文書」との関連であらためて論及したいと思う。世界初の幼稚園創設者フレーベルの教育思想を「3文書」との関係で要約すると、次の3つの教育にまとめられるだろう。

#### (1) 人間教育

フレーベルは、人間は自然と社会の調和の中で成長していく存在であると主張した。そのため、幼児教育は、子どもが自然と社会の調和を体験し、人間として豊かに成長していくことを目的としている。

#### (2) 全人教育

フレーベルは、子どもは身体、心、精神の調和の中で成長していく存在であると主張した。そのため、幼児教育は、子どもの身体、心、精神の調和を促進することを目的としている。

#### (3) 自発教育

フレーベルは、子どもは主体的に学び、成長する存在

であると主張した。そのため、幼児教育は、子どもの自発性を引き出し、伸ばすことを目的としている。

これらのフレーベルの教育思想は、改訂された「3文書」の理念に継承され、さらに発展している。具体的にそれをいくつか挙げることにする。

- ①「幼児は、自ら考え、行動する中で、自らの力で学び、成長していく」という理念。これは、フレーベルの「自発教育」の思想を反映している。子どもは、自ら考え、行動することで、自らの力で学び、成長していくことができると考えられている。
- ②「幼児は、一人ひとりがかけがえのない存在として、その個性や能力を伸ばしていく」という理念。これは、フレーベルの「全人教育」の思想を反映している。子どもは、一人ひとり異なる個性や能力を持っていることを尊重し、その個性や能力を伸ばすことが重要と考えられている。
- ③「幼児は、世界とつながり、多様な文化や価値観を理解し、尊重する」という理念。これは、フレーベルの「人間教育」の思想を反映している。子どもは、自然と社会の調和を体験し、グローバルな視野を身につけることが重要と考えられている。

前号で筆者はルソーを考察した<sup>12)</sup>。それは近代の教育思想を語るうえで、ルソー、ペスタロッチ、フレーベルへと続く近代の教育思想家群像は欠かせないものだからである。ルソーはフレーベルに多大の教育的影響を与えている。中でも「自然に帰れ」がルソーを代表する標語になっているが、ルソーの提唱する「自然」に関する影響が最も大きかった。ルソーの代表的な教育書『エミール』<sup>13)</sup>の中に、ルソーの自然に関する思想が最もよく現れている。

このルソーの自然観の根幹にあるのは、人間が要教育的存在であるということである。すなわち、人間がほんらいの人間になるためには、その前提として教育が必要である、ということの意味している。実のところ、ルソーは自分の子どもたちを孤児院に送ってしまった、自分で自分の子どもを育てた経験はなかった。そんな悲しい経験を懺悔の書として教育書『エミール』が書かれたことは、前号での考察で指摘しておいた<sup>14)</sup>。

同じようにフレーベルにも教育書を書かせるエピソードのようなものがあつた。フレーベルの幼児教育の根底には、「母親」の存在が大きかった。彼の幼児教育は、「母の愛」で生まれ、母と子どもの心の一致が何よりも必要だと、フレーベルは考えていた。これにはフレーベルの幼少時代の生い立ちと深い関係があつた。フレーベルは誕生して9カ月後に母親を亡くしている。彼が4歳の時に牧師の父親が再婚した。フレーベルが10歳の頃に母方の牧師をしている伯父に引き取られた。つまりフレーベルは幼い日から両親のこまやかな愛情を受けて育つたことがなかった。このことが晩年になって、母の愛で育まれるというユニークな教育書『母の歌と愛撫の歌』の出版につながるのである。

### 5. 幼児教育の「3文書」と音楽教育

この段では、幼児教育の「3文書」が音楽教育について具体的にどのようなことを述べているのかを考察していきたいと思う。これによって保育者養成校における音

楽教育の目指すべきところが明確にされるからである。幸いなことに文部科学省のホームページには『幼稚園教育要領』のみならず、詳細な解説のついた『幼稚園教育要領解説』（傍点、引用者）<sup>15)</sup>も公表されている。その大部な解説書の中に、「感性と表現に関する領域」というのがあって、その中で音楽教育について次のように解説している。(6)で始まるのは、その領域の中で、音楽は6番目の項目という意味である。

(6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。

幼児は、一般に音楽に関わる活動が好きで、心地よい音の出るものや楽器に出会うと、いろいろな音を出してその音色を味わったり、リズムをつくったり、即興的に歌ったり、音楽に合わせて身体を動かしたり、ときには友達と一緒に踊ったりしている。このように、幼児が思いのままに歌ったり、簡単なリズム楽器を使って遊んだりしてその心地よさを十分に味わうことが、自分の気持ちを込めて表現する楽しさとなり、生活の中で音楽に親しむ態度を育てる。ここで大切なことは、正しい発声や音程で歌うことや楽器を正しく上手に演奏することではなく、幼児自らが音や音楽で十分遊び、表現する楽しさを味わうことである。そのためには、教師がこのような幼児の音楽に関わる活動を受け止め、認めることが大切である。また、必要に応じて様々な歌や曲が聴ける場、簡単な楽器が自由に使える場などを設けて、音楽に親しみ楽しめるような環境を工夫することが大切である。一方、教師と一緒に美しい音楽を聴いたり、友達と共に歌ったり、簡単な楽器を演奏したりすることも、幼児の様々な音楽に関わる活動を豊かにしていくものである。このような活動を通して、幼児は想像を巡らし、感じたことを表現し合い、表現を工夫してつくり上げる楽しさを味わうことができるようになる。さらには、教師などの大人が、歌を歌ったり楽器の演奏を楽しんだりしている姿に触れることは、幼児が音楽に親しむようになる上で、重要な経験である。このように、幼児期において、音楽に関わる活動を十分に経験することが将来の音楽を楽しむ生活につながっていくのである。(下線、引用者)<sup>16)</sup>

上記の引用文のうち、下線の箇所が最も重要であろう。ここには、豊かな感性を育み、心身の表現力を豊かにするという幼児教育の最も重要なエッセンスのようなものが述べられているからである。幼稚園教諭や保育士たちはこのことをよく心得ておかなければならない。2017年に改訂された「幼稚園教育要領」と「保育所保育指針」をもとに、音楽教育に関する重要なエッセンスをまとめると以下になるだろう。但し、「幼稚園教育要領」と「保育所保育指針」は、その内容が似通っているため幼稚園教育要領からのものをあげた。

**幼稚園教育要領のエッセンス**

音楽：幼児は、音楽に親しむことで、豊かな感性を育み、心身の表現力を豊かにする。また、音楽を通して、集団生活のルールや役割を理解し、他者と協同して活動する力を育む。  
目標：幼児は、自ら音楽を楽しみ、表現する中で、豊か

な感性や表現力を育み、他者と協同して活動する力を身につける。

- 内容：① 歌唱 a. わらべうたや童謡、唱歌など、さまざまな歌を歌う中で、心をこめて歌う喜びや楽しさを味わう。b. 歌詞の内容やメロディーに耳を傾け、表現する中で、感性を豊かにする。c. 歌を歌う中で、集団生活のルールや役割を理解し、他者と協同して活動する力を育む。  
② リズム a. さまざまな楽器や道具を使って、リズム遊びや音楽に合わせて体を動かす中で、リズム感や表現力を高める。b. リズム遊びや音楽に合わせて体を動かす中で、集団生活のルールや役割を理解し、他者と協同して活動する力を育む。  
③ 鑑賞 a. さまざまな音楽を聴く中で、音楽の魅力や表現の多様性を味わう。b. 音楽を聴く中で、感性を豊かにし、想像力を働かせる。

これまで筆者は理論を中心に述べてきたが、実践に関する記述が足りないと思われる。それを補完するためにすでに実践している先行研究の資料を参考にしたいと思う。最初に資料として参考にしたのは、『幼稚園教諭・保育士養成課程 幼児のための音楽教育』<sup>17)</sup>であった。この書には、幼稚園教育要領でも重要視されていた「乳幼児の音楽的成長と発達」、「感性と表現の教育」などが実に分かりやすく詳述されている。たとえば、「表現活動と保育者の役割」の項では、次のような記述がある。

「表現活動は、幼児の心身の成長や発達において重要な役割を担っている。音楽に参加することを楽しいと感じた幼児は、おそらく生涯にわたって音楽に親しむことができるだろう。つまり、幼児期においては音楽の活動そのものに楽しい感情を抱けるようにすることがポイントとなる。」<sup>18)</sup>

この引用した箇所にあるように、この書にはいかにして幼児に音楽の楽しさを伝えるか、あるいは音楽に参加する喜びを実感できるようになれるかの工夫がなされている。いちど喜びを知った幼児は自ずと音楽に親しむようになるだろう。この書の特徴は、単なる理論書で終わらずに教育・保育現場にいる保育士たちに実践しやすくなるように、1年を通じてどの季節にどの曲を、どのような場面や状況にどの曲をと、具体的に多くの楽譜を添えてあることだろう。感性豊かな保育士の先生が、季節にふさわしい曲を、また誕生日には仲間のいる幼児たちの前で、その子のために心のこもったピアノ伴奏を奏でたら、きっと楽しい時間を共有できることだろう。

この書には8月を除いて毎月の楽譜が掲載されている。月別のほかに、「げんこつやまのたぬきさん」のようなわらべうたや「犬のおまわりさん」のような愛唱歌、それにマーチや合奏までが掲載されているので、歌うだけでなく合奏することもできるので教育・保育現場にいる者にとって1年中こまらないだろう。機転のきく保育士なら、そのときの世の中の動向も反映して、たとえば幼児の大好きな定番「ミッキーマウス・マーチ」のほか、阪神タイガース応援歌「六甲おろし」を弾くことを思いつくことだろう<sup>19)</sup>。それはそれで時宜にかなった選曲だと思う。要するに、大切なことは幼児と保育士とが

心を通わせることなのだから。

## 6. ピアノによる教育

さて、具体的に幼稚園や保育園でピアノはどのような教育的効果をあげているのだろうか。すでにみてきたように誕生日を迎えた幼児のために、Happy Birthday To Youを弾くことは本人のみならず、幼児<sup>ちひさ</sup>同士の連帯意識を深めることにつながるだろう。この一事から分かる<sup>みち</sup>とおり、今日の日本の幼稚園や保育園ではピアノは欠かせないものとなっている。ピアノの存在のお陰で、幼児たちの世界を豊かにしているといえるだろう。

これから器楽教育としてのピアノについて考察するとき、2つの側面を考える必要があるだろう。一つはこれから幼稚園教諭や保育士になるための器楽教育としてのピアノであり、残る一つは幼児のためのピアノのことである。保育者養成校でピアノ指導する立場にある者にとっては、この両方の面から考察する必要があるだろう。

器楽教育としてのピアノを指導するとき、初めにピアノという楽器がどれほど重要なかを自覚するように指導する必要があるだろう。そのあとでピアノの習熟度が高まると、たとえば手元の鍵盤や楽譜も見する必要がなくなり心の余裕もでき、園児たちとアイコンタクトがとれるようになることを指導してあげるべきだろう。そうなれば、どれほど幼児たちの保育や生活指導の運営がスムーズにいき、楽になることだろう。

学生がピアノ技術の必要性を自覚したとき、初めて自発的にピアノに向かう意欲がおこることだろう。保育者養成校でピアノ指導する立場にある者にとっては、これが学生指導の、最初にすべきことだろう。

ピアノという楽器が幼稚園や保育園でどれほど重要で効果的かを、もう少し話してやる必要があるだろう。それによって、これから勤めることになる幼稚園や保育園に対する認識を深めることになるだろう。それにはいちばん分かりやすい入園式や卒園式などの行事的なことから始めればよいだろう。

入園式や卒園式では、入場や退場にピアノの演奏は欠かせない。ピアノの伴奏に合わせて、幼児が歌や踊りを披露する。ピアノの音色は、セレモニーの雰囲気や華やかに演出し、幼児の晴れやかな門出を祝福してくれる。運動会や発表会では、ピアノの伴奏に合わせて、幼児が踊りや演技を披露する。ここでもピアノは必須のものとなっている。ピアノの音色は、幼児のパフォーマンスをより引き立て、保護者の注目を集めることだろう。

七夕やクリスマスなどの季節の行事では、ピアノの伴奏に合わせて、やはり幼児が歌や踊りを披露する。ピアノの音色は、ここでも季節の雰囲気を盛り上げ、幼児の心を豊かにする。

このように幼稚園でセレモニーや行進などでピアノを使用することによって、効果的な雰囲気づくりをおこなうことができ、幼児の心身の発達にも効果をもたらすことだろう。

ピアノはもともと音域が広く、さまざまな音色を表現できる楽器である。幼稚園教諭や保育士がピアノを弾くことで、幼児はさまざまな音楽に触れ、自分の感情やイメージを表現する力を育むことができるだろう。

ピアノの音色には、幼児の心を揺さぶるような力があ

る。幼稚園教諭や保育士がピアノを弾くことで、幼児は音楽の美しさ、楽しさに触れ、豊かな感性を育むことへとつながることだろう。

同じように学生の心構えの問題として、ピアノの技術的指導だけでなく、ルソー、フレーベルなどの温かい、優しい、教育思想的な心の面の指導が必要だろう。これらに関して、筆者の経験も交えて以下に述べてみたいと思う。

心構え的なことについては、筆者のウィーンの幼稚園での体験を述べた次の7の「おわりに」の項に譲ることにする。ここでは主にピアノが幼稚園や保育園で活躍する場面や状況について述べてみたいと思う。

ピアノという楽器の特徴であるが、その音色には参加者をつつとまとめ、一体感を演出するところがある。そのうえピアノの音色には、周囲の雑音を抑える効果があるので、セレモニーや行進をスムーズにおこなうことができる。

このように器楽としてのピアノには多岐にわたる教育的効果がある。それゆえに、幼児教育にはピアノは欠かせない教科となっているといえるだろう。

## 7. おわりに

小論を終えるにあたって思うところを述べてみたいと思う。サブタイトルに「3文書」と西洋近代の教育思想と加えたが、実のところ、筆者には「3文書」に関する研究は少し荷が重すぎた感がある。筆者は本学で器楽教育のピアノ指導をおこなっている。つまり、将来の幼稚園教諭や保育士を育てるのが任務なのだろう。これは筆者の大きな喜びである。その理由は、このあとの筆者の若い頃の体験の話のあと、分かっていただけのことと思う。

筆者は、子どもの頃からピアノを習い、ピアノ演奏家を夢みて音楽大学でピアノを学び、クラシック音楽の本場といわれているウィーンでも、名高い教授の個人指導を受ける機会に恵まれた。そのような筆者には若い学生たちにピアノ指導をするのは楽しく、今も有難いと感謝する日々が続いている。ところが、今はピアノ指導だけでなく、教育の原点ともいべき教育原理の領域にも関心を抱くようになった。その結果として、筆者の書く論文のテーマはいわゆる教職科目と深いかわりのあるような内容のものが多くなった。今回の「3文書」に関する研究テーマもその現れだろう。

実は、筆者がこのような難解な教育原理、教育思想に関心を抱くようになったのには筆者なりの理由があった。それは筆者の体験によるところが一番大きかったように思う。その最初のきっかけとなったのは、長男をオーストリアのウィーンの幼稚園に入園させたことだった<sup>20)</sup>。ウィーンの家の中には大きな公立の幼稚園もあったが、日本大使館の友人の強い勧めがあって小さなカトリック教会附属の幼稚園に入れていただいた。当時2才<sup>つばみ</sup>だった息子は、一番小さな子どもたちのクラスである蕾組(Knospen Gruppe)に途中編入された。幼稚園全体で日本人はおろか、東洋人は息子ひとりだった。ここに毎朝、月曜日から金曜日まで預けることになった。最初の数カ月から半年間ほどの朝は大変だった。幼稚園に着くと、息子が大きな声で泣き始め筆者にしがみつ<sup>シグマ</sup>いて離れない日々が続いた。こんなときはいつも Tante

と呼ばれている優しい保育士が助けてくださった。そのうち恒例のように泣いていた息子の周りに、蕾組の仲間たちが群がってくれるようになった。

息子の通う幼稚園 (Kindergarten) は、フレーベルの教育思想を受け継ぐ幼稚園だった。Kindergarten の言葉どおり、幼稚園には子どもたち (Kinder) の庭 (Garten) があつた。広い庭の砂場で砂いじりをしながら子どもたちは遊んでいる。子どもたち同士の世界で仲良くコミュニケーションをとっているのだ。ここの幼稚園では、庭で遊ぶ時間が多かったようだ。園児が園内のどこかを走っていて転んでも、タンテはすぐには助けようとはしなかった。子どもたちの仲間が自発的に助け起こそうとする雰囲気があつた。こんなところにも、幼い時から助け合う心、公共心を芽生えさせようとするフレーベルの教育思想が感じられたものだった。教室の中には、絵本や積み木などのフレーベルの「恩物」(Spielgabe)<sup>21)</sup> と呼ばれる玩具が用意されていた。

息子のウィーンの幼稚園生活に関しては、母親としていくつか印象深い思い出があるが、中でもその中から一つ、幼児教育の原点、しかも器楽教育を根本から考えさせられた思い出を紹介したいと思う<sup>22)</sup>。

いつも閉園時間ぎりぎりまで息子を預けていたが、その日にかぎってめずらしく午後の早い時間に息子を迎えに行くことになった。日頃の幼稚園の様子は、たまに立ち寄りたりしていたので、少しは知っていた。その風景はこんなものだった。幼児たちが庭から教室の中へ戻ってくると、タイミングを見計らってタンテが部屋の中央に腰掛ける。すると園児たちはタンテを取り囲むように円陣を組んで座る。しばらくの間、タンテが本を読んでもやっていると。そのあとギターを取り出し、演奏しながらタンテがまず園児の歌を歌い、そのあと園児たちがタンテを真似て唱和してゆく。こんなふうに園児たちの幼稚園での生活を垣間見ている。まるで日本の「幼稚園教育要領」に書かれている理想の姿が、もう 30 数年も前にウィーンの幼稚園ですすでにおこなわれていた。

ところで突然、たまたま早く息子を迎えに行ったこの昼下がりのことだった。この日もタンテがギターを手にして歌っている場面に遭遇した。映画『サウンド・オブ・ミュージック』の映画のように、マリアを中心にトラップ家の子どもたちが取り囲んでいる、そんな場面のような。息子もみんなと同じようにその輪の中にいた。筆者はしばらくのあいだ中には入らず、そっと窓の外に隠れてその様子を眺めていた。

タンテはギターを弾きながら明るい表情で、子どもたち一人ひとりとアイコンタクトをとっている。ドイツ語を話せなかった長男も、みんなと一緒に仲良く歌っている。思わず胸に熱くこみ上げてくるものがあった。このときほどタンテを有難く思ったことはなかった。入園して数カ月は、朝の幼稚園のドアの所で、まだ 2 歳の泣き叫ぶ息子を、無理やり手渡しでタンテに預け、逃げ帰るような日々が続いたものだった。

筆者は当時、ウィーン国立音楽大学ピアノ科主任のハンス・グラーフ (Hans Graf, 1928-1994) 教授<sup>23)</sup>のもとでピアノの指導を受けていた。若かった筆者は教授のレッスンを受けながら、幼い息子の子育てに懸命な日々だった。若い頃からの憧れの地・ウィーンで、しかも当時、世界的に活躍中のグラーフ教授のもとでピ

アノを学べる喜びは大きかった。その喜びと、演奏技術をただひたすら向上させることに夢中であった。

こんなときに、『サウンド・オブ・ミュージック』のマリアの弾き語りのようなタンテの光景と出会ったのだった。あれから三十数年が過ぎた。今も思うのは、あのとき感じたタンテへの感謝の気持ちだろう。その感謝の気持ちはますます大きくなって、今では保育士、幼稚園教諭という仕事に対する敬意と期待、さらに幼児教育に関する教育学、ルソーやフレーベルの教育思想へとつながっている。

思い返せば、三十数年前に出会ったタンテへの感謝の思いが筆者の幼児教育の原点となっている。筆者のウィーン時代のグラーフ教授からの指導は演奏家としてのものだったが、ウィーンの幼稚園のタンテからは、保育士としての指導法を多く学んだ。あのときの筆者が園児たちの前で、ピアノの技量を発揮したとしても、園児たちの心をとらえることはなかっただろう。幼稚園では演奏家としての技量は必要ない。必要なのは幼児たちの心をとらえる温かさなのだ。

音楽教育の役割や目的にはそれぞれ違いがあつて、大きくて深い。今あらためてそれを感じている。初等教育のピアノ指導の現場でもこの認識を忘れると、ともすれば演奏家を育てる教育に終始する恐れがある。筆者は本学でピアノ指導するとき、学生たちは未来のタンテなのだという意識で接している。

筆者はわが子をウィーンの幼稚園に通わせた体験があつたおかげで、フレーベルの提唱する母親としての心構えと、保育士としての心構えを同時に学ぶことができた。

この小論を終えるにあたって、筆者が日頃の生活の中で座右の銘にしている言葉を紹介したいと思う。これは世界的に活躍しているピアニストの深沢亮子<sup>24)</sup>の一節である。ここには音楽教育のもつ重要なエッセンスが語られており、さらには自然観や平和に基づく崇高な人間の姿が示されていると思われる。

「音楽は、人の心に、生きることへの勇気、慰め、安らぎを与えるものであり、平和のためにあるのだと私は考えます。言いかえれば、音楽を愛する心は、人間や自然を愛する心につながるものだとも言えましょう。思いやりに満ちた、やさしい言葉や感謝の気持、大自然の前に立ったときの、あるいは美しい音楽や秀れた絵に接した折の、深い感動や生きる喜び、道ばたにひっそりと咲く可憐な野の花への限りない愛情など、人間はみな、多かれ少なかれ、こうしたことを感じとる力をもっているものですが、ピアノを弾く場合に、特に大切なのは、このような心を育ててゆくことだと思います。」<sup>25)</sup>

以上の言葉には、すでにみえてきたルソーやフレーベルの教育思想、とくに自然観や人間形成のエッセンスが凝縮されているように思う。さらにまた、幼児教育の基本となる「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の「3文書」の理念も反映されているように筆者には思われる。

## 注

1. 幼稚園教諭や保育士による虐待事件は、昨年の紀要の執筆時に社会問題になっていた。筆者はそのことに



- 心を痛め、次号にこの問題を取り扱う旨を予告しておいた。『湊川短期大学紀要第59集』（湊川短期大学、2023年、P.44）を参照されたい。
2. 「3文書」の（The Three Documents）という訳語は、文部科学省のホームページに掲載された訳語を用いた。
  3. 保育士による幼児虐待事件が起こって以来、これは筆者にとって懸案の問題であった。注1も参照されたい。
  4. 筆者は夫の在外研究（ウィーン大学）にともない1987年と1988年、ウィーン18区に滞在した。当時、長男は2才～3才だった。長男にとって初めて通う学校が外国だった。なお、このウィーンの幼稚園のことについては、前に述べたことがある。『湊川短期大学紀要第58集』（湊川短期大学、2022年、PP.8-9）を参照されたい。
  5. Tante「タンテ」はドイツ語で、「おばさん」という意味で、園児たちは親しみを込めて、そう呼んでいる。実際のところ、園内には親しくそう呼べるような温かい雰囲気があった。
  6. 静岡県裾野市の私立認可保育園「さくら保育園」で起きた事件。
  7. 読売新聞、2022年12月5日。
  8. フレーベル著、新井武訳（2019）『人間の教育（上）（下）』、岩波書店。
  9. 汐見稔幸／無藤隆（2018）『幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領』、ミネルヴァ書房。
  10. 前掲書、P. i .
  11. 『湊川短期大学紀要第58集』（湊川短期大学、2022年）および『湊川短期大学紀要第59集』（湊川短期大学、2023年）を参照されたい。
  12. 『湊川短期大学紀要第59集』（湊川短期大学、2023年）を参照されたい。
  13. 今野一雄訳（2007）『エミール（上）（下）』、岩波書店。
  14. 『湊川短期大学紀要第59集』（湊川短期大学、2023年）を参照されたい。
  15. 『幼稚園教育要領解説』（文部科学省、2018年）
  16. 前掲書、P.234.
  17. 石井恵子・大見由香・鎌形由貴乃・竹内アンナ（2017）『幼稚園教諭・保育士養成課程 幼児のための音楽教育』、教育芸術社。
  18. 前掲書、P.13.
  19. 2023年12月21日、地域福祉センターにおいて「クリスマス会」が開催された。筆者は地域の民生委員の会長をしていて、高齢者の前でピアノ演奏をおこなった。主な曲目は「きよしこの夜」、「ジングルベル」、「ベチカ」、「お正月」で、これらの曲の手作りの歌詞集を事前に用意して会場の人たちに配布した。どの曲も筆者のピアノの伴奏に大きな声で唱和してくださった。最後にアンコールとして、1月1日のウィーンのニューイヤーコンサートの模様を話して、「ラデツキー行進曲」を演奏したところ、全員が大きな手拍子をして応じてくださった。さらにアンコールとして、「今年にはWBCの侍ジャパンの優勝、さらに阪神タイガースの優勝で関西は盛り上がりました！」と前置きをして、六甲おろしを演奏したところ、大盛り上がりで、その日の一番の大合唱であった。このとき学んだことは、共感することだった。年齢に関係なく、これが幼

- 稚園や保育園であっても同じことなのだろう。重要なことは保育士が、臨機応変に時宜にかなった選曲をして、幼児と心を通わせてひとつになることなのだろう。
20. 2才の長男が初めて通う学校が外国のウィーンだった。地元にある公立の幼稚園は規模が大きかった。小さなカトリック教会の附属幼稚園のほうは、最初からファミリー的な雰囲気があった。こちらのほうは入園希望者も多く厳しかったが、日本大使館の友人の紹介で一番小さい子どもたちのクラスに入園させていただいた。
  21. 恩物（Gabe）とは、ほんらい「神がこどもに賜ったもの」という意味をもつ。その前にさらにSpielが付されると玩具の意味をもつ。こどもたちが楽しく遊びながら学べるように、フレーベルが考案した一連の知育玩具のことである。この影響を受けて生まれた玩具のひとつにレゴブロックがある。
  22. 長男が通っていた幼稚園の蕾組には、当時、19名の幼児が在籍していた。タンテと呼ばれる保育士が4名ほどに、補助する見習いのような若い女性が2名ほどいた。タンテは全員女性で、40代のチーフ的存在のタンテに長男は可愛がってもらった。このタンテがサウンド・オブ・ミュージックのマリア的存在だった。
  23. ハンス・グラーフ先生には1987年・1988年とピアノ指導を受けた。ピアノ指導だけでなくウィーンで生活するうえで困らないように優しいアドバイスも受けた。1977年に初来日され、リサイタルを開いておられる。『MUSICA NOVA '77/ 8』には写真入りで大きく特集が出ている。筆者が指導を受けるちょうど10年前のことだ。グラーフ先生とのことで忘れられないことがある。筆者がウィーンにいた1987年に初めてシューベルトコンクールが創設され、その第1回のコンクールが1988年におこなわれるので、筆者に出場するように勧めてくださった。グラーフ先生は審査員のおひとりということだった。よく聞いてみると、筆者は年齢オーバーだった。先生は若く見てくださったようだったが、筆者は30歳を数カ月だけ過ぎていた。これも今となっては、先生とのいい思い出となっている。
  24. 日本を代表するピアニスト。今でこそ音楽の世界でも海外留学が盛んだが、最も初期の頃にウィーンに留学し、ウィーン国立音楽大学を卒業した。大野亮子著『続 ピアノの日記』（音楽之友社）は音楽留学を目指す若い人たちのバイブル的書籍となった。以前はウィーンを拠点にして活躍しておられたが、現在は東京に在住し演奏活動をおこなっている。2023年にはデビュー70周年記念ピアノリサイタルが東京文化会館でおこなわれた。筆者は深沢先生からピアノの直接の指導を受け、先生の父・大野桂先生の著書（後述の参考文献を参照されたい）からはピアノに向かう心構えを今も学んでいる。
  25. 深沢亮子編（1977）『深沢亮子ピアノ教室』の巻頭言から、ドレミ楽譜出版社。

#### 参考文献

- ルソー著、今野一雄訳（2007）『エミール（上）』、岩波書店。  
 J.H. ボードマン著、乙訓稔訳（2004）『フレーベルとバスタロッチ』、東信堂  
 フレーベル著、新井武訳（2019）『人間の教育（上）（下）』、岩波書店。

- 乙訓稔 (2005) 『西洋近代 幼児教育思想史』, 東信堂。
- 豊泉清浩 (2017) 『フレール教育学入門』, 川島書店。
- 大野桂 (1987) 『こどもの心理とピアノの指導法』, 音楽之友社。
- 田岡由美子 (2014) 『フレールにおける「予感」の研究』, 高菅出版。
- 岩崎次男ほか (2006) 『ペスタロッチー・フレール事典』, 玉川大学出版部。
- 梅本堯夫 (1999) 『子どもと音楽』, 東京大学出版会。
- 神原雅之／鈴木恵津子 (2017) 『幼稚園教諭・保育士養成課程 幼児のための音楽教育』
- 荒木紫乃 (2003) 『音楽の表現力を探る—保育園・幼稚園から小学校へ—』, 文化書房博文社。
- 野村良雄ほか (1971) 『標準 音楽辞典』, 音楽之友社。
- 池内友次郎ほか (1977) 『新音楽辞典 楽語』, 音楽之友社。
- 田中未来 (1981) 『保育者のための教育原理』, 川島書店
- 二宮紀子 (2014) 『子どもの歌・ピアノ伴奏のしくみ』, 音楽之友社。
- 無藤隆一 (2013) 『幼児教育のデザイン』, 東京大学出版会。
- 三森桂子・小島エマ (2018) 『音楽表現』, 一藝社。
- 岸井勇雄, 小林龍雄, 高城義太郎, 栃尾勲 (2000) 『幼児教育原理の研究』, チャイルド本社。
- 中村弘行 (2015) 『人物で学ぶ 教育原理』, 三恵社。





# 保育士試験「保育実習理論」音楽分野に関する一考察

—養成校での取り組みを考える—

A study on the music field of the "Theory of internship at Nursery school" for the nursery teacher examination  
—considering the efforts at the training school of nursery teacher.—

高嶋 智美

Tomomi TAKASHIMA

湊川短期大学 幼児教育保育学科 非常勤講師

## 要旨

保育士資格を取るには大学・短期大学・専門学校などの指定保育士養成校を卒業するか、年2回行われる保育士試験に合格する方法がある。取得方法の違いはあれども取得後の資格に区別はなく、養成校で学ぶ学生たちに2年から4年という年限の中で身につけて欲しい知識や技能が、保育士試験における「保育実習理論」の音楽領域で課される課題にも表れているといえるだろう。

「保育実習理論」の音楽分野では、楽典的な問題だけでなく、文化的歴史的な音楽知識も出題される。そして、実際に童謡や唱歌を取り上げた課題も毎年出題されており、その曲を知らなければ答えることができないような問いもある。よって、本論では「保育実習理論」の音楽分野の過去の出題を通じて、養成校に通う学生たちに任意でアンケート調査を行い、養成校の限られた授業時数をより有効に活用するための取り組みとは何かについて考察した。

キーワード：nursery teacher examination, training school of nursery teacher, expression activity by music

## 1. はじめに

女性の就業支援と待機児童問題解消へ向けた施策「子育て安心プラン」(2017年)に引き続き「新子育て安心プラン」がこども家庭庁により2020年(令和2年)に公表され、少子化の中でも保育士の需要は更に高まっている。同年に厚生労働省から発表された資料『保育士の現状と主な取り組み』<sup>1)</sup>によると、2018年の保育士取得者数は、養成施設が39,909人であるのに対して、保育士試験合格者数はおよそその30%にあたる13,500人(地域限定保育士を含む)となっている。保育士試験合格者数は近年増加していたが、2016年に保育士試験が年に2回開催となって以降、常に一万人を超えており、令和元年である2019年には18,330人となり、コロナ禍で一旦数を減らしたものの、2022年には23,758人の合格者を出している。

このように保育士試験による資格取得は実施されて以来、歴史的に様々な問題を抱えながらも、制度改革を重ねながら続いてきているが、基本的には保育士資格はそれらの歴史的変遷の中でも「保育士養成校の課程修了による保育士資格の取得者と保育士試験の合格による保育士試験の取得者」とで両者のレベルを同質にすることが本来的には望ましい<sup>2)</sup>とされてきた。

実際に、直近でも保育士試験では、2018年の保育所保育指針改訂で保育士養成校のカリキュラムが2019年に変更になったのに合わせ、2020年にマイナーチェンジが行われている。保育士試験は養成校ほど多くの科目がないため、それほど大きな変更にはなっていないが、養成校において「児童家庭福祉」が「子ども家庭福祉」という科目名になったように、保育士試験においても筆

記試験科目名が変更されたり、実技試験における分野の名称が「音楽表現に関する技術」から「音楽に関する技術」というように変更されたりといった細かな点での変更がある。しかし、筆記試験9科目と実技試験によって行われる点は変わっていない。

よって、「保育原理」「教育原理」「社会的養護」「子ども家庭福祉」「社会福祉」「保育の心理学」「子どもの保健」「子どもの食と栄養」「保育実習理論」の9科目からなる筆記試験から、今回は「保育実習理論」を取り上げ、その音楽分野の過去の出題を通して、保育士に求められる音楽に関する技術について考察するものとする。

## 2. 「保育実習理論」音楽分野の出題傾向

「保育実習理論」では図画工作や保育実習問題と合わせた全20問のうち、例年最初の6問が音楽分野の出題となっている。筆記試験合格者に対して行われる実技試験では、音楽、造形、言語の中から2分野を選ぶが、「保育実習理論」では全員が同じ問題を解かなければならない。造形分野の出題数が令和4年度試験で5問から4問に減少していることから考えると、音楽分野の比重はより大きくなっているといえる。

「保育実習理論」音楽分野で出される問題は大きくは次の3つに分類できる。第一に伴奏付け問題、第二に移調や音楽用語、作曲者、楽器等、総合的な音楽知識を問う総合問題、第三にリズム譜や旋律譜から曲の歌い始めや続きを選んでそれに対するさらに深い知識を問う問題である。

2023年後期の保育士試験問題を取り上げると、まず、問1が伴奏付け問題、問2、問3、問4が総合問題、問

5はリズム譜, 問6は旋律譜から曲を選ぶ問題であった。

「保育実習理論」における第一の伴奏付け問題は、基本的には「ぶんぶんぶん」「気のいいあひる」「お正月」のようにトニックとドミナントの二つのコードのみで成り立った曲が用いられることが多い。出題方法として

は、右手単旋律のみの楽譜の歌い始め4小節があり、そこに合うコード伴奏譜を選択肢から選ぶような形であるが、ここ10年ほどの保育士試験でみても、「ぶんぶんぶん」は2013年と2017年、「気のいいあひる」は2014年と2018年とそれぞれ複数回出題されている。しかし今年度に出題されている「やきいもグーチャーパー」は、トニックとドミナントに加えて、サブドミナントを含んだ

資料1

The image displays musical notation for '資料1'. It consists of two piano accompaniment staves (treble and bass clef) with four options labeled A, B, C, and D. Below these are four bass clef staves labeled ㍑, ㍓, ㍔, and ㍕, each showing a different chord progression in the bass line.

R5 後期 保育実習理論より抜粋

資料2

The image shows a single melody line in 4/4 time, consisting of a sequence of eighth and quarter notes.

- 1 赤とんぼ(作詞:三木露風 作曲:山田耕筰)
- 2 たき火(作詞:巽聖歌 作曲:渡辺茂)
- 3 しゃぼん玉(作詞:野口雨情 作曲:中山晋平)
- 4 浜辺の歌(作詞:林古溪 作曲:成田為三)
- 5 まっかな秋(作詩:薩摩忠 作曲:小林秀雄)

R5 後期 保育実習理論より抜粋

資料3



- A この曲は、豆まきの様子を歌ったものである。
- B この曲の作曲者は、滝廉太郎である。
- C この曲は、明治時代に作曲された。
- D この曲は、4分の4拍子、8小節からなる。

R5 後期 保育実習理論より抜粋

伴奏となっている。このサブドミナントを含む伴奏付け問題は、2019年の「手をたたきましょう」、2018年の「大きな栗の木の下で」で扱われている。伴奏付けを苦手とする学生や受験者は多いが、少なくともこのサブドミナントを含む主要三和音を楽譜上から読み取ることができ力がここでは求められているといえるだろう。

次に、問2、問3、問4はいずれも第二の総合問題にあたる。

これらは楽語や移調、和音の成り立ち等を問う問題で、毎年出題されており、保育士には基礎的な楽典の知識を身に着けていることが必要とされていることが分かる。

また、その他、総合問題では「唱歌」「リトミック」「コーデシステム」等非常に多岐にわたった出題もあり、その傾向は令和に入ってから、より強まってきているように思われる。赤い鳥運動など歴史的な事柄についての出題もあれば、ケーナやマラカスなどの民族楽器、ソーラン節やわらべ歌についても問われることがあり、音楽全般に関する知識の幅広さも保育士に不可欠とされていることが分かる。

しかしながら、第三の歌い始めのリズム譜（R5後期は旋律譜が追加）から曲を読み取り答えていく問題はそれまでの楽典や音楽知識だけでは解くことのできない問題である。それぞれ示された4小節ほどの譜から曲を思い浮かべ、そこからその曲にふさわしい答えを選んでいく問題のため、そもそもその曲を知らなければ答えることができない。

2023年後期の問5リズム譜問題は「まっかな秋」であったが、そこに続く選択肢として挙げられていた作詞作曲者はすべて正しいため、消去法で正しい選択肢にたどり着くことも不可能で、「まっかな秋」の持つメロディをリズム譜と対応できるかどうかすべてがかかっている。保育士試験の中では、このようにいかに子どもの童謡や唱歌を多く知っているかどうかを問う問題が多い。

2023年後期は問6として、更に歌い始めの旋律譜から曲を読み取り、答えていく問題がだされているが、この場合も楽譜からこの旋律は「お正月」だと判断できてからでなければ、解答にたどり着くことはできない。こうした問題は近年非常に多く出題されている。

ここ10年に保育士資格試験で出題された曲を一覧にまとめてみた。

表1にあるように、これらの曲は、「ぞうさん」のよ

うに複数年に同じくリズム問題として取り上げられているものもあるが、「やきいもグーチーパー」のようにある年はリズム問題、ある年は伴奏問題として取り上げられるもの、もしくは「手をたたきましょう」のように総合問題と伴奏問題というような取り上げられ方をしているものもある。しかしながら、曲を実際に知らなければ答えられないものである点は同様で、やはり子どもの曲をどれくらい多く知っているかが保育士資格試験では求められているのである。

では養成校ではどうであろうか。「保育士養成校の課程修了による保育士資格の取得者と保育士試験の合格による保育士試験の取得者とで両者のレベルを同質にすることが本来的には望ましい」<sup>3</sup>と考えるのであれば、養成校に通う学生たちにも同様に表1にあげた曲を知っておくべきだということになる。そこで、著作権の関係で非公表になっているものを省いた過去の出題曲について、養成校に通う学生たちに任意でアンケートを実施し、それぞれの認知度や取り組みについて調査した。

3. アンケート結果

(1) 最も認知度の低い曲

今回調べたのは、「保育実習理論」で出題された問題のうち、楽典の知識で解ける伴奏問題以外、リズム問題、曲の歌い始め等を選ぶ問題である。これらは先にも述べたように、曲を知らずに答えることが非常に難しい出題のされ方をする。あわせて、同じような趣旨でそれぞれの曲の背景や調性などを知らなければ答えられない総合問題も抜粋して、全37曲を取り上げ、学生20名にそれぞれの認知度と、知っている場合にはどのように知ったかについても、簡単に答えてもらった。

このアンケート調査によると、それぞれの曲の認知度は100%から最少では大きな5%と幅があることが分かった。もっとも認知度の低い「浜千鳥」と「浜辺のうた」を知っていると答えた学生はわずかに一人という結果になっているが、どちらの曲も直近の保育士試験に出題されている。「浜辺のうた」は2023年（令和5年）後期、「浜千鳥」は2022年（令和4年）後期に、それぞれリズム譜問題として登場している。

林古溪作詞、成田為三作曲による「浜辺のうた」は具体的な成立年代は不明だがおそらく1916年（大正5年）までに、一方の鹿島鳴秋作詞、弘田龍太郎作曲の「浜千鳥」は1919年に発表されており、これら2曲は共に2006年（平成18年）に日本の文化庁と日本PTA全国協議会が親子で長く歌い継いでほしい童謡・唱歌・歌謡曲といった抒情歌や愛唱歌を選定した日本の歌百選に選ばれてい

表 1

曲名	リズム譜	総合問題	伴奏問題
赤とんぼ	R5後期		
浜辺のうた	R5後期		
しゃぼん玉	R5後期, H28後期		
まっかな秋	R5後期		
冬景色	R5後期		
お正月	R5後期(旋律譜)		H29
冬げしき	R5前期		
うみ	R5前期, R3前期, R1前期		
とんび	R5前期		
まきばの朝	R5前期		
おつかいありさん		R5前期	
夕やけ小やけ		R5前期, H29後期	
スキーの歌	R4後期		
浜千鳥	R4後期		
ほたるの光	R4後期		
おぼろ月夜	R4後期		
たきび	R4後期, R3後期, H30後期		
桃太郎		R4後期	
七つの子		R4前期	
ぞうさん	R4前期, R1前期, R2後期, H30		
こぎつね	R3後期		
おもちゃのチャチャチャ	R3後期		
クラリネットをこわしちゃった	R3後期		
とんぼのめがね	R3後期, H30後期		
手をたたきましょう		R3後期	R1前期
やさいもグーチーパー	R3前期		R5後期
おつかいありさん	R3前期		
手のひらを太陽に	R3前期		
線路は続くよどこまでも	R3前期		
むすんでひらいて		R3前期	
気のいいあひる	R2後期		H26, H30
びわ	R2後期		
山のワルツ	R2後期		
犬のおまわりさん	R1後期	R3前期, R2後期	
さんぽ	R1後期		
一年生になったら	R1後期		
小鳥のうた	R1後期		
雪	R1後期		
あめふりくまのこ		R1後期	
こいのぼり	R1前期	R3前期	
おかあさん	R1前期		
ありさんのおはなし	R1前期, R2後期		
大きなたいこ	H30後期		
たなばたさま	H30後期		
ちいさい秋みつけた	H30後期		
春が来た	H28後期		
やぎさんゆうびん	H28後期		
バスごっこ	H28後期		
どんぐりころころ	H28後期		

表2

認知度の高い順	曲名	認知度	知っている人の合計	内 訳			
				学校関連以外	保育園や幼稚園等	小中高	大学の授業
1	一ねんせいになったら	100%	20	4	13	3	
	犬のおまわりさん	100%	20	8	11	1	
	こいのぼり	100%	20	8	11	1	
	さんぽ	100%	20	8	11	1	
	どんぐりころころ	100%	20	4	14	1	1
	夕やけ小やけ	100%	20	3	12	4	1
2	赤とんぼ	95%	19	2	12	5	
	おもちゃのチャチャチャ	95%	19	8	9	2	
	手をたたきましょう	95%	19	5	14		
	ぶんぶんぶん	95%	19	7	9	2	1
	むすんでひらいて	95%	19	5	14		
3	大きな栗の木の下で	90%	18	4	13	1	
	お正月	90%	18	7	10	1	
	ほたるの光	90%	18	7	4	7	
4	桃太郎	80%	16	6	10		
5	海	75%	15	5	8	1	1
6	とんぼのめがね	70%	14	4	10		
7	思い出のアルバム	65%	13	1	8	4	
8	まっかな秋	60%	12	1	7	4	
	やきいもグーチーパー	60%	12	4	7	1	
9	おぼろ月夜	55%	11	3	1	6	1
	クラリネットをこわしちゃった	55%	11	4	6	1	
	こぎつね	55%	11	4	4	3	
10	雪	50%	10	4	4	1	1
11	あめふりくまのこ	45%	9		9		
		45%	9			5	4
12	とんび	35%	7		2	3	2
13	小鳥のうた	30%	6	3	3		
	七つの子	30%	6	3	1	2	
	冬景色	30%	6		1	2	3
14	おつかいありさん	25%	5		3	2	
	山のワルツ	25%	5	1	1	3	
15	びわ	20%	4	1	1	2	
16	気のいいあひる	15%	3	2		1	
17	ありさんのおはなし	10%	2	1			1
18	浜千鳥	5%	1	0		1	
	浜辺のうた	5%	1		1		

る。

教科書にもよく採用されており、「浜辺のうた」は中学校の学習指導要領において「夏の思い出」「早春賦」と並んで、第二学年の共通教材として指定されている。「浜千鳥」も同様に令和5年度版小学生の音楽にも「歌いつごう日本のうた」として小学校音楽6年生の教科書に収録されている。

しかしながら学生たちのアンケート結果からみると、そういった曲の背景はまったくその認知度に反映されていないといえよう。

### (2) 出題頻度の高い曲

また、このアンケートからは曲の出題率と認知度は比例していないことも読み取れる。「気のいいあひる」は先に触れたが、「保育実習理論」の音楽では非常に出題率の高い曲である。2014年と2018年には伴奏問題として、2020年にはリズム譜問題としての出題がある。伴奏問題は楽典的知識で解くことが可能だが、リズム譜問題の場合、それは非常に難しくなる。「気のいいあひる」はチェコ民謡の一つで、NHK「みんなのうた」で1962年に紹介されたものであり、現在でもその明快なコード進行のためか、ピティナのピアノ教本などにも採用されているが、学生たちの認知度は下から4番目でわずか15%しかない。

認知度の点で「気のいいあひる」の次に低い「びわ」も、同じく近年続けて出題されている曲である。2020年(令和2年)はリズム譜問題として取り上げられているが、その2年後の2022年には「ことりのうた」と合わせて、実技試験の課題曲として採用されている。課題曲はあらかじめ発表されているが、一次試験合格発表から二次の実技試験まではわずか10日間ほどのため、初心者の場合にはあらかじめ準備をすることが必要となるだろう。

### (3) 大学の授業で知った曲

この準備という視点からあらためてアンケート結果を見ると、さらに興味深いことが分かる。「ありさんのおはなし」「冬景色」「とんび」「まきばの朝」などの項を参照してほしい。これらの曲は、認知度自体もそれほど高くはないが、その中に大学の授業において勉強したという学生が含まれている。大学の授業で学んだ人数を省くと、それぞれの認知度は更に下がる。「ありさんのおはなし」の認知度はわずかに10%から5%へ、「冬景色」は30%から15%へ、「とんび」は35%から25%、45%ほどの認知度がある「まきばの朝」も25%というように、すべて25%以下となり、児童教育や幼児教育を目指す学生であっても4人に1人程度しか曲を知らないことになる。ここに保育士資格を養成課程で取得することの有意性が見て取れるのではないか。

保育士資格試験の「保育実習理論」においては、ピアノスキルのような技術的側面というよりは、幅広い音楽的な知識や、それらに触れた経験がどれだけあるかが問われているように思う。

保育士や幼稚園教諭になるためにピアノスキルが必須であるかどうかは常に問われ続けている問題で、実習に行っても一度もピアノに触れる機会がなかったという学生も一定数いることは事実である。実際、一次試験合格後に課される保育士資格試験の実技試験では、音楽・造形・言語の三つの分野から二つを選択して受験できるため、ピアノやギター、アコーディオンなどを用いた弾き

歌いを選択せずとも保育士資格試験に合格する可能性がある。

しかしながら、全員が受験する保育実習理論で問われているものは、そういった技術的側面ではない。大学、短期大学、もしくは、専門学校等、それぞれ違いはあれども、決まった年限の中でピアノの授業を通して自然と音楽に触れる機会が増えることは養成校で学ぶ上での大きな利点である。授業を通して様々な曲に親しむことは、子どもたちの音楽表現活動を豊かにすることにつながっていくはずだ。幼児の心に響き、興味を引く歌を通して、様々な音を知り、日常生活の中でも音に関心を持つようになって、表現のイメージが豊かになる<sup>4)</sup>であり、それは保育所保育指針で示された表現のねらいにも合致する<sup>5)</sup>。

### (4) 保育園や幼稚園等で覚えた曲

アンケート調査で注目すべきは学生の認知度が高い曲は保育園や幼稚園等でそれらを知った学生が多いという点である。学生の認知度が100%の曲に関していえば、いずれの曲もその55%以上を保育園や幼稚園等で覚えたという結果が出ている。多少の変動はあるが、認知度の高い曲は、圧倒的にそれを保育園や幼稚園でそれを知ったという学生が多い。このことは、保育園や幼稚園等の現場にとって音楽的活動の重要性をあらわしているといえよう。「大きな栗の木の下で」「手をたたきましょう」「むすんでひらいて」に注目してほしい。これら3曲はそれぞれ全体の認知度も高いが、その中でも「大きな栗の木の下で」は72%、「手をたたきましょう」と「むすんでひらいて」は74%の学生がこれらを保育園や幼稚園等で覚えたとしている。ここに保育園や幼稚園での音楽活動の姿が見えてくると思う。なぜなら、これら3曲にはすべて曲の情景に合わせたリズムカルな動きがついているからだ。

保育士に求められる音楽的な表現は「幼児が好むような音楽的な言葉のリズム(擬音語や擬態語などを含む)や、幼児が快さを感じるような身体の動き(ジャンプしたり、転がったり、スキップしたりなどを含む)などのリズムカル表現を保育者が行うことである」<sup>6)</sup>とされているが、アンケート結果からもそのような保育者と幼児たちの動きを伴う豊かな表現活動が存在していたことが想像される。

音楽の好きな保育者のクラス子どもたちは音楽が好きになることが多いという一般的な傾向があるといわれるが、保育者の音楽的な表現には、リズムの生じる言葉・声・身体の動き(表情や身振り)が含まれており、幼児の表現を豊かにするには保育者自身が単一的な活動に陥らないように工夫しながら、さまざまな内容の音楽を行うことが重要だといえる。保育園や幼稚園等保育における領域「表現」のねらいには「自分なりに表現して楽しむ」とあるが、この「自分なりの表現」をより豊かな表現に導き、高めていくことも保育士の重要な役割なのではないだろうか。

## 4. 養成校での取り組み

以上、保育士資格試験とそこで出題される曲をもとにしたアンケート結果から、音楽分野で保育士に求められているものは何かについて考察してきた。

「保育実習理論」音楽分野においては、基礎的な楽典、音楽全般についての幅広い知識が求められていることが

分かった。伴奏問題からはトニック・ドミナント・サブドミナントの主要三和音を理解しておくことの重要性が見て取れる。特にピアノ初心者の学生にとって、これら主要三和音（もしくはトニックとドミナントのみであっても良い）だけで成り立つような曲は学習しやすいであろう。「ぶんぶんぶん」のように二和音から始め、トニックとドミナントの持つ響きの感覚をしっかりと身に付けておくことが重要である。

次に、できるだけたくさん曲に触れることの必要性も保育士資格試験からは示唆されていることが分かった。今回のアンケートからは、保育士資格取得者に求められている子どもの歌の数にたいして、学生たちの認知度が追いついていないことが見て取れる。それは小中高の音楽の授業が変容し、歌唱する機会等が減少してきていることにもよるかもしれない。それを補うために養成校の授業で弾き歌いのレパートリーをそれぞれが増やしていくには授業時数や個人の力量もあいまって限界があるだろう。しかしながら、実習を想定した授業を通して、限られた時間の中であっても、実習先での課題曲や、一年を通して季節や行事にちなんだ歌を学んだりすることも養成校にだけにある大きな強みだといえるのではないだろうか。

実習前に知らない曲を課題に与えられると、それだけで不安を覚える学生もいる。しかし、小澤が「人前でやる経験を多くもつこと」と「たくさん曲に触れること」を養成校の今後の課題にあげている<sup>7</sup>ように、それらもまた養成校だからこそできる貴重な経験だ。

表現活動を歌唱やピアノ演奏の技術に重点を置くと、学生たちの得手不得手に左右され、自由度を失ってしまう部分がある点是否めないが、保育士に求められる音楽表現はそれだけでは測れない。基礎技能の習得は大切なことではあるが、それらを鑑みながら、保育者の音楽的な感受性を高めることのほうへ力のベクトルを向けていくことも幼児の豊かな音楽活動に重要なのではないだろうか。

#### 引用参考文献

- 1 厚生労働省 (2022) 「保育士の現状と主な取組」保育の現場・職業の魅力向上検討会 (第5回)
- 2 吉見 昌弘 (2001) 「保育士試験の歴史的変遷と今後の課題」『県立女子短期大学研究紀要 第38号』, p. 25
- 3 前掲書, p. 25
- 4 中川 華那・片山 美香 (2015) 「音楽による幼児の表現活動の意義と保育者の援助に関する研究—人とかかわる力をはぐくむために—」『岡山大学教師教育開発センター紀要第5号別冊』
- 5 文部科学省・厚生労働省 (2008) 保育所保育指針全文
- 6 小池 美知子 (2009) 「保育者の音楽的感受性は幼児の音楽表現に及ぼす影響」『保育学研究 第47巻第2号』, p. 61
- 7 小澤 和恵 (2009) 「保育所・幼稚園実習で求められる音楽活動の考察—『生活の歌』と『季節の歌』について」『埼玉純真短期大学研究論文集第2号』





# ICTを活用した領域「環境」によるアクティブ・ラーニング型 授業の展開についての一考察

A study on the development of active learning classes using ICT  
in the area of "environment"

藤田 貴久

Takahisa FUJITA

湊川短期大学 幼児教育保育学科 非常勤講師

## 要旨

領域環境における幼児期の子どもたちにとって自然体験は非常に重要である。自然環境での活動は、子どもたちの身体的、感覚的、認知的、社会的な発達に多くの利益をもたらす。それらの物的、人的環境を保育者が積極的に取り入れていくことが求められる。

子ども達の自然体験活動を促進していくためには、保育者養成学校において、授業にICTを取り入れた授業展開やアクティブ・ラーニング型授業も有益なアプローチである。自然体験活動においても、アクティブ・ラーニング型授業を展開することで、学生の自然体験活動へとつながっていく。ただし、自然体験活動とICTの組み合わせにおいては、バランスが重要である。保育者や保護者は、子どもたちが自然とICTの両方をバランスよく活用できるような環境を提供することが求められるのである。

キーワード：保育者養成 ICT 自然体験活動 幼児 環境

## 1. はじめに

昨今の情報化社会、車社会や自然の現象、人口の都市部集中化、少子化、都市化、過疎化の影響などにより社会環境の変化が学生たちの生活する空間や時間に大きな影響を与えている。幼児だけではなく、学生が学ぶ環境も変化してきているのである。

幼稚園教育要領には、「幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない」<sup>(1)</sup>とある。また、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿のなかには、自然との関わり・生命尊重という項目がある。「自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念を持つようになる」と記されている。自然体験活動を通して、子どもたちの身体や心の成長を促すことへとつながっていることが明記されている。

寺本らによると、「今後、ますます環境悪化によって原体験量が先細りすることが考えられる現状の中で、保育所・幼稚園内において、全ての幼児が多様な原体験を出来るような物的環境の整備や展開方法（カリキュラム）を検討することも重要な課題である。しかし、保育者や幼児自身の力では変えたくても変えられない、幼児の背後にある保育所・幼稚園外での生活スタイル、さらには養育環境としての父母の影響をも視野に入れて、多様な原体験が可能となる生活背景の分析・検討が望まれる」<sup>(2)</sup>と述べている。子どもたちの様々な経験を促す役割として、保育者による園内外の環境構成や環境設定について考える必要がある。

社会やテクノロジーの進歩により、子どもたちが成長する環境も大きく変わってきている。まず、デジタルテクノロジーの普及により、子どもたちは以前よりも多くの情報にアクセスできるようになった。インターネットやスマートフォンを通じて、世界中の知識や文化に触れることができる。これは子どもたちの学習や創造性の可能性を広げる一方で、情報の信頼性やプライバシーの問題にも注意が必要である。また、保育・教育のアプローチも変化している。従来の保育室の枠にとらわれず、オンライン学習や遠隔教育が普及してきていることが挙げられる。これにより、地理的な制約を超えて教育を受けられることができるようになり、個別の学習スタイルに合わせた教材やプログラムも増えてきている。

そこで、幼児の周辺環境の変化を、現代社会に合わせた環境を保育者が取り入れていく必要がある。生活環境でのICT機器を用いた、メディア化、情報化を保育の中に積極的に取り入れることによる、子ども達の自然体験活動を促進する方法を探る。その方法として、保育者養成校の授業内でICTを活用したアクティブ・ラーニング型の授業がどれほど取り入れられ、ICTを活用した授業やアクティブ・ラーニング型の授業が学生にとってどのような影響を与えうるのか検証することを目的とする。

## 2. ICTを活用した授業について

ICTとは、情報通信技術（Information and Communication Technology）の略称で、情報処理技術と通信技術を組み合わせた技術の総称で、主にコンピュータやインターネット、スマートフォン、タブレット

トなどのデジタル技術を指す。ICT 技術は、情報の収集、処理、伝達、保存、利用などの様々な場面で利用されている。ICT の利用により、情報の収集や処理が効率化され、コミュニケーションや情報共有が容易になる。また一方で、ICT の利用には、情報のセキュリティやプライバシーの問題、情報格差の問題、過剰な情報による情報過多の課題もある。これらの課題に対処するためには、適切な法律や規制、教育や啓発活動が必要となるのである。

ICT を保育者養成校で活用した授業展開を行うことで、学生自身が実物とデジタルでの視点の違いに気づき、保育者としての学びとなり、保育の質の向上へとつながっていくことが期待されるのではないだろうか。また ICT を取り入れることによって、様々な情報がより身近に感じられ、保育に関する必要な情報の収集や知識の蓄積につながっていくのではないかと考える。

### 3. アクティブ・ラーニング型授業について

アクティブ・ラーニング型授業とは、学生たちが受動的に情報を受け取るのではなく、積極的に参加し、自ら考え、問題解決に取り組むことを重視した授業スタイルである。文部科学省によると、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的 能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」<sup>(3)</sup>と記載されている。このアプローチでは、保育者や教師は単に知識を伝えるだけでなく、学生たちが自分で学びを構築するための環境を提供するのである。

アクティブ・ラーニング型授業は、教育の現場で広く採用されており、学生たちの学習効果や満足度の向上につながるとされている。

### 4. 保育者の資質向上

学校教育における教師には、教育基本法第9条において、「自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努められなければならない」、「その使命と職責の重要性にかんがみ、その身分は尊重され、待遇の適性が期せられるとともに、養成と研修の充実が図られなければならない」<sup>(4)</sup>とされている。教師一人一人に求められる資質能力を自ら絶えず高めていくことは、学校種にかかわらず全ての教師に求められるのです。

幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書では、幼稚園教諭に求められる資質として、「幼児を取り巻く環境が大きく変化する中、新たに幼稚園教諭に求められるようになってきた資質」<sup>(5)</sup>を挙げている。

保育者・教育者に求められる資質が明確に記載されている理由はすべて子どもたちのためであると言える。保育者や教育者は、子どもたちの身体的、感情的、社会的な発達を促進するために様々な役割を果たす。保育者は、子どもたちの日常生活の世話や安全を確保するだけでなく、遊びや学びの機会を提供し、子どもたちの興味や能力を引き出す役割を担っている。保育者は子どもたちの成長をサポートするために、適切な環境やプログラムを

計画し、個別のニーズに合わせたケアを提供するのである。

表1 幼稚園教諭に求められる資質

- ・ 幼児理解、総合的に指導する力
- ・ 具体的に保育を構想する力、実践力
- ・ 得意分野の育成、教員集団の一員としての協働性
- ・ 特別な教育的配慮を要する幼児に対応する力
- ・ 小学校や保育所との連携を推進する力
- ・ 保護者及び地域社会との関係を構築する力
- ・ 園長など管理職が発揮するリーダーシップ
- ・ 人権に対する理解

### 5. 保育者養成校での自然体験活動の授業展開

保育者養成校での自然体験活動については、学生たちが自然と触れ合い、学びを深めるための貴重な機会となる。保育者養成校では、保育者としての専門知識やスキルを身につけるために、自然体験活動の重要性を理解し、実践することが求められている。

自然体験活動は、野外での探索や観察、植物や動物とのふれあい、季節の変化を感じるなど、さまざまな形で行われることである。これにより、子どもたちは自然の中での学びを通じて、自己肯定感や創造性、環境への関心を育むことができることに学生は気づくことができる。また、保育者養成校では、自然体験活動の計画や実施方法、安全管理などについて学習し、学ぶことが求められる。学生時の学びが保育者となった時に、子どもたちに対して適切な指導やサポートを提供することができるのである。

自然体験活動は、学生たちの保育への理解や自然に対する好奇心や探究心を刺激し、豊かな学びの機会へとつなげていくことができる。保育者養成校での自然体験活動の学びを通じて、将来の保育者としての役割を果たすための基盤を築くことができることを期待している。

### 6. 1 ICT を取り入れた授業内容

実 施 校 H 県 H 短期大学 1 年生  
 H 県 M 短期大学 2 年生  
 授 業 科 目 こどもと環境・乳児保育 I  
 授業実施期間 2023 年 4 月から 8 月  
 授 業 内 容 Google レンズを活用したフィールドビンゴを行う。

※注1 Google レンズ

#### ① Google レンズを活用したフィールドビンゴの活動内容

スマートフォンのアプリ、Google レンズを使用してフィールドビンゴを行う。フィールドビンゴの資料は Google クラスルーム、マイクロソフト Teams にて、データを共有して使用した。

#### ーフィールドビンゴの説明ー

ビンゴカードに書かれているアイテム（宝物）を、目や耳などの五感を使って探し出していくという遊びである。今回のビンゴカードは、「しろいもの、ふわふわの

もの、しかくいもの、かたいもの、みどりいろのもの、とがったもの、つるつるしたもの、ながいもの」の8種類のものを集めることとした。また付加したルールとして、「学校内にあるものを題に沿って探してること」「極力自然物で探すこと、ない場合は人工物でも可」ということとした。また、名前がわからないものはGoogleレンズを使用して記入すること、探したものを見つけた場所を記入して、他の学生も授業後に自身で見つけられるようにした。

表2 フィールドビンゴ 細案

①フィールドビンゴ			
5月25日(木) 13時30分から14時00分			
クラスの様子 進級児が多く、仲の良い友達関係ができている。先日、園外保育に出かけた時にA君が「先生〜！このお花なんて言う名前？」と聞いてきた。Bちゃんが「その花知ってるで！○○やで！」と教えてあげていた。A君は「じゃあこの草は？」とBちゃんに聞いて、Bちゃんは「んん〜ん。わからない。先生知ってる？」「先生もわからないわー。今度園探検持ってきて調べてみようか〜。」「うん。先生！！困るって何〜？」と話がながっていった。 子どもたちのこれなに？に答えることができ、子どもの興味・関心をもっている時に対応できるように散歩に出かけるようにする。その中でICT機器（スマートフォン）を保育内に活用した活動を行っていく。			
展開	環境構成	子どもの活動	保育者の援助
13:30	・保育者の話が聞きやすい雰囲気や、話を聞きやすい状況を作り出していく。 ・水分補給がいつでもできるように水筒を準備しておく。	○保育者の話を聞く。 ・本日の活動の内容を聞く。 ・散歩(学校内散策)でのルールを聞く。 ・危険なことを知る ・友達と違うものを探しをする。	・フィールドビンゴをすることを楽しみにし、ルールを守らないと楽しめないことを伝え、全員が楽しめるように配慮する。 ・全員にわかりやすいようにフィールドビンゴのルールの説明をする。 ※指示されたものの「写真」を撮る。 Google レンズを使って、被写体の名前を調べる。写真を撮った場所を記載する。
	・車道へ出たり、危険な場所へ入ったりしないように、気を付ける場所を確認しておく。 ・遊びに夢中になって、一人で行動してしまわないように、友達と2人以上で行動することを伝えておく。	○園外保育(学校周辺※今回は学校内)に出かける。 ・「フィールドビンゴ」をする。 ・しろいもの、ふわふわのもの、しかくいもの、かたいもの、みどりいろのもの、とがったもの、つるつるしたもの、ながいもの ・8種類のものを集める。	・子どもたちが探している姿を見守る、危険なことがないように見守る。 ・子どもたちが探しているものが見つからなかった時に、一緒に探して、子どもたちのやる気が保たれるように声掛けをしていく。 ・Google レンズの使い方がわからない子には、使い方を説明して、使えるように伝えていく。
14:00		○見つけたものを発表をする。 ・フィールドビンゴで見つけたものを発表する。	・フィールドビンゴの活動であるが、ビンゴ出来た子以外にも、誰も見つけていないものを見つけている子や、詳しく調べてきている子などを認め、満足感が味わえるようにする。
14:20			

校内フィールドマップ		
 ふわふわしたもの ①芝生 ②カンザン桜 ③	 かたいもの ①草村 ②第22回卒業記念品 ③	 しろいもの ①造形室 ②バジャント胸像 ③
 しかくのもの ①自治会室裏 ②棚 ③	 とがったもの ①教会 ②十字架 ③	 みどりいろのもの ①バクタン園 ②園校の門のとこ ③
 ながいもの ①造形室前 ②ホウキ ③	 きいろいもの ①食堂前 ②ハンジー ③	 おおきいはっぱ ①掲示板裏 ②ワシントンヤシ ③

①見つけた場所 ②見つけたものの名前 ③写真


図1 フィールドビンゴ1

校内フィールドマップ		
 かわいもの ①事務室前 ②石 ③	 しろいもの ①食室前 ②ドウダンツツシ ③	 とがったもの ①百年記念館 ②十字架 ③
 しかくのもの ①事務室前 ②ダイキンの室外機 ③	 きいろいもの ①花壇 ②ハンジー ③	 おおきいはっぱ ①事務室前 ②ソテツ ③
 ながいもの 鉄塔	 しろいもの ①事務室前 ②ハンジー ③	 おおきいはっぱ ①事務室前 ②ハンジー ③

①見つけた場所 ②見つけたものの名前 ③写真

図2 フィールドビンゴ2

## フィールドビンゴ

 しろいもの 雲：空	 ふわふわしたもの 綿毛：土手	 しかくのもの 壁：森に行く道
 かたいもの 春坂：道路	 フィールドマップ	 みどりいろのもの 先生：食堂前
 とがったもの 木の枝：広場	 つるつるしたもの たま：1号館上	 ながいもの 不明：池

写真&名前&写真を撮った場所

図3 フィールドビンゴ3

## フィールドビンゴ

 しろいもの ヒメジョオン 子育て支援の近く	 ふわふわしたもの 雲 空	 しかくのもの 自動販売機 3号館の前
 かたいもの 音板 西校の門のとこ	 フィールドマップ	 みどりいろのもの バクタン園 西校の門のとこ
 とがったもの キミジバフウ 広場	 つるつるしたもの ナナホシテントウムシ 3号館前の花壇	 ながいもの 道 西校に上がる道と

写真&名前&写真を撮った場所

図4 フィールドビンゴ4

学生の感想1

・フィールドビンゴについて

できるだけ自然物というルールがあったおかげで人工物に頼らずツルツルしたものなど見つけれられた。更に、絶対見つけてやる！という気持ちになったため、細かく草花を見たり周囲を見たりして観察できたと思う。そのルールがなかったら私は間違いなくほぼ人工物でフィールドビンゴを埋めていたと思う。

大学生でも30分間思いっきり楽しめたので子どもたちはもっと楽しく感じるのではないかと思った。年齢に合わせて3文字に限定！などやっていくと遊びが発展していくのかなと思った。

学生の感想2

・フィールドビンゴについて

子どもたちもそうですが、私たちも外に出て散歩感覚で遊べるのはとても楽しい時間です。中でも、ただ歩く、景色を見ると言うより、何かを探す・発見するということが目的になるとよりワクワク度が高まったり、今回のように「誰も被らないこと」というルールを作ることで競争心が芽生えたりするのでより一層楽しさが増すと学びました。

一考察一

「絶対見つけてやる！という気持ちになったため」「私たちも外に出て散歩感覚で遊べるのはとても楽しい時間です」では、座学では感じる事ができない、演習授業内で学生が自らの意思をもって、授業に取り組めた結果であると感じた。

「細かく草花を見たり周囲を見たりして観察できたと思う」と、普段生活している学校での活動であったが、新しいものの発見ができる活動となった。フィールドビンゴの活動を通して、周囲の環境を知るきっかけ作りとなった。

「何かを探す・発見するということが目的になるとよりワクワク度が高まり」という部分では、子どもたちにも感じてほしいところである。何かをさせられている活動ではなく、自らが進んで能動的に活動に取り組んだ成果である。

また、「年齢に合わせて3文字に限定！などやっていくと遊びが発展していくのかなと思った。」「誰も被らないこと」というルールを作ることで競争心が芽生えたりするのでより一層楽しさが増すと学びました」と、この遊びをさらに楽しくするためには、どのような工夫があれば良いのか、どのようなルールを付加することが良いのかと考えながら遊ぶきっかけとなった。

6.2 能動的な学びについて

フィールドビンゴの活動において、学生が自発的に授業の取り組む姿や積極的に行動する姿から、能動的な活動となったことを窺い知ることができる。

幼稚園教育要領には、「自然な心身の成長に伴い、幼児が能動性を発揮して環境と関わり合う中で状況と関連

付けて生活に必要な能力や態度などを獲得していく過程が発達である」<sup>(1)</sup>と記している。また、幼児理解に基づいた評価では、「幼児期の発達を促すために必要なこととして、幼児期の能動性と言う視点を重視していますが、それについては以下のことが大切である。

- ・人は周囲の環境に自分から能動的に働きかけようとする力をもっていること。
- ・幼児期は能動性を十分に発揮することによって発達に必要な経験を自ら得ていくことが大切な時期であること。
- ・能動性は、周囲の人に自分の存在や行動を認められ、温かく見守られていると感じる時に発揮されるものであること。」<sup>(6)</sup>と記されている。

子どもたちの遊びの中には能動的な学びが多く含まれている。例えば、「この遊びをこの遊び方で遊びなさい」と言われた遊びを楽しんで取り組むだろうか。それよりも子どもたちが考えた遊びで、内容も考え遊ぶ方が楽しいのは考えるまでもない。その遊びこそが能動的な遊びである。自らの力で、自らのしたいことに没頭して取り組む遊びこそが子どもたちの「したい」という気持ちが生まれ、遊びに没頭することができるのである。

6.3 環境を通して行う保育について

フィールドビンゴを行う上で、様々な環境を活用して行い、その環境を活動展開していくのかを考える必要がある。保育を行う上で、保育者が意図して環境を構成する必要がある。その環境構成とは、物を準備することや遊びの準備をすることではない。保育者が保育的な意図をもって生活や遊びが展開でき、また遊びを発展させていけるようにねらう必要がある。

汐見は、「環境を通しての教育ということが言われたけれども、つまるところ、魅力的な環境が提供されれば、子どもたちは勝手に育っていくんですね。ですから保育者が一番しなきゃいけないことは、環境、つまり園庭や地域資源を魅力的にすることなんです」<sup>(7)</sup>と述べている。それは、環境を通して行う保育は、子どもたちが自然な形で成長し、学びを促進するためのアプローチであり、このアプローチでは、子どもたちが身の回りの環境や自然と触れ合いながら、自己表現や問題解決能力、社会性などを発展させることができることを示唆している。

具体的な環境を通した保育の手法としては、以下のようなものがある。

自然環境の活用

自然の中での活動や自然物の観察を通じて、子どもたちの好奇心や探究心を刺激する。公園や森林、庭園などの自然環境を活用し、季節の変化や生物の生態系を体験することで、子どもたちの感性や環境への関心を育む。

遊びの中からの学び

子どもたちが自由に遊びながら学びを進める方法である。遊びを通じて創造力や問題解決能力を養い、自己表現や社会性を発展させる。遊びの中での役割分担や協力も促し、子どもたちのコミュニケーション能力を育むことができる。

美的環境の整備

色彩や音楽、美術などの要素を取り入れた環境づくりを行う。子どもたちが美しいものに触れることで感性や創造力を刺激し、豊かな表現力を育む。

**社会的環境の構築**

子どもたちが他の子どもや大人との関わりを通じて社会性を発展させるための環境を整える。共同遊びやグループ活動を通じて協力やコミュニケーション能力を養い、他者への思いやりや共感力を育むことができる。

環境を通して行う保育は、子どもたちが遊びの中で能動的な遊びの中から、自然な形で成長し、楽しみながら学んでいくのである。子どもたちが自己を表現し、自己肯定感を高めながら、多様な経験を通じて遊びを学びへとつなげていくのである。

無藤によると、「子どもが熱中、集中できるあそびが、子どもにもたらされる都市、地域環境、すなわち子どもたちの発見や探索、創作の気持ちを刺激する都市、地域環境ではないでしょうか。豊かな自然と歴史に基づく、積み重ねられた文化、子どもの固有の文化が認められる都市、地域環境である必要があります」<sup>(8)</sup>と述べている。また、桑原は、「幼児の教育は、放任や傍観あるいは単純に「待つ・見守る・援助する」ことではない。そうではなくて「物の背後に教育者の意図を隠す」といった意味で「間接教育」は、「隠れた指導をすること」とも言える。それは、意図的で積極的な営為であることが明らかとなる。とりわけ「環境を通じた教育」あるいは「環境づくり」は、事前に子どもの活動を先取りしなくてはならないような構想力を必要とする」<sup>(9)</sup>と論述している。

環境を通して行われる保育には、そこに関わる保育者の意識が大いに関わってくるのである。一人一人の保育者によって保育環境についての考え方や感じ方は様々であろう。保育者自身の自然体験活動の有無や、保育者が子どもたちと環境がどのように出会うのか、想像する力が求められるのである。

**6.4 自然体験活動について**

自然体験活動とは、自然環境での学びや体験を通じて、幼児や子どもたちに自然に対する理解や関心を深める活動である。これは、屋外での活動や自然環境への触れ合いを通じて、子どもたちが自然の中で学び、成長する機会を提供することを目的としている。

自然体験活動では、例えば森林や公園での散策、植物や動物の観察、地形や地質の探究、季節の変化の観察など、さまざまな活動が行われる。これらの活動は、子どもたちが自然の中で直接的な経験を通じて学び、自然界の仕組みや生態系のつながりを理解する手助けとなるのである。幼児の感性や好奇心を刺激し、自然への興味や関心を育むだけでなく、運動能力や社会的スキルの発達にも寄与する。

子どもは、自然体験活動をするときに、自然の変化に気付きながら遊ぼうと考えているのではなく「楽しいから」自然物を遊びに取り入れて遊ぶのである。その時に一緒に遊ぶ友達との会話や、自然物を遊具に見立て、遊ぶ中で感性を育てたり、遊び方を工夫したりしていくのである。

汐見は、「自然」は人工的に用意された教材では考えられないぐらいの偶発性と多様性があります。とにかく素通りさせてくれない、引っ掛かる教材。五感を通して多彩に気づきを得て、子ども一人ひとりの興味・関心から様々な創造性を育んでくれます」<sup>(10)</sup>と自然の中で遊ぶことのメリットを示唆している。

また、文部科学省によると、「体験活動とは、文字ど

おり、自分の身体を通して実際に経験する活動のことであり、子どもたちがいわば身体全体で対象に働きかけ、かかわっていく活動のことである。この中には、対象となる実物に実際に関わっていく「直接体験」のほか、インターネットやテレビ等を介して感覚的に学びとる「間接体験」、シミュレーションや模型等を通じて模擬的に学ぶ「疑似体験」があると考えられる。しかし、「間接体験」や「疑似体験」の機会が圧倒的に多くなった今、子どもたちの成長にとって負の影響を及ぼしていることが懸念されている」<sup>(11)</sup>と記載されている。それは直接体験の機会や場の減少が示唆されているのである。

それらの影響は、現在の親にも見受けられる。親自身の幼少期に自然の中で十分に遊んだ経験がない方が多くなってきている。社会全体の生活様式が大きく変化したことが要因であり、都心部だけでなく自然豊かな地域でも、外遊びをあまりしていないという状況であることが予想されるのである。

森と自然を活用した保育・幼児教育ガイドブックには、「これからの時代において人間に必要とされることは、与えられた知識の再生産ではなく、幅広い知識と柔軟な思考に基づき、新しい知や価値を創造する力や、自ら課題を発見し解決する力、コミュニケーション能力、物事を多様な観点から考察する力、様々な情報を取捨選択できる力になっていくといえます。こうした力は、まさに、序章で提示した「非認知能力」であり、それを育む「自然体験」や、効果の高い「幼児期」からの教育を行うことが、これからますます重視されると考えられます」<sup>(12)</sup>と記載されている。自然体験活動を保育者養成校の授業に取り入れることによって、学生自身に自然に対する気づきや学びへとつながっていくのである。学生が自ら能動的に学ぶアクティブ・ラーニング型の授業が展開できるのである。

**6.5 保育の中の「モノ」・「ヒト」・「コト」**

子どもに関わる「モノ」「ヒト」「コト」に変化を加えることで、子どもの考え、行動が変化し、主体的に学ぶことができ、成長へとつながる。この「モノ」「ヒト」「コト」を考えることが環境を通して行う保育なのである。

直接的な指導も、その人間を通して子どもたちが何を感じ、どう学ぶのかという視点から見れば、人が学ぶ成長することにおいて、「直接的」というのはひとつもあり得ないのかもしれない。常に直接的な指導の中に、間接的な要因が加わって、子どもたちに伝わっていくのである。そう考えると、やはり常に子どもたちをどう育てるかという考えよりも、どう育つ環境を整えるかということを保育者が考え続けなければならないのである。

子どもたちの環境において「モノ」が充実していることが、遊びを発展させ、想像力を培う原動力となる。遊びに必要な「モノ」があるだけで、子どもたちはその「モノ」を通じて、どんどん遊びを発展させていく。しかし、時には、「モノがない」ということが子どもの遊びが多様に広がる場合もある。ないということも一つの環境と呼べるのである。

幼児教育での「ヒト」とは、「子ども、保護者、保育者、祖父母、給食の先生、バスの運転手、地域住民など」が挙げられる。子ども達が直接関わることでできる人は、重要な人的環境であると考えられる。

「コト」とは、できごと、体験を通じて学ぶこと、事象である。行事であったり、設定あそびであったり、子

どもたちのあそび体験や経験を広げていくものである。

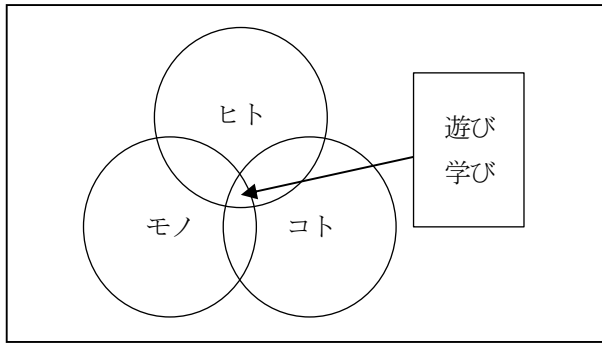


図5 幼児教育におけるヒト・モノ・コト

主体的に関わることで、ヒト・モノ・コトが生きてくるのである。ヒト・モノ・コトが充分にあるから、それでよいのではなく、子ども達が主体的にヒト・モノ・コトに関わることによって、遊びの中の学び、または学びの中の遊びへとつながっていくのである。

7. まとめ

保育者養成校でのICTを活用したアクティブ・ラーニング型授業において、学生の提出データや感想などから積極的な参加が認められた。その中から、自然体験活動の有用性はもちろんのこと、他にも「ICTを取り入れること」「能動的学習の意義」「環境を通して行う保育」「モノ・ヒト・コトの与える影響」などのキーワードが浮かび上がった。

保育の中にICTを取り入れることは、子どもたちが現代社会で必要とされるスキルを身につけるため今後役立つことが理解できる。例えば、スマートフォンやタブレットを使って、子どもたちは基本的な使用方法やアプリの使い方などを学ぶことができる。また、インターネットを使って、世界中の情報にアクセスすることも可能である。ICTを取り入れることで、子どもたちの創造性や問題解決能力を促すことができる。

ただし、ICTを取り入れる際には、ICTについての知識や危険性についても認識する必要がある。保育者は、子どもたちが安全にインターネットを使うことができるように、適切な監視や指導を行う必要がある。また、ICTを使った活動は、子どもたちが自然と触れ合う活動とバランスを取るように心がけるも求められるのである。

保育者になってから自然環境や自然体験について学ぶのではなく、保育者養成校の授業内でもそれらの基礎となることを学ぶことは重要な課題である。

保育内でICT機器をどのように活用し、どのように保育の溶け込ませていくのかということは今後も考察を深めていかなければならない。ICT機器を活用して、自然体験活動ができる、もしくは自然体験活動を育むためのICT機器の使用ということを様々な方面から検討し、活用方法を今後も模索していきたい。

注釈

(注1)

Google レンズ

Google レンズは、視覚ベースのコンピューティング機能のセットです。目の前にあるものを認識し、その情

報を使って、テキストのコピーや翻訳を行ったり、植物や動物の種類を特定したり、場所やメニュー、商品、見た目が似ている画像を検索したりするなど、さまざまな便利な使い方ができます。

目の前にあるものを調べる

Google レンズを使用すると、目の前にあるものを検索できます。写真やカメラ、さまざまな画像を使って、見た目が似ている画像や関連するコンテンツをインターネット上で見つけて結果を表示できます。

Google レンズの仕組み

Google レンズは写真に写っている被写体を他の画像と比較し、その類似性と関連性に基づいて比較対象の画像をランク付けします。また、写真の被写体を認識して得られた情報を使って、関連する検索結果をウェブから見つけます。さらに、役に立つその他のシグナル（画像をホストしているサイト上の単語、言語、その他のメタデータなど）を使用して、ランキングと関連度を決定します。

Google レンズが画像を分析する際に、考えられる複数の結果を生成し、関連度に基づいてそれぞれの結果をランク付けしたり、結果を1つに絞り込んだりする場合があります。たとえば、Google レンズが犬の画像から、95%の確率でジャーマンシェパード、5%の確率でコーギーだと判断したとします。このような場合、レンズは見た目が最も似ていると判断したジャーマンシェパードのみを結果に表示する場合があります。

また、Google レンズは、写真内の特定の物体にユーザーが関心を持っている判断した場合、その物体に関連する検索結果を返します。たとえば、画像にジーンズやスニーカーなどの特定の商品が含まれている場合、Google レンズはその商品の詳細情報を示す検索結果や、その商品のショッピングの検索結果を返す場合があります。また、利用可能なシグナル（商品に対するユーザーの評価など）に基づいてそのような検索結果を返す場合もあります。別の例として、画像内のバーコードやテキスト（商品名や書籍名など）を認識した場合に、その物体の Google 検索の検索結果ページを返す場合があります。

<https://lens.google/intl/ja/howlensworks/>  
(2023.12.28 参照)

引用・参考文献

- (1) 文部科学省 (2017)「幼稚園教育要領」
- (2) 寺本真哉・秋吉博之 (2018)「幼児期の原体験に關する一考察—大学2年生への調査から—」『日本科学教育学会研究会研究報告』25巻(4号) 81-86頁
- (3) 文部科学省 (2023.12.28 参照)  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo\\_3/004/siryo/\\_icsFiles/afieldfile/2015/09/04/1361407\\_2\\_4.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo_3/004/siryo/_icsFiles/afieldfile/2015/09/04/1361407_2_4.pdf)
- (4) 文部科学省 (2006)「教育基本法」
- (5) 幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書 (2002)「幼稚園教員の資質向上について—自ら学ぶ幼稚園教員のために—」
- (6) 文部科学省 (2019)「幼児理解に基づいた評価」3頁
- (7) 国土緑化推進機構・編著 (2018)「森と自然を活用した保育・幼児教育ガイドブック」風鳴舎 13頁
- (8) 無藤隆他 (2019)「教育・保育の現在・過去・未来



- を結ぶ論点 汐見稔幸とその周辺」エイデル研究所  
147 頁
- (9) 桑原昭徳 (1992) 「教育方法学研究 第8巻倉橋惣  
三の幼児教育方法論 (1) 「間接教育」論の生成過程」  
日本教育方法学会紀要 157 頁
- (10) 国土緑化推進機構・編著 (2018) 「森と自然を活用  
した保育・幼児教育ガイドブック」風鳴舎 12 頁
- (11) 文部科学省 (2023年8月21日参照)  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/  
seitoshidou/04121502/055/003.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121502/055/003.htm)
- (12) 国土緑化推進機構・編著 (2018) 「森と自然を活用  
した保育・幼児教育ガイドブック」風鳴舎 36 頁





## 湊川短期大学紀要 投稿規程

### 第1条 (目的)

湊川短期大学紀要(Bulletin of Minatogawa college 以下「本誌」という)は本学教員が研究活動の成果を内外に発表し、研究成果の共有や一層の研究活動の発展を目指すことを目的とし、年一回以上発行する。

### 第2条 (投稿者の資格)

投稿者(本誌に投稿出来る者)は、原則として本学教員(非常勤教員も含む)に限る。ただし、湊川短期大学紀要編集委員会(以下「編集委員会」という)が特に認めた場合はこの限りではない。

### 第3条 (執筆代表者)

本誌に投稿した原稿において一番目に氏名を記載している執筆者を執筆代表者とする。執筆代表者は、本誌の同一号において、一つ原稿に限り執筆代表者となることが出来る。

### 第4条 (原稿の種類)

原稿の種類は、「原著論文」、「作品」、調査・実験・観察結果等を報告する「研究報告」、「総説」、「学会報告」、最新情報の「論評」や「書評」等とし、未発表のものに限る(ただし、「学会報告」についてはこの限りではない)。また完成原稿を提出することとする。

### 第5条 (原稿掲載の可否)

原稿掲載の可否は編集委員会で決定する。また編集委員会の判断により、リライト、縮小等を求めることが出来る。

### 第6条 (投稿の方法及び締め切り)

原稿の投稿に際しては、事前に申し込みを行い、別に定める「湊川短期大学紀要執筆要項」に従い、原稿の種類を明記した上で、定められた期日までに編集委員会に提出しなければならない。

### 第7条 (校正)

校正は、投稿者の責任において行い、初校のみとする。校正段階での内容の変更は認められない。校正は投稿者に初校を返却した日から定められた期日までに校了し、編集委員会に提出するものとする。校正は誤字・脱字などの訂正を原則とするが、編集委員会が特別に認めた場合はこの限りでない。

### 第8条 (経費の負担)

投稿料は無料とする。ただし、カラー印刷や編集委員会の許可による大幅な訂正等で、増ページが生じた場合などは、投稿者の負担とする。

### 第9条 (別刷)

別刷は30部を無料で、投稿者に配付する。ただし30部を超えて希望する場合は、投稿者の負担とする。

### 第10条 (編集委員会)

編集委員会は、図書委員会の委員で構成し、必要に応じて別に委員を委嘱できるものとする。

### 第11条 (著作権)

本誌への掲載論文等の著作権はそれぞれの著作者に属するが、各著作者は湊川短期大学に対して、当該論文等の出版権・複製権・公衆送信権等の利用につき、本誌の電子化・公開に必要な限度でその権利を湊川短期大学が行使することを許諾するものとする。

### 第12条 (その他)

この規程に定めた以外の事柄については、編集委員会の判断によることとする。

附則 この規程は、平成21年7月30日より施行する。なお旧規程は施行日より廃止とする。

## 湊川短期大学紀要 執筆要項

- 原稿の記述は、表題(和文および英文)、執筆者名(和名およびローマ字)、所属(大学名及び専任・非常勤の別、幼稚園・保育所名など)、和文要旨(300字以上400字以内)、もしくは英文要旨(200語以上300語以内、和文要旨も記載すること)、キーワード5語以内(和文、もしくは英文(英文の場合は和文キーワードも記載すること))を添付し、本文および注、文献、表・図、資料の順序に記載する。
- 章、節などの見出し区分は、ポイントシステムを用い、次の順とする。
  - (大見出し), 1.1 (中見出し), 1.1.1 (小見出し), 1) 片括弧, (1) (両括弧)
  - 本文は、書き出し及び改行後の書き出し部分を1マス空け、句点は「。」とし、読点は「,」(コンマ)とする。
  - 注には通し番号をつけ、本文中の該当箇所の右肩に注1), 注2)のように通し番号をつけ、本文と論文末の文献表との間に一括して番号順に記載する。注記の見出し語は「注」とする。
  - 文献は、下記の様式により、論文末尾に著者名のアルファベット順に一括して記載する。なお、欧文(ローマ字)誌・書名は、イタリックとする。また、著者が複数の場合は、その全員を記載する。その際、著者名と著者名の間は、中ボツ[・]でつなぐ。
    - 雑誌論文の場合  
著者名(発行年)「論文表題」『掲載雑誌名』巻(号), ページ数。  
※欧文雑誌の場合  
著者名.(発行年)論文表題, 掲載雑誌名, 巻(号), ページ数。  
【記載例】  
鈴木一郎(2000)「総合学習における教育実践学的存在論」『総合学習』4, pp. 38-39.  
James. M. (2004) Japanese Education, *Journal of Education*, Vol.16, pp. 58-59.
    - 著書の場合  
①著者名(発行年)『書名』出版社・発行所名, 発行年, ページ数。  
②著者名(発行年)「論文表題」編者名編『書名』出版社・発行所名, ページ数。  
※欧文著書の場合  
著者名.(発行年)論文表題. In 編者名(ed), 書名, 出版社・発行所名, ページ数。  
【記載例】  
鈴木一郎(1998)『図で読むスクールカウンセリング』ミノルタ書房, pp. 33-45.  
Chales.A., Singlehood. In Macklin.E. Rubin.S (ed), (1987) *Families in postmodern society*. Oxford University Press, pp. 34-35.
- 図・表は原稿本文と別紙を用いて作成する。そのまま写真製版して印刷できるようにする。ただし、特殊な印刷については(例えばカラー印刷等)、その実費を投稿者が負担する。原稿本文に、およその挿入位置等を指定する。
- 表のタイトルは表の上に、図のタイトルは図の下に書くこと。また図と写真は区別せず、図として一連の番号を付けること。
- 原稿はA4判タテ用紙でワープロソフト(Microsoft Office Word)を使用し、40字×40行で作成すること。原稿枚数は図表および注を含めて、16枚以内とする。
- 原稿は、原則としてワードファイルで電子メールに添付して提出すること。併せて、プリントアウトしたものを1部提出すること。
- 校正は赤字で初稿に直接記入すること。大幅な修正が必要な場合は必ず紀要編集委員に承諾を得ること。

編集委員会  
委員長 静 和 美  
委員 溝 上 彩

湊川短期大学紀要 第60集

令和6年3月1日 発行

発行人 浅井 祐子

発行所 湊 川 短 期 大 学  
〒669-1342 兵庫県三田市四ツ辻 1430  
電話 (079) 568-1858 (代)  
FAX (079) 568-1568

印刷所 交友印刷株式会社  
〒650-0047 兵庫県神戸市中央区港島南町5丁目4-5  
電話 (078) 303-0088  
FAX (078) 303-1320